



イフ

秋華

プロローグ

夢は、諦めず努力し続ければかなうもの。

そんな事を言う人がいる。

夢は、夢であるから夢なのだ。

そんな事を言う人もいる。

ぶっちゃけ言ってしまうえば、どちらが正しくて、どちらが間違っているとは言えない。

どちらも正しければ、どちらも間違っているのだから。

でも、俺に言わせれば、後記の方が正しいと思っている。

いや、正確に言えば、前記が当てはまるのは、極少数であるから。

そして、身の丈に合った夢は、夢ではないと思うから。

みんなは子供の頃、どんな夢を持っていただろうか？

プロ野球選手になりたい。

俺がガキの頃は、支持率の高かった夢だ。

で、プロ野球選手になれた人が、どれほどいるだろう。

途中で諦めたからなれなかったと言うかもしれないが、仮に諦めずに頑張っても、プロになったとしても、プロ野球選手の数はある程度決められているのだから、プロ野球選手になる夢を叶えられる人は、結局変わらない。

夢を叶えるという事は、結局競争って事になる。

歯医者になりたい。

みんながなっても、それで生活できるようになる人は、限られる。

患者数が増えるわけでもないのだから。

でも、みんな一度は歯医者さんになって、夢を叶えているではないのか？

そう、夢を叶えると言う事は、やりたい事で、生活できるだけのお金を稼ぐという事なのだ。

小説家になりたい。

だったら、ブログにアップしていればいい。

漫画家？

書けばいいのだ。

ほら、夢はかなうじゃないか。

俳優になりたい？

ギャラ無し、むしろ金払うなら、いくらでもやらしてやるよ。

でも、そうじゃないんだ。

お金が稼げて、生活できなければ、それは夢がかなった事にはならないのだ。

子供だったあの頃の俺が、そんな事を知る術は無かった。

ツラがちょっとばかり良かった俺は、調子にのっていた。

イケメン、美形、二枚目、色々言われていた。

俳優になったら？

なれるなれる。

みんなのそんな言葉で、俺の夢はいつのまにか俳優になる事だった。

高校の頃、学校に通いながら、俳優養成所に通った。

プロダクション直結の養成所で、入った頃はかなりちやほやされた。

すぐにエキストラの仕事なんかやるようになった。

演技力なんて、全くない。

ただツラが良いだけで、仕事 came。

テレビでのちょい役。

今有名な俳優と、同じところでやっていた。

とにかく楽しかった。

それで、少ないながらもお金が貰えた。

プロだ。

俺もプロになったと実感したんだ。

でも、良かったのはそこまでだったのかもしれない。

ココは、いやこの世界だけではない。

社会は全て競争社会なんだ。

プロデューサーに、「次はレギュラーで。」なんて言われて喜んでいて。

でも、恥ずかしい演技はできないから、俺は必至に色々な事にチャレンジした。

ダンスや音楽のレッスン。

お金はかかったが、自分の力を上げる為の先行投資だ。

舞台俳優。

演技にも色々ある事を知ったし、発声も変わった。

俺は、自分の実力が上がっている事を感じていた。

しかし、プロデューサーのあの言葉以降、そんな話は全く来なくなっていた。

あのドラマのレギュラーの話は、別の奴に話がいった。

演技力でも、ルックスでも、人気でも、負けてはいない。

でも、プロダクションの力で負けていたんだ。

それだけじゃない。

俺自身の営業力でも、負けていた。

まあ、負けたというよりは、俺は全く営業などやっていない。

力をつける事、演技力向上が、俺の使命だと信じているから。

結果的にこれが間違いだったと、今になって思うのだけど、この世の中、実力がある程度有れば、後は営業力の力だった。

生活は、最低レベルの生活だった。

それでも、俳優として活動していたから、俺は頑張った。

辛いバイトも、我慢して続けた。

舞台も続けた。

チケットも、友達に売りさばいた。

まだ、この頃は良かった。

でも、毎回毎回友達にチケットを送っていたら、最初は来てくれた友達も来なくなり、気がついたら連絡もとれなくなっていた。

相手の立場に立って考えれば簡単だったのだけど、そりゃ毎回毎回買わされる身になれば、それはいやだろう。

それに、連絡するのはその時だけなのだ。

ちっとも友人らしいつきあいなんてしてない。

金も時間も無いから、遊びになんていけるわけもない。

チケットを買う、買ってもらうだけの関係。

それは友人ではない。

結局、俳優の仕事関係以外の友達は、二人だけしか残らなかった。

そして、そのうちの一人が、俺の妻となった。

今振り返ると、俺の友達は、残ったこの一人だけだったのかもしれない。

後は全て、仕事関係の友人。

皆、金によって繋がれたつき合い。

俺はぞっとした。

皆、友達だと言いながら、利害関係が無くなれば、つき合いなんてなくなるんだ。
三十歳から四十歳を越えてる、男性社会人の方々、考えてみて欲しい。
仕事関係以外の友達で、今も年数回以上遊んだりする友人が、どれくらいいるか。
そんなに多くは無はずだ。
かつて友達だと思っていた数多くの友達は、そのほとんどがその場限りだったのだ。
友と呼べる人は一人、そして妻。
俺はこれだけの中で、俳優という夢を追い続けた。
これで生活できるようになるために、自分自身の向上に努めた。
年300万円の所得。
これが2年続いたら、子供を作ろう。
そんな約束を妻としていた。
しかし、この約束が果たされる事は無かった。
300万円なんて、サラリーマンをやっているならば、簡単に手に入る額だ。
でも、俺は生まれてから今まで、それを達成する事はかなわなかった。
今でも、演技力やルックスで、テレビに出ている有名人に負けているなんて思っていない。
ただ、俺を認めてくれる人がいなかった。
ただ、俺が俺自身を売り込めなかった。
そして結局、妻と共にかなえようと頑張った夢を見る事なく、妻は亡くなった。
友達だと思っていた奴に、舞台チケットを買うかわりに、入ってくれと言われ、入った生命保険。
無い金から無理矢理かけていた保険だったが、妻の死で、俺に少しばかりの金が入った。
俺は五十歳を越えたところで、俳優を辞めた。
ずっと続けていた、コンビニのバイトも辞めた。
年金なんて払っていない。
このお金がなくなれば、俺はもう一文無しで職無しだ。
まあ、それでもいい。
俺は努力しても報われない世の中に疲れたんだ。
この金が無くなるまで、世界でも旅するかな。
そしてきっと、この地球上のどこかで、俺は死ぬんだ。
もし、俳優なんかやらなければ、俺はどんな人生を送っていたんだろう。
もし、身の丈に合った何かを見つける事ができていれば。
もし、俺の力を認めてくれる、力のある監督と出会ってれば。
もし、俺に、少しでも営業力が有れば。
もし、結婚したところで、普通にどこかに就職してれば。
もし、夢が簡単にかなえられる力が、俺にあれば。
もし、若かった頃に戻れたなら・・・
しかし、「もし」はあくまで「もし」なんだ。
今の俺に与えてもらえるものは何もない。
1年程、世界を旅して、今までの辛かった人生を取り返すつもりで遊んだ後、俺は南極へと来ていた。
特に理由はない。
いや、理由は有るが、大した理由ではない。
死ぬには良いところだと言う事と、温暖化により永久凍土がどれだけ溶けているのか見たかっただけ。
ある国の南極ツアーに参加し、折を見て俺はツアー団体から抜け出す。
この場所は、10年前はまだ、氷の中にあつたらしい。
しかし、見渡す限り、氷を探す方が難しいただの岩場。
一つ岩を動かしてみた。
虫がいた。

こんな所に、こんな虫がいるのか。

見た目普通のゴキブリのようだ。

でも俺には、こんな所で生きている一匹の虫が、とても儚く、でもたくましく、愛すべき存在に見えた。

手を差し出すとゴキブリ、いや、ハッキリとこの名前を言うのもアレなのでGとしておこう。

Gは、俺の掌へと昇ってきた。

俺は優しくGを包む。

この寒さから、守るように。

こんな寒い所にGなんておかしい。

そう思う中、俺の意識はなくなっていった。

終わりから始まりへ

目の前に、神がいた。

神は言う。

「お前に、能力を与えよう。」

俺は問う。

「何故そのような能力を？」

神は言う。

「一寸の虫にも五分の魂、助けられたものは、必ずその恩に報いる。」と。

俺は気がついた。

ああ、もしかしてあの時のGか。

でも俺は、もうこれから死ぬのだ。

今更、何が俺に与えられたとしても、もう遅い……

光が見えた。

天国か？地獄か？

俺は、光へと飛び込んだ。

目が覚めた。

どうやら先ほどの神は夢だったらしい。

俺はベットに寝ていた。

天井には、天国へ誘う光だと思われた光を発する、電灯がついていた。

ようやく意識がしっかりしてくる。

俺は南極ツアーの団体から抜け出して、死ぬ予定だったんだ。

寒さの中で眠れば、死ぬかと思っていただけ、見つかって助けられてしまったらしい。

こんなところで、俺は半端な奴なんだな。

苦笑いが出た。

俺は起きあがった。

周りには誰もいない。

体を少し動かしてみるが、特に問題は無かった。

むしろ南極に行く前よりも、体の調子は良いくらいだ。

それよりも、いったい此処は何処だろう？

俺は部屋の中を見渡す。

病室である事はわかる。

ベットには、ナースコール用ボタンが付いているし、俺の名前、西口悠二と書かれているから。

壁にはカレンダーが付いていた。

2008年6月と書かれていた。

妻が亡くなって、丁度1年後のカレンダーだ。

南極に行ったのも、丁度1年後だったから、何年も寝ていたなんてオチはなさそうだ。

「あれ？、日本？」

病室の雰囲気もそうだけど、カレンダーは明らかに日本語だ。

俺はベットから立ち上がる。

「ん？なんだ？」

また俺は不思議に思った。

カレンダーの文字が、はっきり見える。

俺は視力が悪かったから、普段はメガネをしていた。

老眼になると、視力が復活するのか？
そうすると逆に、近くが見えなくなると聞いた事がある。
俺は自分の手を見てみた。
はっきり見える。
近くが見えなくなったなんて事もなさそうだ。
「えっ?!」
また俺は驚いた。
自分の、歳をとって荒れてシワができていた掌が、まるで若かった頃のような手に見えた。
左手で右手を触る。
間違いなく、俺の手だし、でも若い頃のような手だ。
俺は数歩あるいて、近くの鏡の前に立った。
「あっ・・・」
今日一番驚いた。
そこに映る姿は、間違いなく30年前の俺だった。

俺が病室で目覚めた後、1年間は大変だった。
聞いた話によるとこうだ。
まず俺は、南極で倒れているところを助けられた。
パスポートを持っていたから、身元は簡単に分かったのだけれど、写真と実物が違いすぎた。
日本大使館に連絡が入り、俺の身元を確認したそうだ。
一応俳優として活動していたから、俺の情報を得るのは容易かったらしい。
そこでその姿が、二十歳の頃の俺と同じだと確認できた。
これは不思議な事だ。
日本政府は、速やかに、そして内密に俺を帰国させた。
そしてとりあえず、政府系の病院に入院する事となる。
間もなく俺は目覚めた。
その後、まず俺に、西口悠二であるのかどうか聞いてきた。
それは間違いのないから、俺はそうだとこたえる。
では、その姿はどういう事かと聞かれた。
それは俺にもわからない。
俺はそのままこたえた。
その後は、俺自身問題は無かったが、政府は俺を解放せずに、とにかく体を調べられた。
なにやら新種のウィルスが発見されたとか、そんな話も聞いたけど、1ヶ月もしないうちにそれは無くなったらしい。
ウィルスは、俺の体から離れた瞬間に死滅して、その性質も何もわからなかったようだ。
それでも1年は、政府監視の元での生活。
はっきり言って、辛かった。
辛かったけど、生きる事に悩む事はない。
はっきり言うと、金の心配がない。
しかし、やはり辛かったのだ。
金と自由、両方あってこそ、幸せは掴めるのだと思った。

解放された俺は、特に行く場所も帰る場所もない。
更には、西口悠二の名も、戸籍上から消されていた。
新たに俺に与えられた名前は、高橋光一。

ごくありふれた名字と名前の組み合わせ。
そう呼ばれてもピンとこないけれど、そのうちなれるのかもしれない。
もっとも、俺がこの先、生きていけばだけれど。
とりあえず政府からは、1000万円を貰った。
当面生活には困らない。
そして、若返った体があれば、バイトもできるし生きてはいける。
でも、働く気なんてもうない。
この世知辛い世の中、頑張った者が損をするんだ。
再び辛い思いをするなんてまっぴらごめんだ。
俺はなるべく郊外のボロアパートの一室を借りて、生きる事にした。
お金は、高橋光一の名で預金した。
ただなんとなく過ごす日々が過ぎてゆく。
特にやりたい事もなかったから。
そんなある日、部屋に一匹のGがあらわれた。
羽のついた大きいヤマトGだ。
あの寒い大陸で見た虫を思い出す。
なんとなく手をだしたんだ。
そして、「こっちこい！」って話しかけたんだ。
すると、ヤマトGは、俺の掌に乗って、俺を見つめていた。
もしかして、言葉がわかるのか？
「あそこに落ちてるティッシュを、持ってきてくれ。」
言ってみた。
するとヤマトGは、言われたとおりティッシュを持ってきた。
俺は、あの時に見た夢を思いだした。
神が、俺に能力を与えると。
助けられた恩には報いると。
Gの能力か。
Gが俺の命令を聞き、思いどおりに動かせる。
そしてGと言えば、生命力かな。
俺が死ななかったのは、そのせいか、なんとなくそう思った。
早速いろいろ試す事にした。
「あの店から、1万円札を持ってこい。」
そんな命令を繰り返してみた。
あっという間に、俺は金持ちだ。
つい数年前まで、1年かけて稼いだ金額が、たった1日で手に入った。
夜にニュースで、ゴキブリがお金を持って飛んでいたとか、レジからお金が盗まれたとか、そんなニュースが流れていた。
金を手に、少し罪悪感がわいてきた。
しかし、こんな能力、使わない手はない。
俺は早速都心に引っ越した。
都心の方が稼げるし、前まで出来なかった生活ができる。
確かに豪華な生活はできた。
お金を盗んでも、狙う場所と金額さえ間違えなければ、そう話題にもならない。
3ヶ月で飽きた。
いや、むなしかった。
全てが簡単に進む事も、つまらないものだと実感した。

だったら、この能力を使って、面白くて難しい事。

できれば、俺と同じように生きる事に苦しんでいる人々の、何か力になれたなら・・・

だから俺は、会社を作った。

「万屋イフ」を・・・

害虫退治の日々

「はい、もしもし万屋イフです。」

「あー、仕事を依頼したいんですが。」

俺は、朝から携帯電話の音に起こされてた。

「えっと、そちらで害虫駆除をしてくれるって聞いたんですけど。」

また害虫駆除の依頼だ。

俺は数ヶ月前に会社を立ち上げていた。

その名も「万屋イフ」

「何か「もし」お困りでしたら、お金と心によって、なんでもやります。」というキャッチフレーズで、ホームページを作った。

ビラもプリントアウトして、適当に家庭のポストに投函した。

最初は、チケット購入に朝から並んでくれとか、掃除してくれとか、1週間に一つくらいしか仕事が来なかった。

毎日の営業活動に比べると、割に合わない仕事量だった。

ただ、別に金が無いわけでもなく、何かに追われているわけでもないから、特に苦しいとか辛いとか、そんな事は思わなかった。

気分の赴くままに、仕事をしていた。

一月前に、害虫駆除を頼まれた。

ぶっちゃけG退治。

簡単な仕事だ。

俺はGに命令した。

この家には近づかないようにと。

家の主であるおばちゃんは、凄く喜んでくれた。

まあその時は、普通に良かったと思ったんだけど、おばちゃんの噂ってのは凄い。

その近所から、連続してG退治依頼が入った。

価格は、その程度の事だから、5000円くらい。

安すぎたのか、一気に依頼が増えた。

俺は慌てて、住んでいるマンションの隣りの部屋も借りた。

こちらは自宅兼事務所で、隣りがGの住処。

Gを追い出すのは良いけれど、行く場所も、美味しい食料も調達できなくなって、なんとなく可哀相だと思ったから。

Gに対してそんな事を思うのは、世界で俺だけだろうと苦笑いもでたけど、Gは俺の相棒なのだから。

出入り口は排水口から。

人目に付く場所の移動はやめる事と、動くなら深夜にするように、Gには命令しておいた。

そのかわり、俺は餌になりそうな物を、時々Gに与える。

こうして俺の生活は、安定していった。

「はい、やっていますが、ゴキブリですか？」

「ゴキブリ以外もできますか？」

またも害虫駆除の依頼の電話がかかってきていた。

しかしどうやら、今回はGではなさそうな気配だった。

「金と心によっては、チャレンジしますが、保証はできませんね。」

まあそうだ。

俺の能力でできるかどうかは、全て試してみないとわからない。

「えっと、心ってなんですか？」

「えっと、それはですね・・・」

金と心によって。

この、キャッチコピーであり対応は、無茶な仕事を持ってこないようにする為と、嫌な仕事をしない為の口実。

断る場合、莫大な料金を要求すれば、そこで諦めてくれるだろうけど、中には出すと言う人がいるかもしれない。

そこで、心だ。

俺がやりたいと思えない仕事は、その時点で却下。

まあこれで、犯罪とか危険な仕事、或いは金持ちや権力者の手伝いをするなんて嫌な仕事は、なんとか避ける事ができるだろう。

それに、その逆もある。

とにかく手伝ってあげたいと思う事は、1円ででも受ける。

その為のキャッチコピーだ。

「事情を聞いてから全ては判断するって事ですね。」

「そうですか。ゴキブリだけなら受けてくれるのですか？」

「ええ、それならすぐに受けます。交通費等、最低限の経費と5000円になります。」

Gを集めるのは、俺にとっては仲間を集めるのと同じ。

まあ、繁殖力が尋常でないし、生命力も強いから、そこまでしなくても良いんだけどね。

「では、お願いします。他の害虫についてはその時にでも。」

「はい。わかりました。ではですね・・・」

俺は、場所を聞いて時間を決めた後、電話を切った。

場所は、かなり古い飲食店だった。

昔ながらの喫茶店のようで、俺の勘と言う名のレーダーが反応する。

俺の仲間の息吹を感じる。

不思議な事なのだけれど、Gのいる場所は何故かわかる。

他にも俺には、色々な能力がある事に、最近気がついていた。

まあその辺りは追々話す事にしよう。

俺は喫茶店に入っていった。

「いらっしゃいませ。」

電話で話した声だ。

おそらくこの人が依頼人である店長だろうと予想できた。

「えっと、イフの高橋ですが。」

「ああ、どうもどうも。」

先ほどの電話の相手であろう店長らしき人、歳は50歳くらいで、俺と同じ歳くらいか。

でもまあ、今の俺は、俺であって俺ではない。

「では、どちらかでお話ししますか？」

「えっと、では、奥で。おーい！めぐみ！ちょっと店頼む！」

「はーい！すぐいくー！」

店長の呼びかけに、すぐに若い女性が奥からあらわれた。

どうやら喫茶店の奥は、自宅になっているようだ。

女性はすぐにカウンターの奥で作業を始めた。

チラッと目が合ったので、少し会釈をかわした。

「お客もいないので、隅の席で話しましょう。」

客がいなくても何人かはいたが、この場合は少ないという意味で、そして、客席を使っても問題無いという事か。

「はい。」

俺は促されるままに、店長と向かい合うように席についた。

「えっと・・・」

店長はあまり大きな声で言えないからか、紙にボールペンで「ゴキブリ」と書いた。

「これは今すぐ駆除してもらえるのかね？」

店長は「ゴキブリ」の文字を指さす。

「はい。前金5000円ですぐに始めます。明日にはいなくなるでしょう。」

「そ、そうか。で・・・」

店長は再び紙に文字を書く。

「ねずみ」と書いて指さした。

「これはなんとかできんかね？」

理由を聞くまでもなく、飲食店だしネズミくらいは出てもおかしくない。

かなり昔、アルバイトでやってたファーストフードだって、ネズミくらいは出たからな。

「見てみないとわかりませんが、できる限りしますよ。最低限の経費と料金全て合わせて、1万円でいかがですか？」

これが安いか高いかはわからないけれど、俺がやるならこれくらいは欲しい値段だ。

「それも前金かね？」

「いえ、前金はこちらの5000円でいいです。」

俺は「ゴキブリ」の文字を指さした。

「では、まず5000円、消費税は？」

「内税ですからそれでかまいません。」

俺は5000円を受け取ると、その分の領収書を渡した。

「では、少し見させてもらいますね。」

「えっと、営業中ですが、お客に迷惑がかかるとまずいんだけど。」

店長の心配ももっともだ。

「大丈夫です。殺虫剤とか迷惑になる事はしませんから。」

「そうですか。ではよろしくお願いします。ああ後、自宅の方までお願いしてもかまいませんか？」

「ええ、大丈夫ですよ。」

本当は別料金と言いたいところだけど、まあ金儲けでやってるわけではないから。

俺はまず、店の中を見回る。

Gのいる場所は既にわかっている。

その対処も命令するだけだから簡単だ。

問題はネズミ。

追い出すだけなら、Gに命令すれば楽勝だろう。

数はいくらでも集められるからな。

もう入ってこれないようにするには、入ってくる場所を特定し、そこを塞ぐ必要がある。

「古い建物だから、少しやっかいだな。」

独り言を言っていると、先ほど店長に「めぐみ」と呼ばれていた女性に声をかけられた。

「あの？駆除の人ですか？」

いつの間にか後ろにいたようだ。

「はい。そうですが？」

「古い建物だと、やっぱり難しいんですか？」

「ものによりますね。」

俺は声を小さくした。

「ゴキブリは大丈夫ですけど、ネズミは入ってくる場所を塞がないといけませんから。」

「ということは、ゴキブリは全部殺すわけですよね？」

めぐみさんも小さな声で喋ってくる。

顔の距離がやたら近くなってる事に気がついた。

しかも、このめぐみさんって人は、凄く可愛い顔をしていた。

少し照れた。

「ま、まあ、そういう事になるかと・・・」

本当の事は流石に言えないから、俺はなんとなくこたえを濁した。

「ゴキブリも生きてるのに・・・って、いや、別にゴキブリが好きだってわけじゃないんですけど！！」

めぐみさんは、いきなり大きな声で取り繕った。

当然ながら、食事をしているお客の視線を集める。

「いや、あの、すみません。」

めぐみさんは、店のお客に謝っていた。

店長が少し睨んでいた。

しかしGを殺す事を、少しでも否定したり、躊躇したりする人がいるなんて、初めて見た。

ただ単に、生き物を殺すのが嫌なだけだと思うけど、俺は少し嬉しかった。

「いやまあ、殺すと言うよりは、近づけないようにするだけなんですけどね。」

俺は笑顔で、小さな声でそう言った。

「私も、ホントはゴキブリ怖いんですけど、でも殺すのはできなくて・・・」

俯いて、少し照れていた。

「めぐみさんって、優しいんですね。」

俺は素直な気持ちで、思ったまを口に出した。

めぐみさんはますます照れていた。

「では、もう少し見てまいりますので。」

俺はそう言って手を少し挙げてから、再び店の中を見て回った。

その後自宅の方も見せてもらってから、俺はこっそりGに命令を出した。

まずはネズミを追い出す。

通路になっていた穴などを探してもらう。

そしてその穴を塞いでもらう。

塞げない場所は報告をもらった。

はっきりと話す事はできないけれど、俺にはGの意志がわかるのだ。

理屈はわからないけれど、欲しい情報は得る事ができる。

それから、この建物には近づかないようにして、全てオッケーだ。

「一応原因はわかりました。」

今、店長に最終報告をしていた。

場所は自宅の玄関。

「えっと、ネズミの方の駆除もできましたか？」

「おそらくは。えっと説明しますね。ここの物置の・・・」

俺は物置の下に空いた穴を塞ぐ事と、玄関のドアを開けっ放しにしない事、裏口も同じ。

それから既に塞いだ穴について説明した。

「此処を私が塞ぐと、適当に板を打ち付けるだけになりますが、どうしますか？これ抜きなら5千円でかまいませんけど？」

「ああ、これくらいならこちらでできるから、それで頼む。」

「では。」

俺は再び5千円の領収書を作り、お金を受け取った。

「では、もしまた出たら、連絡ください。1ヶ月以内なら無料で見ますから。」

「ああ、わかった。」

「ありがとうございました。」

俺は店長に、客に対してのお礼を言ってから、玄関より外に出た。

これでGが出る事はまずあり得ない。

問題はネズミだけど、Gがこの辺りから追っ払ってくれたから、今はこの辺りにはネズミの存在は無い。

ちなみに俺自身、この辺りにネズミがいない事がわかる。

俺の能力で、生命力に関する事は色々と出来るのだ。

その一つが、生きているものを感じる事。

建物と建物の周り10m内に、生命反応は、さっきのめぐみさんと店長とお客だけ。

ちなみに数センチ以上の大きさでだ。

更に詳しく調べたら、沢山のダニやノミ、蟻などの存在を感じるが、駆除はネズミだから関係ない。

俺は確認を終えて帰宅した。

こんな日が、ココ最近続いていた。

仲間

害虫駆除中心、いや、G駆除を中心に活動する日々が続く中、自分の能力の開拓も行ってた。

というか、鍛えれば結構いろいろできてしまう事がわかってきた。

生命力を使う事。

生命力に関わる事なら、アイデア次第で色々できる。

Gを動かす事は、中でも一番簡単な事のように、Gの聴覚や視覚に意識を繋ぐと、覗きや盗聴のような事まで出来る事がわかった。

さらには、まだそれほど大きな事はできないけれど、昆虫程度なら自由に動かせる。

Gのように扱う事はできないけれど、言ってみればラジコンで動かす感じ。

しかしそれには、かなり自分の生命力のようなものが必要で、大きい生き物になるほど疲れるし難しい。

上手くいけば、人間だってコントロールできるような気もするが、流石にそれは無理だと誰かに言われた気がした。

それでもせめて、ネズミくらいは動かせれば良いなと思った。

そんな事を考えていたら、携帯の着信音が鳴り響く。

俺はすぐに携帯を手を取った。

携帯ディスプレイには、未登録番号からの着信を知らせる表示。

新規のお客様のようだ。

「はい、もしもし万屋イフです。」

「えっと、高橋さんですか？」

「ええ、そうですけど。」

どこかで聞いた事のある女性の声。

しかし、おそらくはほとんど話した事のない人のようだ。

誰だかわからない。

「えっと、喫茶メグミの、愛須と申しますが。」

愛須と聞いて思いだした。

先日G駆除とネズミ駆除をした、喫茶店にいた女性だ。

喫茶店の看板には「喫茶愛」と書いてあったけど、あれってメグミって読むんだ・・・

「はいはい、もしかして、またネズミができましたか？」

Gが出る事はあり得ないし、電話してきた理由を考えれば、思い当たるのはそれしかない。

「いえ、違うんですけど。」

「では、別の仕事の依頼でしょうか？」

「はい。でも、とりあえず相談と言うかなんと言うか・・・」

なんだかはっきりしない物言いだ。

とりあえず、話を聞いてくれと言う事か。

「ええ、今話せる事ですか？だったらこのまま聞きますが。」

「いえ、是非一度、家へいらしていただきたいんですけど。」

ふむ。

電話では話せない事のように。

まあこちらも、そんなに仕事をしているわけではないし、今日は暇だ。

「では、これから伺いましょうか？」

「あ、はい、是非。」

「それでは・・・」

俺は電話を切ると、早速出かける準備をする。

一応いつも持ち歩くポーチに、Gを数匹忍ばせる。
まあ多少なら、離れていても呼ぶ事ができるが、Gが全くいない場所ってのも存在するからな。
俺は準備が完了すると、前に行った喫茶店を目指した。
自動車で30分ほどで、目的地についた。
前回来た時より、道がわかる分少し早い。
さて、今日は喫茶店ではなく、裏の自宅の方へと回った。
インターフォンを押すと、受話器に出る事なく、そのまま玄関が開けられた。
出てきたのは、先日店で会った、愛さん・・・
だったはずなのだけれど、服装が高校の制服だった。

「ええっ！」
俺は驚いて、声をだしてしまった。
何故なら、先日会った時は、二十歳くらいかと思うくらい大人っぽかったから。

「えっ！ど、どうかされました？」
「こ、高校生だったんですか?!」
俺は素直にそのまま聞いてしまっていた。
あまりに可愛くて、少し動揺していたから。

「あ、はい。」
普通にこたえられ、何も言う事が無くなった。
少し沈黙したが、普通に仕事の話すれば良いと気がつき、俺は落ちついて話した。

「えっと、で、話はどちらで？」
「あ、はい。では、中に入ってください。」
俺は促されるまま、愛さん宅へと入った。
玄関で靴を脱いだ後、そのまま正面に見える階段を上がる。
先に階段を進む愛さんのスカートの中が見えそうで、俺は少し視線をそらしながら上がった。
つれてこられたのは、どうやら愛さんの部屋の前。

「あの一・・・この中なんですけど・・・」
愛さんが、部屋に入る事を躊躇している。
俺は、既に気がついていていた。
小さな生命反応が沢山ある。
俺は自分の能力で、生き物を特定する。

「蜘蛛・・・か。」
「えっ?! どうして？」
やばい。
つい言葉に出していたようだ。
俺は中の蜘蛛を一匹操作し、入り口のドアの近くに移動させて、少しだけドアを開ける。
すぐにその蜘蛛を外へと出した。

「ほら、此処にいたから。」
「ホントだ・・・」
どうやら上手くごまかせたらしい。
こんな能力、言っても信じて貰えないだろうけど、自ら喋って混乱を招く事もない。
だから俺は、できるだけ隠していく事にしていた。

「この中に相談の何かがあるんですね？」
「あっ!でも・・・」
俺は、愛さんが止めようとしているのを、聞こえないふりをして中に入った。
中には、すぐに沢山の虫がいる事がわかるほど、蜘蛛がいた。
おそらく100匹はいるだろう。

しかし、俺が入っても、どれも特に逃げる感じではない。

「えっと、ちょっとみんな、隅にいてくれる？」

愛さんが声をかけると、蜘蛛は部屋の隅に向かって移動し始めた。

「もしかして・・・」

「はい・・・前に害虫駆除して頂いてから、蜘蛛が私のまわりに集まりだして、もしかしたら・・・」
俺と同じような能力を持つ者が、他にいるなんて。

蜘蛛は既に、部屋の隅に集合していた。

家蜘蛛以外にも、少し大きめのもいた。

「ゴキブリ駆除の後に集まったから、これを俺に？」

こんな能力、わかったとしても、普通人には話さないはず。

それがほとんど面識のない俺だと尚更だ。

「えっと、ゴキブリ駆除の時、ゴキブリやネズミを殺している様子ではなくて、話しても、蜘蛛を殺さずにいてくれそうだったから。」

まあ、俺にとってのGと、愛さんにとっての蜘蛛は、きっと同じようなものだろう。

仕事では時々、何匹かのGには死ぬような事を頼んだりしたし、実際死んでたりするけれど、自分で殺すなんて俺にはできない。

「で、俺にどうして欲しいのかな？」

話すには、何かお願いがあるから話したのだろう。

「もうなれたのですが、やっぱりまだ一緒だと眠れなかったり、でも追い出すなんてできないし、どうしたら良いかと思ひまして。」

このままでも、おそらく大丈夫そうに感じた。

でも言われてみれば、前に会った時より少しやつれている気もする。

俺の能力も話してみようか？

マンションの部屋はまだ余ってるし、蜘蛛部屋を作っておいてあげる事もできるけど、まだ2回会っただけの人を信じて良いのだろうか？

「天井裏にいるように命令すればどうかな？」

何故か、愛さんが俺を見つめていた。

どうしたのだろう。

「この状況を見ても、驚かないんですね。」

言われて気がついた。

普通なら、まず部屋に入った時点でかなり驚くだろう。

でも俺は、既に中の状況を知っていたから、驚かなかった。

そして、蜘蛛への命令と、それに従う蜘蛛達。

それを見たら、更に大きく驚くはずだ。

でも俺は、既にこの能力を認めているし、普通に対処してしまった。

しらばっくれる事もできるけど、俺は誰かに話したかったのかもしれない。

同士に出会えて嬉しかったのかもしれない。

俺は話していた。

「俺も、実は同じ能力があるからね。」

「やっぱりそうなんですか。」

「えっ！？わかっていたの？」

「ゴキブリ、殺してないのにいなくなった。今までお父さんが色々試したのに、いなくならなかったゴキブリがだよ？だからもしかしたらって。」

なるほどなあ。

まあ普通、これだけ見事にG退治できる業者もないからな。

飲食店でバイトしていた時も、数ヶ月ごとに調査と退治をして、何回も行って、やっといなくなるくら

いだもんな。

「愛さんは、どうしてその能力に目覚めたのか、理由はわかるのかい？」

「わからないけど、夢はみました。蜘蛛の神様が、蜘蛛の能力を得られるって。」

同じか。

という事は、愛さんも蜘蛛を助けたか、それとも何かウィルスに感染したのか。

「最近、蜘蛛を助けたりした事はある？」

「ええ、前に来ていただいた次の日から、ブルーランドの方へ旅行に行っていたんですが、その時に。」

ブルーランドは、北極にほど近い、とにかく寒い国だ。

最近の温暖化により、永久凍土が溶け、一昔前より生活圏が広がり、最近旅行客に人気の島国。

「俺と同じだ。」

「高橋さんもブルーランドへ？」

「いや、俺は南極なんだけど、原因が同じって事。」

「この能力を得る原因ですか？」

「うん。」

俺は頷いてから、詳細を話した。

南極に行った事。

そこでGを助けた事。

愛さんの事はわからないが、未知のウィルスに感染していた事。

前々から思っていたのだが、未知のウィルスってのが、この能力に関係しているのではという事も話した。

新種のウィルスは、毎年色々と見つかったりするわけだが、完全に未知のウィルスってのはそうそうない。

二人の行った場所を考えると、最近永久凍土が溶けてきている場所だ。

氷の中にウィルスがあったのか？

強引な推測だが、なんとなく当たっている気がした。

他にも、俺の能力で命令できるのは、Gである事。

それを使って、現在仕事をしている事。

マンションにGを集めて飼っている事も話した。

ただ、西口悠二が若返って、高橋光一になっている事は伏せた。

これは国から止められているから。

「一応これは、他言無用でお願いしたいんだけど、良いかな？」

「はい。良かった。私だけじゃ無かったんで、少し安心です。」

愛さんは、どうやらこの能力を得た事が怖かったようだ。

確かに、ある日いきなりこんな能力に目覚めて、原因も分からなければ、宇宙人に改造されたとか、不安になるかもしれないからな。

ああ、それはないかな。

まあとにかく不安で、誰かに話したかったのかもしれない。

それでも、話したからと言って、不安は消えないだろう。

俺はもう死ぬつもりだった人間だから、未知のウィルスとか言われても、別に怖くはない。

しかしこれから人生生きてゆく人間にとっては、何時なにか起こるかもしれない恐怖が有るに違いない。

だから少しでも安心してもらえるよう、俺は言った。

「俺はもう1年以上になるけど、体の不調とか無いし、むしろ昔より快調なくらいだから、心配する事は無いと思うよ。」

俺は笑顔で愛さんを見た。

「はい。」

返事を返す愛さんが、出会ってから初めて高校生に見えた。

「じゃあ、これからも同じ能力を持つ仲間として、何か有れば連絡を取り合おう。」

俺は、名刺を差し出した。

「あ、持ってます。」

そう言えば、電話がかかってきていたんだ。

「そうだったね。」

「えっと、メール送ります。」

こうして俺は、同じような能力を持つ愛須愛さんと、情報交換をする理由で時々会うようになった。

変化

今日も相変わらず、害虫駆除の依頼を受けていた。

しかし今日のは、今までの仕事とは少し違った。

害虫駆除は害虫駆除でも、蜘蛛の駆除。

まあ蜘蛛程度なら、俺のコントロール能力で、頑張れば駆除する事も可能だろう。

でも、時間がかかるし、なにより生命力を使うのは疲れる。

だから俺は、メグミを呼び出していた。

俺とメグミは、まあ同士であるし、話すと結構気があって、すっかり仲良くなっていたから、呼び方もすぐに変っていた。

学校が終わる時間に、自動車で迎えに行った後、少し郊外まで車を走らせる。

場所はとある温泉旅館。

なんでも、大切なお客が来るのだけれど、その人は蜘蛛が大嫌いで、絶対に蜘蛛がでないようにしたいらしい。

1時間以上車を走らせ、少し景色が赤く染まる頃、目的地についた。

早速俺とメグミで駆除にかかる。

「蜘蛛の場所はわかるよね？」

「うん。わかるよ。あれ？光一くんもわかるの？」

「えっ？うん。G以外もわかるよ。」

「私わからないよ？」

俺達は、メインで扱える虫が違う。

俺はGで、メグミは蜘蛛だ。

だから俺が意識を繋いで、視覚や聴覚をシンクロできるのはGで、メグミは蜘蛛。

最近はその能力をメグミに教えていたのだけれど、場所関知は俺しかできないのか？

「えっと、生命力をね。広げて・・・」

「生命力って？」

「んー。どう説明したらいいのだろう。」

そこまで話して気がついた。

もしかしたら、操れる虫が違うのだから、能力にも違いがあるのではないかと。

「ちょっと聞いて良いかな？」

メグミが頷くのを見て、そのまま続けて話す。

「メグミは、蜘蛛の操作やシンクロ以外に、何かできるようになった事はあるか？」

するとメグミは、バックからソーイングセットを取り出した。

俺は自分のシャツを見てみたが、特に取れかけているボタンもない。

そうこうしてる間に、メグミはソーイングセットから、ハリと糸をとりだし、俺の目の前に突き出してきた。

「えっと・・・」

俺が、なんの事か分からないという顔をしていると、メグミは一言「見てて」と言った。

どうやらハリの穴に、糸を通そうとしているようだ。

ゆっくりと、ハリを持った手と、糸を持った手が近づいてゆく。

と思った次の瞬間、糸が自らの意思をもって動いているかの如く、ハリの穴へと入っていった。

「なんだ？どうなったんだ？」

一瞬俺は、何が起こったのかとビックリしたが、次の瞬間には理解していた。

その気持ちを察してか、メグミが代弁してくれた。

「どうやら私が得た能力は、糸に関係があるみたい。この前とれたボタンを縫いつけようと思ったら、

こんな事になっちゃって、ビックリしちゃったw」

そう言いながら、今度は自分の服の袖についているボタンを一つ、ハサミで切り取った。

ハサミを置き、再び糸を手にする。

すると糸そのものが、ハリの役割もはたしているようで、切り取ったボタンを袖に縫い付けていった。

その光景は、なんとも不思議で面白かった。

「蜘蛛と言え、糸って事か。」

「うん、そうみたい。」

するとさしずめ、Gと言え、生命力って事になるのかな。

そう考えると、蜘蛛の存在が分かる事も、生命力で何かをコントロールする事も説明がつく。

「で、俺が生命力に関する能力って事か。」

「だね。」

俺達は納得したところで、仕事に取り掛かる事にした。

とりあえず、メグミがつれてきた蜘蛛に命令をして放す。

蜘蛛を持ち歩く事は、俺が勧めておいた。

何かあった時に役立つ事があるかもしれないから。

つれてきた蜘蛛が、他の蜘蛛に命令を伝えている間、俺とメグミは旅館の一室でくつろぐ。

「糸を使って、他に何ができるの？」

俺達は、再び能力の話をしていた。

「んー、まだあんまり試してないけど、ネットをとばして何かを捕まえたりもできるかも。」

「へえ。そんな事もできるんだ。」

糸が使える事がわかったところで、この短期間に、それほど能力を理解する事はできないか。

「光一くんは、生命力って、何ができるの？」

「そうだな。さっきも言ったけど、生物を感知したり、小さい生物なら動かす事もできるかな。」

「じゃあ、蜘蛛も？」

「まあね。でも命令して、勝手に動くわけじゃなくて、ラジコンで動かす感じ？それに疲れるから、長くは無理だよ。」

その他にも、俺は色々使える能力をみつけていた。

更には、俺が若返ったのも、死にかけていた命が助かったのも、おそらくはこの生命力の力である事は、間違いないだろう。

でもこのあたりは話せない。

「ほんと不思議だよねぇ。こんな事ができるようになるなんて。」

この話は、もう何度もしている。

それでもやはり不思議だから、つい話してしまうのだ。

「ああ、もしかしたら温暖化への、神からの警告なのかもしれないな。」

「だよ。永久凍土が溶けなかったら、こんな事は起こらなかつたらうし。」

俺達の考えはこうだ。

二人が行った場所が、永久凍土の溶けている地であった事。

俺が未知のウィルスに感染していた事。

同じように神の夢を見た事。

これらを考えるに、未知のウィルスと言うか、未知の生物が永久凍土の中に閉じ込められていたのだが、それが最近の温暖化で解放された。

そしてそれに俺達は感染したのではないか。

感染という言葉が正しいかどうかはわからないけれど、その作用で同じような夢を見て、このような能力を得たのではないか。

これはメグミには話していないが、むしろ未知の生物が、俺達の体に乗っ取り、同種の生物の頂点に立っているのではないかとも思っている。

これだけ忠実に命令に従う虫たち、蜂や蟻の世界に存在する習性に似ている、そんな事も俺は考えていた。

それにしてもこんな能力、本来あって良い能力では無いように感じる。

もしこんな能力を持つ者が大量にいたら・・・

「俺達以外にも、この能力を持つ者がいるかな？」

「原因を考えればいるかもしれないけど。」

するとどこからか、誰かの意思が流れ込む。

俺の連れてきたGからだった。

そのGが「仕えるのはあなただけです。」と言っている気がした。

「Gは俺だけだってさ・・・」

「うん。蜘蛛も私だけだって・・・」

俺達の状況から希望的観測をすれば、他に能力を持つ者がいる可能性は、少ないと判断できた。

映画や小説の世界だと、虫それぞれに主がいたりする場合も否定できないけれど、条件としては厳し過ぎるから。

「あっ！終わったみたい。」

メグミの側に、家からつれてきた家蜘蛛が戻ってきていた。

メグミは腰に付けたポーチを開けて、蜘蛛を入れる。

ふと思った。

蜘蛛だから女の子でも触れるけれど、これがGだったらどうなっていたのだろう。

俺だって、前まではGが好きではなかった。

ただ、あの南極で眠る瞬間は、Gも可愛く見えたんだよな。

あんなところで必至に生きる小さな命。

暖かかった。

「メグミは、蜘蛛は怖くないんだね。」

「んー、好きって事はなかったけど、ダニとか食べてくれる益虫だしね。ただ多いと最初は少し怖かった。」

神は言っていた。

「一寸の虫にも五分の魂、助けられたものは、必ずその恩に報いる。」と。

助けるって事は、その虫に少なからず好意をもっている人って事か。

そしてそういう人が、この能力を得るのではないか。

俺はGが好きではなかったけれど、元々殺すのはいやだった。

俺の場合は、相手が何であっても、むやみに殺生したくなかっただけなんだけどね。

「じゃあ、オーナーと話してくるから。」

「私も行くよ。」

俺達は共に部屋を出た。

オーナーと話して、今日の仕事は終了。

料金はすぐに支払う約束だったが、大切なお客様を、無事もてなす事ができればって事で、後日となった。

実際、俺達が何かしている姿を、オーナーが見る事はできないし、信用できないって事かもしれないと、なんとなく思った。

俺達は自動車に乗り込む。

シートベルトをした。

助手席では、メグミがシートベルトをしていた。

「そうそう、今日の報酬は、全部メグミの物だ。」

俺は財布から3万円を取り出し、メグミに差し出した。

「ええ！いいよ。私自身、何もしてなかったし。」

「そんな事言ったら、俺も何もしてないよ。」

「それに、私の相談を聞いてもらったお金も払ってないし。」

「いや、気持ちが楽になったのはお互い様だし。」

・・・

「ぷっ、ははは。」

「はは、へへへ。」

なんだか、お金の事で譲り合っていた自分が、昔の自分からは想像できずに、笑ってしまった。

なんせ、その日生きるのも辛いくらい、貧乏していたからな。

「じゃあ、半分はメグミので。これ以上は譲れないよ。」

「わかった。」

「てか、メグミもこれから一緒に仕事しないか？二人でやれば、何かもっと面白い事できるかもしれないし。」

「うん。いいよ。」

あっさり了解された。

「でも、高校生だから、その、空いた時間でできる範囲でいいからな。」

「わかってるよ。」

俺は車を走らせた。

既に辺りは真っ暗だった。

愛須家についたのは、夜の9時頃だったが、特に問題はなさそうだった。

最近の女子高生って、9時に帰っても何も言われないのか？

少し不安になった。

正義か悪か

一週間が経っても、あの蜘蛛を駆除した旅館のオーナーから、料金が振り込まれる事は無かった。

俺は気になって電話したら、蜘蛛が出て、大切なお客を怒らせてしまったと文句を言われた。

だから俺は、こっそりと再びその旅館を訪れていた。

そして、少し疲れるが、旅館内の虫の存在を調べる。

Gやコオロギ等の虫、更にはヤモリ等の生命体は存在したが、蜘蛛は1匹もいない。

蜘蛛が出たなんて、これは明らかに、金を払わない為の言いがかり。

こんな奴がいるから、世の中腐ってくるんだ。

俺は一旦、近くに止めてあった自動車に戻ると、トランクから箱を取り出す。

この中には、大量のGがいる。

俺はまず公衆電話を探して、保健所に電話。

数年前まで、実力派俳優だった俺だ。

少し年輩者を装って喋る。

「あー、今山乃上旅館にきたんじゃが、料理にゴキブリ、部屋にも大量にゴキブリ、あんなので営業させていいのかね？」

うむ、なかなかの演技力だ。

誰が聞いても70歳のじいさんだ。

電話を入れた後、俺は連れてきたGを放す。

命令もしっかりしておいた。

人目につくように、部屋を動き回り、お客が食べようとしている食事に取り付けと。

他にも色々命令したが、それは今後、此处で上手く生き抜く術だから割愛する。

しばらくすると、怒って出てくる客や、怖くて逃げて来たであろう従業員などが見える。

ふふふ、愉快愉快。

更には、今日はこれないだろうと思っていた保健所か、それとも警察か、調査に来たようだ。

電話で確認した時に、悲鳴とか混乱する声でも聞いたのだろう。

後は帰って、山乃上旅館の今日の様子を、どこかの掲示板に書いておけば完璧だ。

俺は自動車に戻ると、自宅を目指して走り出した。

家に戻ると、海外にホストを置く、匿名掲示板に、「山乃上旅館の料理はゴキブリ料理。」とか「寝ている間に、口の中にゴキブリが入った。」とか書いておいた。

まあこれで、俺に金を払わなかった報いは受けるだろう。

悪い奴が得をする世界、そんな世界だけには絶対しない。

頑張る人が、心優しい人が報われる世界を、少しでも俺の力で・・・

次の日のニュースで、山乃上旅館で、ゴキブリ大量発生 of ニュースが流れていた。

業務改善命令を受け、「元々経営は楽ではないのに、このイメージダウン。おそらくはこれ以上の経営は難しいだろう。」なんて、評論家みたいな人が言っていた。

流石に旅館自体がつぶれたら、従業員などが可哀相だけど、悪の元で働く罪悪感が取り除かれて良いだろう。

俺は適当に納得して、今日も仕事に励む。

「って、特に仕事はないけどね。」

結局する事もなく、ソファに座ってテレビを見続けた。

ニュースは、はっきり言って悪いニュースばかりだ。

良いニュースと言え、海外で活躍する、スポーツ選手のニュースだけ。

よくもまあ、みんなこんな世界で生きていて、暴動を起こさないものだ。

平和が有るから、全てが許されるのだろうけど、平和も良し悪し。

今、どこかの国のボスが壊れたら、日本なんて絶対太刀打ちできるわけない。
それで皆が良いと思っているなら、自衛隊自体必要無いし、ダメだと思うなら、軍を持つべきだ。
どっちつかずの平和は、ほんと日本人らしいと思うけど。
まあ歴史上、永久に続いた平和は存在しないし、これからもそんな平和は存在しないだろう。
それは、今の世の中を見れば、はっきりとわかる。
戦争をしないと誓った日本が、すでに戦争の手伝いをしているのだから。
それが良いか悪いか、俺が判断できるものではないけれど、少なくとも生きている間は、戦争などしたくないものだ。
だから俺は、悪は栄えないと思える世にするために、少しでも貢献するのだ。
「まあ、うまくまとまったな。」
俺は自分の考えにツッコミを入れて立ち上がる。
隣の部屋のG達に、今日は新しい餌でもふるまってやるか。
Gは害虫だって言うけれど、悪い人間と比べたらよっぽど可愛いし、生きる為に最低限の事をしているだけだ。
人間なんて、必要以上に動物を殺し、そして地球を汚す。
地球と、そして生きとし生ける全ての生物から見て、人間こそ害虫ではないだろうか。
冷蔵庫から、チーズを3箱取り出す。
俺がこれを貰ったとして、喜びなんてほとんど感じない。
でもG達は、凄く喜んでくれるんだ。
自分が人間である事が、少し悲しくなった。
一旦マンションの部屋を出て、隣の部屋の鍵を開ける。
此処をあける時は、周りに人がいない事を確認。
なんせ中を見られたら、大変だからね。
一応いくつか部屋があって、そのうちの一つに集まるようには言っているが、排水口へ移動するのが結構いたりするから。
ドアをあけると、排水口へ向かうのと帰ってくるのが、100匹ほど見えた。
これを見たら、普通の人だったら悲鳴をあげてもおかしくない。
俺は靴のまま部屋に上がる。
玄関のドアは閉めて、ちゃんと鍵もかけてある。
確認してから、俺は部屋のドアをあけた。
中には、部屋が真っ黒になる程のGがいる。
普通の人が見たら、おそらく卒倒するだろう。
今ではGが怖くない俺ですら、少し気分が悪くなる。
俺は素早く、用意したチーズの固まりを3つ、部屋の中に置いた。
みんな礼儀正しく、順番に食べてゆく。
俺が教育、と言うか、命令しているとはいえ、コンビニで並ばずにレジで会計する奴より、よっぽど賢く見えた。
部屋のドアを閉めて、俺は玄関を出た。
そして、自室に戻る。
すると電話が鳴っていた。
俺は慌ててテーブルに置いてあった携帯電話をとる。
「はい、もしもし万屋イフです。」
「あー、おまえんところは、どんな仕事でもするんか？」
偉そうに話す男の声。
ドスがきいてて、いかにも怖そうな感じがする。
俺は慎重に対応する。

「はい、お金と心によって、どんな仕事もいたします。」

「心？なんやそりゃ？」

なんだか嫌な感じがして、緊張してきた。

「それが悪であったり、私が心動かされない事は、たとえどれだけお金をつまってもできないって事です。」

「ああ、そういう事か。だったら、俺の仕事はうけてもらえそうやな。」

おいおい、勝手に決めてるけど、俺的にはお断りしたいんだけど。

「えっと、とりあえず、お話していただかないと、決めかねるんですが。」

「ああ、仕事内容いってへんかったな。その前に、俺の名前先に言わせてくれや。」

「はい。」

「俺の名前は、暴力団浜崎組の幹部、吉沢源氏や。」

浜崎組と聞いて、俺はビビっていた。

暴力団ってだけでも驚きだけど、今や日本一の組だから。

覚悟して、俺は仕事内容を聞いた。

麻雀

俺は、とある場所で、沢山の強面な方々に、囲まれていた。

ええ、暴力団の方々です。

何故俺はこんな所にいるのだろうと思わなくはないけれど、仕事を受けたから仕方がない。

仕事内容は、日本の為と言え、日本の為になるもので、楽しそうと言え、楽しそうで、とにかく受けてしまった。

まあ、暴力団ってのは、一般人から見れば煙たい存在ではあるけれど、無ければ無いで不都合がある。

それが証拠に、政府は「悪だ！」と言いながら、暴力団を本気で排除しているようには見えない。

著名人も多く利用しているし、海外マフィアが自由にのさばらないように、抑止力もある。

だから、暴力団ってのは、実はかなり重要なものであるわけだ。

そんなわけで、俺は、麻雀の代打ちの仕事をした。

面子は俺と、電話をくれた吉沢さん、後二人は今回の敵となる、どこぞの国のマフィアのお二人。

それにしても、何故こんな仕事を俺に依頼してきたのかは謎である。

俺の仕事は、吉沢さんをトップにして、マフィアの方々にチームで勝つ事。

何故か丁寧な呼び名になってしまうのは、ほらまあ、怖いから。

俺は小さなGを、それぞれの面子の牌が見える位置に配置する。

神経をシンクロさせれば、俺には他の人の牌が見放題。

普通にイカサマ無しだったら、それなりにやれる自信はあるけど、相手方は何かしらしてくるだろう。

東の一局目で、対面が親。

上家と対面に、マフィアの方々、下家に吉沢さんだ。

良い配置だ。

最初の配牌。

皆のを見て、どうやら全自動卓に細工はしていないようだ。

これならなんとかやれそうだ。

マフィアな方々は、明らかに通しをしている。

対面の人は、手配全くそろえずに、上家を勝たせるように打っている。

俺は一応そろえているが、吉沢さんが欲しそうな牌があったら捨てるつもりだ。

しかし、マフィアな方が先に、聴配だ。

「リーチだ。」

一、四、七の、萬待ちか。

さてどうするか。

こちらは通しはしていないから、当たり配を教える事はできない。

吉沢さんは、ピンズに寄せてるから、萬をツモってくるときついな。

このゲームで辛いのは、俺がトップをとるのはタブー。

あくまでも吉沢さんをトップにしなければならない。

上家の役は、メンタンピンのザンクか。

一萬なら2千だけど、一発ならザンク。

裏が怖いな。

とりあえず、一巡は自力で回避してくれ。

俺は素直にいらぬ配を捨てる。

すると吉沢さんは、一萬をツモってきたようだ。

ダメだ。

それを捨てては。

簡単に捨てた。

「ロン！」

吉沢さんは、ぬるすぎる。

勝ちにこだわってくれるだろうから、その点は問題ないけど、麻雀は振り込まない事が、勝利への絶対条件。

裏ドラは乗らなかったようで、とりあえずザンクですんだ。

東2局目。

配牌は悪くない。

とりあえず、なんでも良いから勝つ。

最後に吉沢さんが勝っていればいいのだから。

よし、今度はかなり良い感じだ。

6順目、聴配。

さて、何処が出やすいか。

吉沢さんにも必要で、尚かつマフィアナ方々が捨てそうなのは・・・

「リーチ！」

俺の役は七対子で、西をきってリーチだ。

他の捨て牌は、二萬、五ピン、八萬、七ピン、一ピン。

で、待ちは四ピンだ。

チートイツの可能性も十分な捨て配だけど、チャンタやホンイツも捨てがたいだろう。

更に、吉沢さん以外はピンズにぬるく、四ピンを引いてくれば使い道無しだ。

吉沢さんのツモは、六ピンで間すっぽりはまった。

なにげに今回は、吉沢さんも調子がいいな。

イーシャンテン。

マフィアナ人Bのツモ、四ピンだ。

正直上家の人からとりたいけど、出すならもちろん頂くよ。

現物の二萬を切ってきた。

堅いなおい。

というか、これが普通か。

マフィアナ人は、西をツモ切り。

俺のツモ、六ピンツモ切り。

吉沢さんは、一ピンツモで聴配。

吉沢「リーチ！」

リーチしてきたか・・・

待ちは、二萬と五萬だ。

今回は俺達有利。

対面のマフィアナ人が、四ピンを切ってきた。

この人なら二萬をツモれば切りそうだけど、上家は無理だろうし、此処は上がるべきだな。

「ロン！リーチ、チートイ、ドラドラで満貫だ。」

よし。

これでトップに躍り出た。

後はこれを吉沢さんに・・・

「ああ？ラッキーやなあ。俺も良かったんや。わかってるやろな？」

「は、はい・・・」

くそっ！

味方脅してどうするんだよ。

俺の親は、皆遅くノーテンで流局。

あっさり流された。

で、吉沢さんの一回目の親。
此処でなんとかトップにたってもらいたい。
俺も吉沢さんも、なかなか良い配牌だ。
吉沢さんは高めを狙っている。
俺は吉沢さんにあわせる。
今回は勝つつもりはない。
吉沢さんの当たりになりそうな牌のキープと、同じ牌の維持。
完全な染め手だ。
おそらくマフィアな二人もわかっているだろう。
吉沢さんが高めを狙った為、上家の先にマフィアな人に聴牌が入る。
「リーチ！」
待ちは五、八ピン。
一応俺は八ピンを1枚持ってる。
やばい時は差し込む。
五ピンをツモってきた。
この状態なら、吉沢さんも面前ではいかないだろう。
俺は吉沢さんの欲しいであろう牌を捨てる。
「チー！」
よし、これで一巡目は抜けた。
更に吉沢さんがイーシャンテン。
次でなかせて、聴牌だ。
再び俺の順番。
「チー！」
これで聴牌だ。
しかし、出ないな。
俺も吉沢さんのあがり牌を持っていない。
俺のツモ、違う。
俺はツモ切りした。
吉沢さんのツモ・・・
やばい、それは上家の当たりだ。
吉沢さんはそのまま切った。
「ロン！メンタンピンドラドラ。」
痛い。
うまくいかないものだ。
東場が終わった。

南入。
「ロン！」
マフィアな人はナキタンのみで上がってきた。
勝負を早く終わらせるつもりだ。
上家のマフィアな人の親だから、此処なら少しは粘るか？
「ロン！」
対面のマフィアな人も上がってきた。
そしてまたナキタンかよ。
完全に逃げ切りを狙ってやがる。
俺の親。

此処で少しは吉沢さんを押し上げないと、かなりきつい。

吉沢さん、ないてくれ！

「チー！」

よし、聴牌までは引っ張りますよ。

マフィアナ人達の手が早そうだから、今回はそれを阻止するのが優先だ。

これもないてくれ。

「ポン！」

これで先に聴牌だ。

上がり牌がバレバレだけど、二人の手を少しは遅らせる事ができる。

その間に、俺か吉沢さんがつもれば。

ちっ！トイ面が引いてきたか。

捨てるわけないな。

予想どおり押さえる。

二枚ないてるから、やはり警戒されて当然。

上家、聴牌が入った。

どうする？

逃げてくれ！

「リーチ！」

上家のマフィアナ人がリーチしてきた。

おいおい、確かに此の手だったら来るだろうけど、上がられたら終わりだ。

頼む、四、七萬来い！

よし、七萬来た！

俺はツモ切りした。

「ロン！中ホンイツ、ザンクじゃ。」

俺は3900点、吉沢さんに渡した。

いよいよ、オーラスだ。

俺が勝っても、チームでは勝てるが、吉沢さんを勝たさねばならない。

差込なら、ハネマンプラスリー棒か。

配牌はまずまず。

吉沢さんがハネマン作るの、チンイツとドラが良さそう。

よし、作戦は決まった。

俺は序盤から、なかせる。

六巡目、聴牌。

よし。

つもれば逆転。

差込だと、僅かに足りない。

しかし、なかなかあがれない。

そして十順目、マフィアナ人に、聴牌が入った。

リーチはしない。

リーチしてくれれば、俺が差し込むのに。

どうする？

差し込んで、次の局に勝負するか？

そうだ！

俺は上家の捨て牌に対して、コールした。

「ポン！あ、いえ、間違えました。誤ポンです。」

俺はそう言って、千点棒を場に出した。

誤った発声は、上がり以外の場合は、場に千点って事になっていたから。

「おとなしくでけへんのかい！」

なんで怒られるんだ？

あんたの勝ちを確実にしてやったのに。

「ちっ！」

俺のツモ牌は、トイ面の上がり牌だ。

もちろんこれは捨てない。

捨てるのは、吉沢さんの上がり牌である、一萬！

「ロンじゃ！！ハネマンじゃあ！！ははは！！ようわかっとるやんけ！」

吉沢さんは俺の背中を叩いた。

100点差で、トップをまくった。

「お前なかなかやるやんけ。」

「いえ、一応麻雀は得意なので。」

今日の対局で、マフィアとの縄張りに関する話し合いは、上手くいったようだ。

これでとりあえず、危ない物を一般人が、ガンガン手に入れてしまう事は防げたらしい。

「うちの組に入れや。ずっと麻雀打たしたるぞ！」

「いえ、約束どおり、今回限りで。」

俺は、今回の仕事を受けるにあたって、今回限りと約束していた。

「そうか。じゃあまあ、しゃあないな。ほれ、約束の報酬や。」

俺は出された封筒を受け取る。

分厚い。

「えっと、10万円の約束だったんだけど・・・」

「ええ、ええ！！その百倍はこっちは儲かったからな。」

封筒には、100万円。

えっと・・・1億の金が、あの一局で動いていたのか？

少し怖くなって震えた。

「あ、ありがとうございます。ではお言葉に甘えて頂きます。」

「いやあ、わしが麻雀で勝ったんは初めてやからな。これくらいはええんじゃ。」

おいおい、どおりで弱いと思ったよ。

「まあなんかあったらゆってこいや。お前やったら手えかしたるから。」

「はい。では何かあれば。」

こうして俺は、怖い場所から逃げるように帰った。

新たな能力者

テレビを見ていたら、スズメバチの特番が放送されていた。
温暖化により狂った生態系が原因か、春から活動が活発らしい。
確かに五月くらいから、真夏かと思うくらい暑い日があったりする。
テレビでは、大量のスズメバチを退治する映像が放送されている。
確かに人を殺す事もあるから、退治するのも仕方ないところだけれど、温暖化や、住処を奪っているのは、人間なんだ。
その報いを受けるのも、仕方ないと言えばそう思う事もできる。
俺は、スズメバチが少し可哀相に見えてきた。

しかし、実際退治する仕事を受けてみると、怖いんです。
テレビを見た次の日、スズメバチ退治の仕事を頼まれた。
テレビで何か放送すると、その影響力って強いのがわかる。
だからテレビでは、あれほどCMを放送しているわけだ。
頼まれたのは、郊外の一軒家を囲む大きな庭にある、スズメバチの巣の駆除。
裏手だから、普段はこちらの方にはあまりこないらしい。
テレビを見た後、心配だから探してみたら、見つかったと。
正直此処なら放っておいても大丈夫そうだけれど、近所の人に迷惑になるかな？
遠くからけれど、スズメバチが巣から出たり入ったりしているのが見える。
オオスズメバチではなく、キイロスズメバチの方だ。
思ったより小さい。
俺がガキの頃見たスズメバチは、本当にスズメみたいに大きかった記憶がある。
丸々太ったスズメバチが、頭の上5mくらいのところを5匹旋回していた。
あの時のスズメバチと比べれば、可愛いものだ。
と、言い聞かせてみても、やはりスズメバチ。
Gの生命力パワーで死にはしないだろうけれど、刺されると痛いだろう。
俺は巣が丸々入る、大きく丈夫な袋をもって来ていた。
全てのスズメバチの動きを止めて、Gで退治する方法も考えたけれど、巣ごと全て捕らえる方が楽そうだ。
「よし！」
俺は気合いを入れた。
「あなた。もしかして、スズメバチを退治する気？」
振り返ると、学校から帰ってきたばかりといった感じの、少しお嬢様っぽい女の子が立っていた。
制服は、都内で一番の、お嬢様高校の制服だ。
まあこのばかでかい庭のある家に住んでいるわけだから、実際お嬢様なのだろう。
俺の嫌いな金持ちってわけだ。
それでも俺が此の仕事の依頼を受けたのは、周りに住む人達が危険な為。
「ええ、奥様から頼まれましたので、そのつもりですが。」
なんだろうか。
顔は可愛いんだけど、いかにもお嬢様っぽくて、俺の好きなタイプではない。
でも、本能と言うか勘と言うか、俺にはこの子が凄く身近な存在に見えた。
「それ、待ってもらえませんか？」
少し悲しそうな目。
その目をすぐにそらして、俯く。

「私は頼まれたからやろうとしていただけなので、やめてほしいならやめますけど。」

「えっと、やめて欲しいとか、じゃなくて・・・」

どうもはっきりしない。

この人は、何が言いたいのだろうか？

「注文があれば言ってみてください。出来る限りは善処しますから。」

俺は俳優時代に鍛えた笑顔で、女の人をのぞき込んだ。

「あ、え、えっと、その、殺してしまうのは、どうかと思っただけで・・・」

なるほど。

この子も、俺やメグミと同じで、害虫だとか気持ち悪いとかで、虫を殺してしまうのが嫌なんだ。

「そうだね。ゴキブリだって、ハチだって、生きているんだもんね。」

「ゴキブリは、死んで欲しい・・・」

・・・

よくわからないけれど、Gはダメらしい。

いや、やっぱり駄目かな。

まあとにかく、殺さないように俺は駆除しないといけないようだ。

それでも、それは嫌ではない。

殺さずにできるものなら、俺もそうしたいと思うし。

「えっと、俺は高橋光一って言います。名前聞いてもいいかな？」

俺の勘どおりに身近に感じる、この女の子の名前が知りたくなった。

「えっと、神野華恵です。」

「ありがとう。神野さん。」

「えっと、華恵で結構です。」

いきなり名前で呼んでくれって人も珍しいな。

まあ、どっちでも良いけれど。

「うん。では、スズメバチを殺さずに、どうすれば良いか考えるか。」

華恵ちゃんは、嬉しそうだ。

だから、ふと、聞いた。

「もしかして、ハチが好きなの？」

「ええ、大好きです。」

ハチが大好きって人も珍しい。

だから、理由が有るんじゃないかと思った。

「どうして、好きなの？」

華恵ちゃんは少し照れくさそうに、そして少し真剣にこたえてくれた。

「前に私、誘拐されそうになった事があったの。その時に「たすけてー！」って言ったら、スズメバチが助けてくれて。偶然そう見えただけなのだろうけど。」

もしかして、この子も？

俺は何となく確信した。

会ったばかりなのに、この身近に感じる感覚。

最近メグミという時の感覚に近い。

「ちょっと、お願いしても良いかな？」

俺は、真実を確かめる事にした。

「何をです？」

「あのスズメバチに、巣に戻れって、命令してみてくれない？」

「な、なんで？恥ずかしいですよ。」

まあ、いきなりこんな事頼まれて、言ってくれる子も少ないだろう。

どうするかな。

「どうしても、確認したい事があるんだ。」

俺は、良い案が思いつかず、とにかく頼み込む。

「あのスズメバチを殺さないって、約束してくれるなら・・・」

おっ！マジで？

この子良い子かも。

俺基準で！

「うん。約束するから。お願い！」

俺は顔の前で手を合わせた。

「で、では・・・」

・・・

「約束ですよ？」

顔を少し赤らめて躊躇していた。

「うん。」

やはり恥ずかしいようだ。

「えっと、巣に戻りなさい！」

・・・

真っ赤になって、俯いた。

可愛いと思った。

おっと、華恵ちゃんを見ている場合ではなかった。

命令されたハチは・・・

巣に戻っていった。

「戻りましたね。」

「華恵ちゃんは、ハチと会話ができるんだね。」

「したことないですよ。」

そらまあ、知らなかったみたいだからな。

「もう一つ、聞いても良いかな？」

「何を？」

もう一つは、温暖化により、永久凍土が溶けている場所に、行った事があるかどうかと、夢を見たかどうか。

「ハチに助けてもらったのって、何時？」

「数ヶ月前だけど。」

「じゃあ、その前に、北極とか南極に近い場所に、旅行なんて行ったりした？」

「ええ、旅行は頻繁に行きますから、行っていると思うけど。」

やっぱり。

後は夢。

「じゃあ、ハチの神様が出てくるような夢は見たりしてない？」

これで見れば、華恵ちゃんも間違いなく、俺達と同じ。

「んー、夢はあまり覚えていない方なので、でも、ハチに助けられる夢はよく見る気がするかも。」

このままでは微妙だな。

さっきのハチは、偶々巣に戻った可能性もある。

此処はわかりやすい命令をするべきだ。

「もう一度、今度は、巣にいるハチ全てに命令する気持ちで、此処に集まれって、言ってみて。」

「どうしてそんな事を？もしかして、私って、ハチとお話できるの？」

「おそらくは、全てのハチと話ができて、自在に操る事ができると思う。」

「何故光一さんが、そんな事わかるの？」

ココまで話して違っていたらごまかせない気もするが、おそらく華恵ちゃんは、ハチを自由にできる、

俺達と同じ能力者だと確信していた。
だから話しても問題ないだろうと思った。
「俺も、別の虫を自在に動かせるんだ。」
「まさか、そんな事あるわけないよ。」
「だから、試してみて。」

．．．

華恵ちゃんは、少し腑に落ちない感じだったが、しっかりした声で、巣に向かって叫んだ。

「みんな集合！」

すると、1匹、また1匹と、スズメバチが巣から出始めた。

そのハチ達は、迷う事なくこちらに向かってくる。

華恵ちゃんは少し怖がっていたが、俺が後ろから肩に手を置いて、逃げられないようにした。

ハチはドンドン集まってきて、30秒ほどで、大量のスズメバチが目の前で空中停止していた。

「どうだ？言う事聞いてくれたらどう？そのまま、あっちの山で生活するように、言ってみな。」

華恵ちゃんは最初怖がっていたけれど、既に愛するものを見る目になっていた。

「ごめんなさい。此処に巣があると、みんな怖がるから、あっちの山の中で、暮らしてくれない。」

命令って言うよりは、お願いだ。

何となく、華恵ちゃんの人となり伝わってきた。

スズメバチ達は、なんとなく頷いたような気がした。

「じゃあ、巣を山の方に持っていくか！」

俺は無人ならぬ無ハチになった巣を、借りた鋸で切って袋に入れた。

巣と華恵ちゃんを車に乗せて、山へ向かう。

自動車で行けるところまで言って、後は歩いて15分。

先ほどのスズメバチ達が向かった辺り。

木に付ける事はできなかったの、少し洞穴みたいになっている所に入れた。

「どうだ？さっきのスズメバチ達が、何処にいるか感じないか？」

「なんだろう？わかるよ。」

「この能力、いろいろ後で説明するけど、華恵ちゃんは、ハチのいる場所ならすぐわかるんだよ。」

「うん。此処に、巣、置いておくからー！」

華恵ちゃんは、おそらくスズメバチがいるであろう方向に叫んだ。

その表情に、この能力に対しての驚きはなく、とてもすがすがしい笑顔をしていた。

港川警察の山瀬

蜂の巣を移動した後、華恵ちゃんと色々話をした。

自由に話して、命令できる事はもちろん、見た物、聞いたものも感じる事ができる事。

後は、その生き物にまつわる能力が使えるであろう事。

それからいろいろ試したら、どうやら毒と針に関する能力のようだ。

今後は本人の努力しだいで、何ができるかは予想できない。

後は本人まかせ。

で、やはり能力者の交流の為に、メグミに了承を得て、二人を俺の自宅に招いた。

「神野華恵です。」

「愛須愛です。」

知らない女子高生同士が初対面って、こんなものなのかな？

少し冷めた感じだ。

「えっと、メグミは、蜘蛛の力を持っていて、華恵はハチだ。で、俺がGだな。もし何か有れば、情報交換や助け合いをしていきたいと思う。」

俺は二人に、言いたい事を伝えた。

「うん。華恵さんも、よろしく。」

メグミが右手で握手を求める。

「えっと、はい。よろしく。」

握手するが、今一まだ堅い。

でもまあ、そのうち仲良くなるだろう。

なんてたって俺は、二人とも好きになれそうだし、なんとなくだけど身近に感じるから。

「で、俺さ。この能力を使って仕事してるんだけど、華恵ちゃんも一緒にやらないか？メグミは学校に行っていない時間は手伝ってもらったりしてるんだ。」

前にビルの外壁清掃なんて仕事の時は、下にスパイダーネット、上から糸でつるして貰った。

もちろん真夜中。

ちょっと怖かったけれど、落ちても俺の生命力なら、原型がある程度残っていれば死なないだろう。

Gの生命力は怖いくらいだ。

おそらく俺は、首でも斬られない限り死なないのかもしれない。

「うん。まあ、仲間だしね。」

仲間か。

良い響きだ。

俺は南極にいくまで、本当に仲間だと思える人なんて、妻と友達一人だけだった。

今日の前の二人は、本当に仲間だと思える。

たった半年未満の間に、今までの人生で手に入れていた仲間と、同じだけの仲間を手に入れた。

嬉しいと共に、今までの人生が、あまりにもつまらない人生だと思えた。

「華恵ちゃんは、スズメバチを数匹は部屋で飼っていたりするのかな？」

俺は、なるべく手元に、数匹のスズメバチを置いておく事を提案しておいた。

近くに、自由にできるスズメバチがあれば、何かと良い事がある。

しかしまあ、スズメバチは、寒くなると活動できないから、冬の間は使えないけれど。

「一応、家の屋根裏に一つ、巣を作っているみたい。で、建物近くでは目立たないようにしてもらってる。」

「なるほど。いざという時にはボディーガードにもなるし、冬場以外は数匹靴にいれておくのも良いよ。」

流石に周りを飛ばれたら、周りの人が恐がりそうだし。

そんな話をしていたら、電話が鳴った。

「ちょっとごめん。」

俺は二人に断ってから、電話に出た。

「はい、もしもし万屋イフです。」

「あー、こちら港川警察の山瀬と申しますが。」

電話は、どうやら警察からのようだ。

どうして警察から電話がかかってくるのだろうか。

先日やった、麻雀の代打ちがやばかったのか？

確かに金もかかっていたし、暴力団やマフィア相手だし、迂闊だったかもしれない。

「人捜し、とかって、やってもらえるのかな？」

どうやら、麻雀は関係なく、仕事の依頼のようだ。

俺は心の中で息を吐いた。

「はい、金と心によっては行いますが、見つけれられる保証は出来かねます。」

普通人捜しなんて、探偵とかの仕事だし、警察が見つけれられない人を、ただの万屋が見つけれられるとは思えない。

あくまで、普通ならだけど。

「極秘に探している犯人を、探して欲しい。」

警察のお願いってわけだから、引き受けたいところだけれど、そんな依頼を万屋風情にやらせて良いのか？

「そんな大切な仕事を、私なんかによらせても良いのですか？」

「あなたの事は、一応いろいろ調べさせてもらった。」

なんだ？

もしかして、能力の事がばれたとか？

それとも、政府から何かが漏れた？

「と、申しますと？」

「これは他言無用、極秘事項として扱って欲しい。警察からのではなく、私からのお願いとして。」

どういう事だろう？

今回の仕事の依頼は、警察からのお願いってよりも、個人的なお願いって事だろうか？

「万屋イフの話は聞いてるし、そのへんは大丈夫だと判断したのだが。」

「ええ、わかりました。ただ、仕事と言う事なので、会社の者数名には話す事も有りますが、ご了承ください。」

「信頼できる人ならかまわない。」

「はい。ではお聞かせ下さい。」

とりあえず話を聞くことになった。

「私個人で、吉沢って人物とちょっとつき合いがあってね。」

吉沢？

その名前で知る人物は、一人しかいない。

「はい。」

「浜崎組の吉沢だけど、知ってるよね？」

なんとまあ、警察の人と暴力団につながりが？

「ええ。」

「私は一度彼を逮捕した事があってね。それ以来、個人的につき合いが有るわけだ。」
テレビでありがちな設定が、実際にあるという事か。

「そうなんですか。」

「あなたの話は、彼から色々聞いてね。それで信頼できる人だと判断したわけだ。」

麻雀以来、俺は妙に吉沢さんから気に入られている。

何度か電話があって、1度一緒に出かけた事もあった。

俺をどうしても組に入れたらしいけど、俺は断っている。

でもまあこれで、俺に仕事がきた理由は納得できた。

「はあ。では、仕事の話をお願いしますよ。」

「受けてくれるのか？」

「それは、仕事の内容を全て聞いてから、金と心で判断します。」

まあ今回は、心って言う分には大丈夫だろう。

警察の不祥事も増えている世の中だから、正直警察を信用できない部分もある。

でも、この山瀬って人は信用出来そうだ。

「マフィア幻術って、知ってるかな？」

マフィア幻術は、普通の人にはあまり耳にしないが、アジアのどこぞの国に本拠地をおく、そこそこでかいマフィアだ。

しかし俺は、普通知り得ないこのマフィアの名前を知っている。

何故なら、麻雀の代打ちをした時の相手の人たちが、このマフィアの人たちだったからだ。

此処は、しらばっくれた方が良くかもしれないと思ったが、吉沢さんが何か話しているのだろうと判断し、俺は肯定した。

「ええ、知ってますね。」

「でだ。そのマフィアの陳ってのと、ロバートってのをさがしているんだが、会った事ありますよね？」

うろ覚えだけれど、確か麻雀を打った相手が、こんな名前だったような気がする。

「おそらく会った事があるかもしれません。」

「吉沢さんが、あなたが会ってるはずだって言っていましたよ。詳細は聞いてませんが。」なるほど。

ではやはりあの時の二人か。

「それらしい人と会ったのは、二人しかいないので、吉沢さんが言うならそうかもしれません。」

「そっか。では、その二人を捜して欲しい。捕まえるのは我々がやるから、見つけてくれるだけでかまわない。」

そらそうだろう。

俺に捕まえろって言っても、そんな人捕まえられないからな。

「では、後は料金しだいで引き受けます。」

「見つけた場合だけってのは？無理かな？」

見つけられないと、無駄な努力になるけれど、悪い人なら捕まえたい。

「その二人が、一体何をしたか教えてください。それによります。」

「それは話せないが、おそらくかなり悪い事をしている。」

おいおい、証拠とかなくて、憶測だけで動いているのか？

しかし、悪い奴はつかまって欲しいし、判断が難しい。

「わかりました。では、見つけた場合のみでかまいませんが、料金はいかほど？」

「いくらだったら頼まれてくれるんだ？」

「そうですねえ。写真とかありますか？」

写真が有るのと無いのでは、見つけられる可能性はかなり違う。

「有るな。」

「では、それを貸してくれるって事なら・・・」

こうして、料金は適当に決めて、俺は仕事を引き受けた。

信頼と同居

「二人とも、俺は今から仕事が有るから。鍵渡しておくよ。」

俺は華恵ちゃんとメグミに、部屋のコピーキーを一つずつ渡した。

「ええ、これは？」

「えっと。」

「いや、俺達は仲間だし信用してるから、此処、好きに使っていいよ。俺の部屋には入れないけどね。」

一応仲間だし、信用はしているが、どうしても口外できない事が俺にはあるから、それらの資料がある部屋だけは、入れないようにしておいた。

「住んでも良いって事？」

「住めるね。部屋余ってるし。」

「えっ？」

確かに、部屋は2つ余っている。

隣の部屋を借りたのは、Gと一緒に住む事は出来ないからであって、部屋が足りないわけではなかった。

しかし、流石に女子高生2人と同居はどうかと思うんだけど・・・

「ああ、住みたいなら、別に使って良いよ。」

・・・俺弱い・・・

「じゃあ、私は住もうかな。」

「うん、それなら私も・・・」

華恵ちゃんもメグミも・・・

良いのか？

ホントに住まわせて良いのか？

俺は本当は50歳以上だけれど、今は二十歳そこそこの若い男だぞ？

そこにピチピチの可愛い女子高生。

・・・

なんだ、最高のシチュエーションじゃないか。

オッケーオッケー。

俺は軽く考える事にした。

「では、部屋に鍵が必要ね。」

「いらんないんじゃ？」

「やはり見られて困る物とか、秘密とかあるでしょ？」

「有るけど、此処にいる人は仲間だから。そう言えば、光一も鍵ついてるね。」

華恵ちゃんは鍵が必要だと言い、メグミはどうやら必要ないと言う。

これは育ちの違いかなと思った。

「まあ、いくら信頼して信用している人でも、話せない事ってあるからね。」

俺の場合は、政府に口止めされている事だ。

「そうよね。」

「でもそれって、信用して信頼してないって事なんじゃ？」

メグミから信頼感が伝わってくる事は素直に嬉しい。

でも・・・

「では、誰かに口止めされている事を、もし君たちに話したとして、俺は約束を破った事になる。約束を破る人を、君たちは信用できるかな？」

そうなんだ。

自分を信用してくれて、自分にはなんでも話す人ほど、俺は信じる事ができない。
それはきっと、俺が話してはダメだと言って話した事を、他の誰か信用出来る人に話すって事だから。
「なるほどお。」
「では、私は早速鍵をつけます。」
どうやら納得してくれたようだ。
それにしても、マジで住む気だよ。
どうでもいいけどね・・・
嘘です。
嬉しいです。
「では、俺はちょっと出かけてくるから。」
「はい！」
「行ってらっしゃい。」
二人に見送られ、俺は出かけた。

港川警察の山瀬さんと会うため、俺は六本木に来ていた。
ヒルズ前にあるベンチに座って、スーツにサングラスという格好の人を捜す。
歳は40だと言っていたから、俺よりも10歳以上若い。
と言っても、今の一応の年齢よりは、20歳も上の人だ。
ベンチに座って1分もしないうちに、目的の人は見つかった。
「山瀬さん、ですか？」
「ああ、君か。思ったより若いな。吉沢の話だと、もっと大人だと思っていたよ。」
現在確かに俺は、この人の20歳下だけど、やはり年下にこれだけ下に扱われる言葉使いは好きではない。
いや、正確には皆普通に話したいのだけれど、日本ではなかなかそうもいかない。
だから仕方のない事だけど、歳が明らかに下だと思った途端に、態度と言うか、言葉使いが変わるものもいかなものか。
「その若造に、こんな重要そうな仕事を頼んでも良いんですか？」
俺は顔を引き締めて、少し嫌味っぽく言った。
「いやいや、失礼。まあ仕事を依頼した理由は、ぶっちゃけホシを見た事がある人が、万屋をやっていたから頼もうと思っただけなんだ。」
いきなりぶっちゃけやがりましたな。
「でも、決して高橋さんの力を軽んじてるわけではないんだ。吉沢があれだけ誉めるし、電話で話しても大丈夫だと思ったよ。」
「そうですか。」
まあ、悪い人ではなさそうだし、結構頭もきれそうな刑事さんだ。
此処で仲良くしておいても損はないだろう。
「では、写真いただけませんか？」
「ああ、そうだったね。その前に、どこか入って話さないか？」
いや、話す事なんてないんだけど、どうするか。
「写真以外で、私に必要な事はないですが？」
「だからますます話したいね。話したいのは俺の欲求だ。」
「そうですか。では・・・」
俺達は、近くのカフェに入った。
店は混雑していて、結構五月蠅いくらいだったから、普通に喋っていても、誰かに聞かれてまずいなんて事はなさそうだ。
それでも俺達は、多少声をひそめて喋る。

「まずは先に、写真を渡しておくよ。」

「はい。」

俺は写真を受け取った。

写真は2枚。

1枚は、パスポートにでも付けるような証明写真のようで、もう1枚は隠し撮りしたような写真だった。

「どう？やっぱり会った事ある？」

確かに、麻雀を打った相手だった。

「はい。見た事ありますね。」

これ以上はあまり聞いて欲しくないから、俺はそそくさと写真を胸ポケットにしまった。

「そっか。で、見つける自信が有りそうだけど、どうやって見つけるんだ？」

俺は自信ありそうにしていたのか？

確かに、不安には思っていないから、そこから読みとられたか。

流石に刑事さんの洞察力だ。

侮れない。

「そうですねえ。占いでもして捜しますよ。」

まあこう言っておけば、普通は話したくないと悟って、はぐらかされたふりをしてくれるのが人というものだ。

「そうか。アメリカでも超能力のような力で、事件を解決する人がいるから、そんな事も可能なのかもしれないな。」

俺はてっきり、はぐらかされてくれるか、もしくは嘘だと言われて、更に追求されるものだと思っていたけど、肯定ですか。

この人は結構やりにくいな。

味方にできれば頼もしい人だけど。

「冗談ですよ。普通に捜しますよ。写真と違って、見せても大丈夫ですよ。」

「ああ、詳細を話さなければかまわんよ。」

山瀬さんはそう言うと、ニコニコと俺の顔を見ていた。

マジやりにくい。

いつの間にか、氷だけになっていたアイスティーをすすると、ズズズっと音が鳴った。

「そろそろ出ませんか。ちょっと人を待たせてるもんで。」

店に入ってから、まだ10分くらいしか経っていないかもしれないけれど、俺は居心地が悪かったので、適当な嘘をついた。

「そうか。じゃあ、今日はこのへんで。又時間がある時にでも話しましょう！」

まあ嘘だとばれていそうだけど、今度は俺の意志をくみ取ってくれたようだ。

店を出ると、俺達はすぐに別れた。

どうやら山瀬さんは、忙しい中時間を無理にとっていたようだ。

別れる瞬間から、電話をかけながら歩いていった。

「おかえりなさい〜」

「おかえりー！」

「ああ、ただいま。」

マンションに戻ると、既に二つの部屋には鍵がついていた。

マジで住むのだと思うと、少しウザイ気持ちと、かなり嬉しい気持ちがわいてきた。

しかし男たるもの、此処で浮かれてしまってはダメだ。

何がダメなのかわからないが、とにかく平常心。

「これから少し仕事の話するけど良いか？」

「いいよ。」

「どんな仕事なの？」

二人ともやたらと乗り気だ。

てか、その前に親に確認とか連絡とかしなくていいのか？

まあそれは後でいいか。

「詳しくはまあ、君たちに話す必要もないから、とにかく仕事内容を話すとだな・・・」

俺は写真を胸のポケットから取り出し、二人に見えるようにテーブルに置いた。

「この二人を捜す？」

「電話でそんな事言っていたわね。」

「ああ聞いてたか。まあそういう事だ。で、俺は別に必至に捜すつもりはない。Gを使って捜す。」

実際、マフィアな人たちを捜索なんて、実はかなり危険だと思う。

「じゃあ私は蜘蛛ね。」

「私はハチだけど、見つかるかしら。」

「そうだな。外を捜すのは、ハチが空から、Gが地上を。蜘蛛は室内とか、後は自然が多い場所かな？

そこはハチも行けるか。」

とにかく、二人が捜し辛い所は、俺のGが受け持って、捜す事になった。

まずは写真をスキャナでPCに取り込んで、修正した後再びプリントアウト。

それを二人に渡して、多くの虫に見せて捜してもらう事になる。

俺は視覚や聴覚を共有って言うか、シンクロ出来るから、俺の見た写真の画像を、隣の部屋のGに飛ばす。

二人もできるはずだから、もしかしたらそうするかもしれないが、それはまかせる。

今回の人捜しは、俺が一番見つけやすそうだ。

何処でも、何処にでもいるGは、はっきり言って使える。

こうして俺達の、人捜しの仕事がスタートした。

二人の女子高生と初仕事

人捜しスタート直後から、隣の部屋のGは、ほとんどが出払った。

もし今、何か急ぎの仕事を頼まれたら、Gが大量に必要なものは受けられないが、まあ少し時間が有ればすぐに集められるし問題はないだろう。

そのへんが、Gの良いところだ。

ハチだと冬場は活動すらできないし、蜘蛛も数が減るとか色々欠点がある。

ただ、Gには無い攻撃力が他には有るし、温暖化しているとは言え、Gも冬は動きが鈍くなる。

そろそろ秋も終わる時期だし、華恵ちゃんが仕事参加するのは、これが終わればしばらく無理だろう。

それにしても、今回の仕事は暇だ。

ただ待つだけ。

「ああ。又負けちゃったあ。」

「ふふ、カクゲーは自信あるから。」

事務所のテレビに備え付けてあるゲーム機。

俺はほとんどシミュレーションゲームしかしないのだけれど、どうやら華恵ちゃんとメグミが、自分のソフトを持ってきたようだ。

それにしてもメグミがカクゲー得意だとはね。

それに華恵ちゃんもゲームが好きなようだ。

「今度はこれで勝負よ！」

華恵ちゃんの取り出したゲームは、かなり昔に流行ったパズルゲーム。

まあさっきやっていたカクゲーも、かなり古いタイトルだったから、二人とも最近のゲームはやっていないのだろう。

「ふふ、パズルゲームも得意よ。」

・・・

どうやらメグミは、ゲーム全般が得意なようだ。

メグミは華麗に、色とりどりの変な生き物を、色を合わせて積み上げる。

華恵ちゃんは、完全に色を合わせているから、ほとんど積み上がっていない。

一見華恵ちゃんの方が勝ってるように見えるが、メグミは連鎖による一気の勝利を目指しているようだ。

。

「そろそろいくよ！」

「此処まま押し切るわ！」

華恵ちゃんの意気込み虚しく、すぐにメグミの連鎖が決まった。

華恵ちゃんのエリアに、無色の変な生き物が積み上がって、そして負けた。

「ああ！愛強い！」

「子供の頃は、毎日やってたからねえ。」

メグミは少し寂しそうにこたえた。

確かに、ゲームが強いつてのは、今では一つのスキルにはなるかもしれない。

でも逆に言えば、それだけ練習する時間が有るって事。

すなわち暇人だとか、友達がいなかったとか、寂しかった幼少時代を過ごしてきた事が伺える。

それに現状、俺のマンションにあっさりと転がり込んできた事を考えれば、未だに何かがあるのかもしれない。

まあただ単に、通ってる高校が近いから此処に住んでるって話もあるけれど。

でも親が許してるのが信じられない。

俺は一応、両方の両親に電話した。

話としては、我が会社での住み込みアルバイトの許可を得た訳だけど。

両方の両親とも、迷いや否定的な言葉は一切無く、ただ「よろしくお願いします。」とだけ言われた。とにかく、深く考えていても仕方がない。

何かあるならいずれ本人が話してくれるだろう。

俺はそこで思考を切って、経理の仕事に取りかかった。

万屋イフは会社と言っても、社員は俺だけだ。

会社法が改正されて、資本金は1円から、社員も取締役も一人で会社を立ち上げる事が可能になったから、俺は会社にしたのだが、全て一人ではやはり辛い。

まあ仕事の数もたかがしれているから、辛いと言う事はないはずだけど、その理由が鬱陶しいのだ。

俳優をしていた頃は、税務署への申告は、払いすぎた税金を返してもらう為だったから、頑張って申告したのだけれど、今は払う為の申告なのだ。

何故わざわざ払う為に、仕事をしなくてはならないのだ。

更にはそれ以上に、どう説明したら良いのかわからない利益はどうすれば良いのか。

経費は？

ゴキブリを飼う為に部屋を借り、餌を買う。

部屋は倉庫とでもするのか？

餌は、バイトの二人への食事代にするか。

難しい。

収入の方も、麻雀の代打ちで100万円って、どう説明するのか。

これは領収書も出してないから、そのままポケットに入れるか。

これって脱税になるんだよな。

ああ、どうしたら良いんだ。

でもまあ、今年はその100万円を除けば、そんなに収入は無いし、ギリギリ黒字になる程度だから、心配は儲かるようになってからしよう。

そんな事を考えながら、俺はキーボードを叩いた。

人捜しの仕事を受けてから、5日が経った。

ハチとの交信の為、実家に戻っていた華恵が、我がマンションに戻ってきた。

いつのまにか、華恵ちゃんの事も、華恵と呼び捨てにするようになっていた。

「見つけたよ。」

会うと開口一番、華恵は笑顔でそう言った。

「えっと、陳かロバートを見つけたのか？」

「うん。両方見つけたみたいだよ。」

どうやらハチから、見つけた旨、報告を受けたようだ。

「おお、よし！早速確認して連絡しよう。」

「うん。」

華恵は部屋のPCのマウスを握ると、大手検索サイトの地図を開く。

此处では最新の地図情報を、無料で見ることができる。

世の中便利になったものだ。

地図で示した位置は、都内のかなり中心だった。

「よし、そう遠くは無いから、自動車で向かおう。」

俺は華恵をつれて、ターゲットが潜伏しているマンションを目指す。

一応確認の為に、実際に自分の目で見ておきたい。

とは言っても、Gの視覚にリンクして、Gの目を通して見るのだけれど。

ただ、Gの視覚に意識を繋ぐ為には、ある程度近くまで行かなければいけない。

だから俺は、マンションの近くまで行く必要があった。

30分ほどで、ターゲットのマンションが見える所まで来た。

自動車を止めて、Gを数匹放つ。

華恵も報告を受けたミツバチを放ち、案内を頼んだ。

「では、案内して。」

するとミツバチを先頭に、その後をヤマトGがついて飛んで行った。

見つけたのは高層マンションの窓からのようだ。

流石にあそこだと、Gや蜘蛛には見つけづらい。

俺は意識をGへと飛ばした。

Gのしているものが流れ込んでくる。

空を飛ぶ感覚を、間接的に感じた。

流石に、空を飛ぶ感覚は少し怖い。

そうこうしている間に、目的の部屋の窓まで来た。

カーテンがしてあって、中が見えない。

Gはベランダに舞い降りると、排気口から進入を試みた。

あっさりと中に入る事ができた。

そしてすぐに、ターゲットの二人を視覚に捕らえた。

「よし！確かにあの二人だ。連絡しよう。」

「良かった～」

喜ぶ華恵を横目に見ながら、俺は携帯電話で、山瀬さんに電話をした。

「はい、港川の山瀬です。」

「万屋イフの高橋ですが。」

「ああ、どうしたんだい？みつかったのかい？」

相変わらず声からは、優しさと落ち着きが伝わってくる人だ。

しかし本当はくえない男で、少し苦手。

「ええ。都内のマンションの一室です。」

「見たのかい？」

「一応確認はしています。」

「そっか。では、場所を教えてもらえるかな。後はこちらで捕らえるから。」

そう言われて、俺は住所を教えた。

これで後は、山瀬さん達が来て捕まえる事ができれば、仕事は終わりだ。

俺は車のシートを少し倒して、待つことにした。

一応Gには、見つからないように部屋で待機して貰っている。

特に動きは無い。

ただ待つ時間がしばらく続いた。

10分くらい経っただろうか。

パトカーのサイレンと共に、数台のパトカーと覆面パトカーがマンション前に止まった。

「おいおい、何故そんな登場するんだよ。」

案の定、部屋の中のロバートが気がついて、ベランダからパトカーを確認していた。

そして陳と言葉を交わすと、すぐに部屋を出た。

でもまあ、これだけの警察が集まれば、簡単には逃げられないだろう。

しかし、ゆっくりと入り口辺りでたむろしている警察をよそに、ロバート達は裏の駐輪場の方へと向かった。

追跡させているGの視覚には、今にも壁を乗り越えて、マンションの敷地から出ようとしている二人の姿が映る。

「やばいな。逃げられる。華恵、ハチで逃走を邪魔してくれ。俺もGでやる。」

「オッケー。」

壁の外側から、数匹のスズメバチと、大量のミツバチ、更には何匹かのGが、逃走しようとする二人

を襲った。

足止めは、とりあえずうまくいっているようだ。

俺は電話する。

「山瀬さんですか？裏から逃げようとしてますよ。早く裏に回ってください。」

「へえ、凄いね。今も二人を追跡してたんだ？」

「離れた位置から、裏を確認してただけですよ。とにかく早く頼みます。逃げられても料金は頂きますよ。」

俺は言いたい事だけを言って、電話を切った。

それにしても、この山瀬って人は何を考えているのだか。

「すぐに山瀬さん達が裏に回るはずだから、ハチ達は引かせよう。」

「わかった。」

俺達は能力で意識を繋いで、虫達に戻るよう支持した。

追跡用Gだけはそのまま追跡していたが、すぐに駆けつけた警官によって捕まる二人を視覚に捕らえる事になった。

「ふう～。終わったみたいだ。」

「良かったわね。無事仕事が終わって。」

「今回は、見つけてくれた華恵のおかげだよ。」

「見つけたのは、この子だけだね。」

華恵が指さす所には、ミツバチが飛んでいた。

港川警察の山瀬さんからの仕事を終わらせてから数日、俺はギャラを貰う為に、前に会った六本木のカフェで再び会っていた。

「いや、ありがとう。おかげで全とうまくいったよ。」

そう言ってお札が入っているであろう封筒を、俺の方に差し出してきた。

俺はソレを黙って受け取ると、そのまま懐のポケットに差し込む。

「あれ？確認しなくていいのかい？」

「ええ、相手は警察ですし、信用してますよ。」

まあ本音を言えば、こんな所で札を数えるのもどうかと思っただけ。

ファーストフードやコンビニで、皆がいるところで札を数える店員、アレはどうかと思うのは、俺だけだろうか。

「そっか。後から、少ないとか文句言われても受け付けないよ。」

「ええ、かまいません。」

「ふふ、本当は、少し多く入れておいたから、驚くところが見たかっただけなんだけどね。」

「そうですか。それはありがとうございます。」

そう言われれば、これが万札だとするならば、かなり多く入っている気がする。

かなり気になったが、俺はどうでも良いような風を装った。

「でも、よく見つけたね。どうやって見つけたのか、教えては貰えないかね？」

まあこんな事を聞かれる事はわかっていたから、正直会いたくなかった。

お金は振り込みでお願いしたのだけれど、警察の事情とやらで、手渡ししか無理らしい。

一体どういう事情なのか。

「企業秘密ですね。でもきっと普通ですよ。」

ああ、もうお金も貰ったし、早く帰りたいなあ。

「君の事を信用していなかったわけではないけど、君の此処1週間の行動を、見せて貰っていたんだけど、ほとんど探している感じでは無かったみたいだね。」

やはり見ていやがったか。

「そうですね。人捜しは別の人に任せてましたから。」

ある程度予想できたので、冷静にこたえる事ができた。

「会社は、一人の会社だとなっているけど、別に行動する人がいるんだね。」

「アルバイトと、後はまあ仲間って奴ですよ。」

めんどくさい。

早く帰してくれ。

「マンションで捕まえた時も、君は通りに止めた車の中にいたよね。なのに裏から逃げる奴らを逃さなかった。」

「見てたのは仲間ですよ。」

「わざとサイレンならしてマンションに向かったんだけど、それでも奴らには逃げられなかった。君の万屋は優秀だね。」

やっぱりアレもわざとだったのか。

山瀬さんにしては、馬鹿な事すると思っただけで、狙いだったとはね。

「でももう一度やれって言われても無理かもしれませんよ。仲間がしばらく離れますから。」

ハチはそろそろ動けなくなるし、Gも寒い外を活発には動けなくなるから、嘘ではない。

「その優秀な仲間っての、紹介してほしいな。これからも犯人探してのは必要になるから。」

「それは無理です。我々は、信用と信頼で成り立っている関係ですから。」

Gを「山田さんと田中くんです。」なんて紹介できねえって。

「ではまた何か有れば、君に頼むよ。」

「今回のように上手く行く可能性は少ないですよ。」

「それでも、他に頼むよりはよっぽど可能性がありそうだ。」

ああ面倒くせえなあ。

でも刑事は味方に持っているると便利っぽいよなあ。

昔流行った漫画でも、こういった職業をしている主人公は、警察や暴力団なんかと裏でつながる事はメリットだからなあ。

「世の為、弱い者の為なら、喜んで仕事は受けますよ。誰かの私利私欲からの依頼は断りますけど。」

「うん。わかった。じゃあ、要人のボディガードとか、そんな仕事でも受けて貰えるのかな？悪い人から狙われてる可哀相な人がいるんだけど。」

おいおい、いきなり次の仕事の依頼ですか。

でも、これは無理だろう。

虫をおおびらに使う事になるからそれは無理だし、俺が身をていして守っても良いけど、拳銃で撃たれて死なない俺をさらすのもねえ。

「ソレは無理ですね。そのスキルは我々にはありません。」

「そっか。まあ無理なら仕方がない。でも、私は何があっても、他人に話す事はしないから、信用してくれるようになったら・・・」

山瀬さんはそう言いながら、伝票を手にとった。

俺は座ったまま、黙って見ていた。

「では、何か有れば又ヨロシク。」

「はい。」

山瀬さんは伝票をひらひらと振って、出口の側のレジへと歩いていった。

なんとなくだけど思った。

もしかしたら、山瀬さんは俺の秘密を、ある程度理解しているのではないかと。

はっきりと能力についてばれているとは思わないけれど、何かしら不思議な事ができる事はばれているかもしれないと思った。

人探しの仕事の後は、特に何の仕事も無かった。

G退治も、活発に動く時期が過ぎたから、もう最近は入ってこない。

特に宣伝もしていない会社だし、仕事が無い時はこんなものだろう。

一緒に住んでいるメグミと華恵は、期末試験に向けて勉強に熱心だ。

さっき二人に「教えて〜♪」なんて猫なで声で言われたけれど、俺に高校2年生の勉強など、わかるはずも無い。

なんせあの頃既に俳優だったか、トレーニング中だったし、実際何十年も前の事だから。

それに二人は、都内お嬢様高校と、都立だけ進学校に通っている。

最初こそ二人の間には壁があったけれど、知能レベルが同じだからなのか、今ではすっかり仲良しになっていた。

勉強は、万屋イフの事務所で、二人並んでやっている。

どうやら試験範囲とか教科書とかが同じらしく、二人で時々教え合っているようだった。

「蜘蛛だったら、賢い人の頭上から覗けば、100点だっていけるよね。」

「そっかあ〜。それは良い考えね。ハチだと目立ちすぎるしねえ〜。テストの内容を、先に調べるのが良いかもねえ。」

どうやら勉強ではなく、それぞれの虫を使ったカンニングの方法を教え合っていた。

しかしまあ、学生の頃のカンニングなんて、世に出てからの犯罪と比べれば可愛いものだ。

こういった学生の頃に、少しの悪を経験しておけば、社会に出てからストレスで犯罪に走る事は少ない。

大きな事件や犯罪を犯す人の多くは、エリートと呼ばれていたり、子供の頃に真面目過ぎる子だったりする。

ずっと大きな失敗や挫折を経験せずに育ったら、大人になってから、少しの挫折が受け入れられなくなるものだろうか。

一言で全てを説明する事は、俺の頭では無理だけど、子供の頃の少しの悪は、俺は必要だと思っている。

「カンニングか？」

俺は二人の後ろから、少しのぞき込むような感じで声をかけた。

「えっ?! ああ、そんな事しないわよ。だた話してるだけだから。」

「ええっ? やらないの? でも華恵ちゃん賢いから、普通にやっても大丈夫か。」

俺が注意するとでも思ったのか、華恵は少しうろたえて、メグミは気にする事なく話をしていた。

「俺も学生の頃はカンニングしたな。」

「えっ?! そうなの?」

「光一ならやりそう~♪」

華恵の中では、俺はそこそこ真面目に見えるらしい。

メグミの方が、現状俺の事をわかっているって事かな?

「ああ。机にびっしり英単語書いたりね。でも結局、1点にもならなかったけどね。」

まあそうなのだ。

カンニングなんて、机に書く程度なら、教科を選ばないと点等取れるわけがない。

数学だって公式書いたところで、ちゃんと公式を使って例題を解いていないとなかなか解けないし、英単語がわかっても、文法がわからなければ意味がない。

「確かにカンニングなんて、誰かのを見る事以外だと、あまり意味がないかもねえ。」

「私はカンニングなんてしないから、そんな事どうでもいいわよ。」

俺はそんな話をしている二人を、ただなんとなく、少し嬉しい気持ちで見ている。

「試しにやってみようよお~。」

「私がそんな事できるわけじゃないじゃない。お父さんにばれたりしたら。」

メグミはおそらく、昔から結構、悪戯なんてやっていたに違いない。

どういった理由かはわからないけれど、俺にはなんとなくわかった。

おそらくは50歳を越えている歳のせいと、メグミが心を開いて話してくれているせいだろう。

華恵は、家がそこそこの名家っぽいから、かなり厳しくしつけられたのだろう。

それが何故今、此処で暮らす事を許しているのかはわからないけれど、締め付け続けた事を、両親が今になって後悔しているのかもしれない。

俺の実の親がそうだったから。

「大丈夫だよお。私達のやり方なら、絶対ばれないって!」

「そういう問題じゃなくて・・・とにかくダメなの!」

「ははは。華恵は怖いんだな。メグミ、お前だけ試してみろよ。」

俺は少しいやみたらしく、華恵をチラッと見てからメグミに声をかけた。

「大人がそんな事言って良いの?」

メグミは逆に少し引いていたが、これは作戦どおり。

悪い事をしている、又はしようとしている人に「やっても良い」と言えば、ある程度常識のある人ならやる気を無くすのだ。

ただ、逆効果になる時もあるから、重要な時にこの方法は使わない方が良い。

むしろどっちでも良いくらいな時に言うのがこつだ。

で、やらないと言っていた人は、この場合やるとか言い出すはずなんだけど・・・

「ええ、私は怖いからやらないわよ。」

あら? まだまだ俺は、華恵の事をわかっていないようだ。

「まあ、初めからやる気はなかったけどねえ。」

あらあら、しらせさせてしまったかな。

「光一、なんだか残念そうね。カンニングさせたいなんて、大人として失格じゃない？」

どうやら見透かされていたようだ。

だから俺は正直にこたえる事にした。

「ああ、メグミは結構子供の頃から、悪戯とかやってそうだけど、華恵はずっと真面目に生きてきてそうだから、少しは悪い事も経験したほうがいいかと思ってね。」

横から「えー！私もそんなに悪戯とかしてないよお〜。」と、メグミの声が聞こえた。

「わっ、私だって・・・」

少し寂しそうに、少し照れたような、華恵の顔が印象的だった。

「いや、悪い事をしている事が良くて事はないからな。やらないで済むなら、それが一番良いはずだから。」

そうなんだ。

悪い事をしない為に、悪い事をしようなんて、本末転倒のなにものでもないはずなんだ。

言ってみれば、インフルエンザの予防接種。

風邪をひく前に、少し風邪をひかせて、抵抗をつける。

人を傷つける前に、小さな傷を負って、傷の痛みを知る。

大きな悪い事をする前に、小さな悪い事をして、心の傷を知る。

それをせずにそれがわかれば、無理に悪い事をする必要はないんだ。

それに負けない強い心が有れば。

「光一って、お父さんと同じ事言うんだね。」

「えっ?!」

お父さんと同じ事。

それにはさほど驚きは無い。

きっと古い時代の人間なら、子供がする悪戯程度の悪など、悪だとは思っていない。

驚いたのは、それを言った時の華恵の表情が、なんとも寂しそうだったから。

もしかすると、悪い事をしてもいい、もしくははしてみろと言われる事が、嫌なのだろうか。

だとすると・・・

「お父さん、昔はそんな事言わなかったんじゃないのか？」

これはあくまで俺の勘。

華恵は、華恵とその母親や家を見ればわかるとおり、かなりしっかりとしつけられて育ってきている事は明白だ。

だからカンニングしろとか言われても、此処までかたくなに拒否するだけの、意志が存在する。

だけどそう言われるのが寂しい。

あっさり家を出て、此処に住んでいる事、それをあっさり許可した父親、考えれば答えは一つしか浮かばない。

「うん。昔はずっと厳しかったのに、高校生になってから、なんだか見捨てられたみたい。」

「いや、それは違うよ。」

俺は笑顔で、自信に満ちた顔でこたえた。

まあ、実際にそんな顔であったかどうかは、俺自身にはわからないけどね。

「どうして？ずっと私を縛り付けて教育してきた親が、突然「好きにしろ！悪い事でもなんでもやってみろ！」って言うんだよ？見捨てられた以外にどう説明できるの？」

少し、華恵の目が潤んでいるように感じた。

何故カンニングの話から、こんなマジな話になってしまったのかとも思ったが、俺は真面目に華恵にこたえた。

「お父さんはね、華恵をしばって育ててきて、友達と遊ばない、遊びをしらない、勉強以外の事がわか

らない華恵を見て、きっとわかったんだよ。」

「えっ・・・」

「華恵があっさりと此処に住むと言いだした時、きっと何かあるんだろうと思ったけど、まあそんな誤解だから良かったよ。」

家があっさりとする華恵、そしてそれを承諾する親。

やはり普通ではない。

家を出る事が、華恵にとって最高の悪で有り、見捨てた親から離れる手段だったのだろう。

「父親は、自分のしつけが間違っていた事に気がついて、世間を勉強させる為に俺に預けたんだろうな。勉強だけじゃ、今の世の中渡っていけないからな。」

そう、勉強よりもなにより、人とのつき合いが大切である事は、俺はいやと言うほど知っている。

「えっと・・・ホントに、そうなのかな・・・」

華恵はまだ不安なようだ。

まあ俺に言われたくらいで信じられるわけではないだろうな。

きっと、ずっと悩んでいた事だろうから。

「じゃあ、父親と話してみたらどうだ？何事も、本人と話すのが一番なんだよ。人付き合いってのは。」

「ええ！！」

「恋人でも、恋人の悩みを友達にするより、本人同士話した方が解決も早いし、絆も深まるってもんだ。さあ、行ってみよう！！」

俺は、立ち上がるように、華恵をあおった。

「ええっ！今から？」

「そうそう、思い立ったが吉日っていうじゃん？」

この言葉は、実に便利な言葉だ。

TPOってのは本来、同じ事を成すにしても、成功と失敗を分けるとても大切な事だ。

しかしそれを考えるのが面倒な時、「思い立ったが吉日」なんて言われたら、本当にそう思えてくる。

「よし、俺が車出してやろうか？電話じゃ顔が見えないからな。」

「ええ！！なんでそんな事になってんの？いいよ、自分で行くから。」

「そっか。じゃあこれ電車賃な。頑張って行って来いよ。」

俺は立ち上がった華恵の背中を強引に押して、玄関から追い出した。

「わかったからー！」

「はいはい。ちゃんと話すまで戻ってくんなよー！！」

俺は入り口の通路を歩いてゆく華恵に、少し大きめの声で言った。

華恵は恥ずかしそうに、そそくさとエレベータホールに消えていった。

「強引だねえ～」

すると後には、苦笑いしながらメグミが立っていた。

「まあ、最初から変だと思ったんだよ。家を出る高校生って、普通の家庭じゃあり得ないから。」

「此処にもいるんだけどね。」

そう言えばそうだ。

メグミの場合は、特に問題は見あたらない。

父親であろう喫茶メグミの店長とは、仲が良さそうだし、あえて言うなら母親の姿が無かった事くらいか。

「まあ何か悩みが有るなら、俺が全部聞くからな。話したくなったら話してくれ。」

「あいあい！」

愛と書いてメグミだけに「あいあい！」ですか？

少し笑いそうになった。

愛須愛

次の日の昼、華恵から電話があった。

明日の夜にはこちらに戻ってくる事と、もちろん両親とのわだかまりが取れた事の報告。

更には華恵の父親が、俺の事をべた褒めしていたって言うていた。

電話を切ると、横でメグミがニコニコしていた。

電話の内容はどうやら聞こえていたようで、特に聞いてくる事はなかった。

というか、よく考えたら今更だけれど、昨晚はメグミと二人きりだったんだよな。

結構夜遅くまで、一緒に喋ったりしていたけれど、まあ、全くもって良い雰囲気というような事にはならなかった。

これだけ意識しなくてすむ可愛い子ってのは、貴重だと思った。

「そうそう、私も一応話しておく事にしたから。」

勉強しているメグミが、視線は教科書やノートに向けたまま、ごく普通に話しかけてきた。

話というのは、おそらくはメグミが、あっさりと家を出て此処にいられる理由か。

だから俺は、普通に、でも真面目に、メグミの話聞く事にした。

「ああ。話してくれ。」

メグミの視線は、そのまま、手に持たれたシャーペンも、せわしなく動いたままだった。

「私の両親ってさ。私がまだ小さかった時に死んじゃったんだ。」

「えっ!？」

どこか普通じゃない何かがあるとは思っていたけれど、両親共亡くなっていたとは。

では、今あの店の店長をしている男性は、父ではないと？

「ああ、でもほとんど記憶にないんだ。まだ小さかったから。だからそれが悲しいって気持ちはないの。それに今のお父さんはいい人だし。」

メグミは先ほどとなんら変わるところも無く、ただ淡々と話し続ける。

「両親が亡くなって、今のお父さん夫婦に引き取られて、それからすぐに2人目のお母さんも亡くなったんだ。」

なんとも辛い、それでよくもまあ、こんなに良い子に育ったものだ。

おそらくは今の父親の愛情だろうか。

「今のお父さんは、それはもうかわいがってくれて、貧乏なのにゲームとかもいっぱい買ってくれて。だから私もゲームして。」

そうか。

あの店長は、メグミをととても愛している。

それは、あの喫茶店の名前からもわかる。

そして、メグミはお父さんにととても感謝している。

だから、その愛情にこたえる為に、与えられた物は喜んで使ってみせ、勉強も手伝いもしっかりして、こんな良い子にそだったのか。

メグミは、動かしていたシャーペンを置いて、こちらに体を向けた。

「お父さん、無理しちゃってるんだよね。私の為に。だから私も、無理して楽しそうにして、ゲームばかりして。」

「メグミも、話す必要があるんだろうな。お父さんと。」

「そうだろうね。だから昨日言っていたけど、私も悪い事なんて、ほとんどしたことがないよ。」

また俺は見間違っていたようだ。

メグミは、誰にも心配をかけないように、常にその人にあつた演技をしてきたのだろうか。

「お父さんは、メグミが本当に父親として認めてくれているか不安で、それがメグミには辛くて、だからお互いの為に家を出たって事か。」

「そうみたいだね。私も昨日の華恵ちゃんを見て、はっきりとわかつちゃったから。これから行ってこようかな。」

「行ってらっしゃい！」

俺はそう言って頷いた。

きっとメグミは、何もかもわかっていたんだろう。

でも、自ら踏み出す事が出来なかつただけ。

「でもさ、ちょっとやっぱり照れくさいから、一緒に来てもらっていいかな？」

「ああ、店が終わる時間あたりに、車出してやるよ。」

「うん。」

満面の笑みとは言えないが、メグミの本当の笑顔を見た気がした。

夜、喫茶メグミの営業時間が終わった後、店の客席に俺達は父親と向かい合って座っていた。

大事な話が有ると言って席につたから、もしかしたら父親は、結婚報告でも受けるような気持ちになっているのだろうか。

少し心の中で笑った。

「お父さん、聞いてください。」

「ああ。」

メグミはもちろん緊張している。

それ以上に、父親も硬くなっていた。

「私、お父さんの事好きだから。これまで育ててくれたこと、とっても感謝してるから。」

「そ、そうか。」

父親は少し嬉しそうだ。

しかし、すぐに顔を引き締める。

「だから・・・その・・・」

やはりなかなか、確信をはっきりと言うのは難しい。

すると父親から話してきた。

「でも、しかし、まだ早いんじゃないかな？ほら、愛もまだ高校生だし。」

ぷっ！

やっぱり勘違いしてるよ。

最初からわかっていたけどね。

「えっ？早い？そんな事ないよ。今まで話さなかつたのが間違いだったんだよ。」

「いや、えっ？！そんなに早く決まっていたのか？一目惚れか？」

くっくっく・・・我慢できねえ～！！

「何言ってるの？とにかく、今日はっきりと・・・」

「いやしかし。」

我慢出来なかつた。

「ははは！！お父さん、話がかみ合っていないですよ。メグミも普段は鋭いのに、こんな時だけわからないんだな？」

俺はもう真面目な顔に戻す事は出来なかつた。

「きつ、君。どっどういう事なんだ？」

「何がおかしいの？私真面目なのに！」

二人の反応が、尚おかしかった。

「ははは！！いいですか。私はメグミと結婚報告しにきたわけじゃないですよ。おとうさん。」

俺がそう言うと、しばしの沈黙。

そして、すぐに二人は驚いた。

「ええっ——！！！」

息がピッタリだ。

二人はこれほどお互いを気遣って、お互いを想っていたんだ。

はっきりと言って問題ないだろう。

俺は父親の方に顔を向けた。

「お父さん、メグミはお父さんが執拗にかわいがってくれる事が、申し訳なくて、逆につらかったんですよ。もっと遠慮なくガンガン言ってほしかったんです。」

俺は視線をメグミに向ける。

「メグミも、お父さんなんだから、もっと遠慮なく、気遣いなんて考えないで普通にしていれば良かったんだよ。その方が父親も嬉しいし、わかったはずなんだよ。」

ははは、言ってやったよ。

まあ、俺を連れてきたんだから、これくらいは許してほしい。

じれったいのって、俺は大嫌いなんだよね。

「あっ・・・そうなのか？」

「うん・・・そうかも・・・」

全く此の二人は。

しかしメグミが、これほどまでに幼かったなんて、それなのに考えや知識は豊富で。

いやあ～楽しい。

「じゃあ、俺帰るは。今晚は二人で話しなさい。メグミもまだまだ子供なんだなあ～」

「子供で悪かったわよお～」

メグミのそんな言葉にも、棘は全くなく、とても穏やかだった。

帰りの車の中、面白いその後の展開を見ておけば良かったとも思わなくもなかったが、まああれ以上は野暮ってもんだらう。

俺は笑みがこぼれた。

昨日今日で、二人に対する不安と疑問が、一気に解消して、俺は嬉しかった。

良かった。

山瀬の思い

「お父さん反対したんだけど、私がでてきてやったわ！」

戻ってきたメグミは、なんでも万屋イフに戻る事を父親に反対され、それに反抗して出てきたようだ。それでもメグミの顔には笑顔が有り、おそらくは父親も心の中では許している事が伺えた。

「そうか。家出とはなかなか。お主も悪よのお～」

「そ、そうよお。私だって悪いことするんだからあ。」

まあなんとなくだけど、俺もメグミも、あの父親も、全て心が伝わっている感じがした。今まで、仲良が良くてかなりわかりあえてるつもりだったメグミが嘘のようだ。

「じゃあまあ、俺は家出少女をこき使うとしますか。」

俺はメグミをバカにしたような顔をして、立ち上がった。

「ええっ?! 私は試験勉強があるんだよお～」

まあ、そうだろうね。

知ってるから。

「ははは、大丈夫だって。勉強なんて世に出ればほとんど使えないし！」

「でも、大学出る事は必要だし、出た方が色々メリットあるんだよお。」
だから知ってるし。

「知ってるよ。だから留守番頼むだけだって。」

メグミの顔がこちらを見たままで、キョトンとした表情で固まった。

ふふふ、からかわれた事に気がついたようだ。

顔がバカっぽいよ。

それにしても、こんな顔もできるんだな。

メグミの事をわかっていたつもりだったのは、メグミの演技によって、全てわかっていたように思わされていただけだったんだな。

女は生まれながらの女優だって言うけど、これは凄いな。

自分が俳優として成功しなかった事が、実力だったような気もしてきた。

「なによお。まあそれなら良いけど、仕事なの？」

「ああ、また山瀬さんに呼ばれた。あの人、何か色々探ってくるし、俺の事不思議に思ってるみたいだから苦手なんだよなあ。」

「じゃあ会わなければいいじゃない。」

「そうしたいけど、そうするとやっぱり何か隠してるみたいだし、何よりいい人だからなあ。」
そうなんだよ。

俺は苦手なんだけど、人としていい人ではあるし、保身や見栄を気にする警察にあって、この人はそれらが感じられない。

苦手なんだけど、俺は好きになっていたのだ。

「はいはい～! じゃあ私は勉強してるから、電話くらいは対応しておくわよ。」

メグミはそう言いながら、既に視線は教科書とノートに移っていた。

そう言えば、本当なら授業に出ている時間なんだけど、実家に帰っていた都合で、今日は学校を休んだようだ。

でもまあ、学校休むくらいは、今時の学生なら当たり前だろう。

ディズニーランドは平日が空いてるからって、休んで行く子もいるし。

「んじゃまあ～よろしくう～」

俺がそう言っても、メグミの視線は勉強へと集中していて、返ってきた返事は左手が揺れるだけだった。

山瀬さんは、いつも会う六本木ではなく、今日は天気も良いから代々木公園で話そうと言ってきた。いやいくら天気良くても、クソ寒いでしょ？

男と会うのに公園って、微妙でしょ？

そう思わなくも無かったが、いつもの場所では話辛い事でもあるのかなと、なんとなく思った。

絶対に人に聞かれてはいけない話なのかもしれない。

公園なら話していてもそうそう聞かれる事は無いだろう。

車を近くのコインパーキングに止めて、そこから歩いて公園へと入った。

するとすぐに、話しかけてくる人物。

もちろん山瀬さんだ。

いつものにこやかな笑顔。

というか、目が細くて瞳が見えない。

「こんな所に呼び出して悪いね。」

「クソ寒いですね。まあそれでも、思った以上に暖かい気もしますが・・・」

俺は寒いという固定観念があったから、寒いと思っていたけれど、実際感じてみるとそうでもない気がした。

「このところ温暖化で、本当に寒い日ってのは、そんなにはないみたいだからね。」

それは言い過ぎだけど、12月なんて冬と表現するには物足りない寒さだという事は言えた。

「私は世界を良くしたいと思って警察になったけど、今では駄目な国を守ろうとしている自分がおかしいよ。」

顔は笑っているけど、少し寂しそうだ。

「国民から見れば、山瀬さんはきっと本当の警察官だと思いますよ。」

本当の警察官とは何か？

そんな説明はできない。

警察官全てが本当の警察官なのだから。

それでも、本当の警察官の響きは伝わるだろう。

警察官でも犯罪をする時代。

警察官でも罪無き国民を苦しめる時代。

それを警察官と呼べる人がいたら、その人はきっと幸福ではないのだろうな。

「一応そう決められた立場にいるからね。」

山瀬さんは意味を理解しながらも、返す言葉は言葉どおりのもの。

誉められても自分で納得できなければ喜べない、損な人。

それ故に好感の持てる人。

「私は実は、山瀬さんが苦手なんですけど、でも好きだし応援するから、今日もこうして会いに来てるんですよ。」

「ははは、苦手と言う気持ちは正解だよ。私は何に対しても疑問は解決したいし、しつこいからね。」

「でも、そういう気持ちが犯罪解決への力になってるんですよ。」

「それだけの為に、ずいぶん多くの人に嫌われてるがね。」

結局のところ、山瀬さんは不器用だけど正義感溢れる人であるわけだ。

ただ後ろめたいところがある俺だから、きっと苦手なんだろうな。

隠し事も悪い事も無い人だったら、山瀬さんを苦手だなんて思わないだろう。

山瀬さんがもし多くの人に嫌われていると言うなら、それは悪人が多いか、秘密社会だからなのか。

俺自身、俺は自分の事を話してはいけないと、国から止められている。

こんな人だったり、国家権力の元に秘密にされる事柄は、もしかしたら沢山世間にあふれているのかもしれない。

「このへんで話しますか？」

俺達は歩きながら喋り、いつの間にか公園の奥、人気の無いところまで来ていた。

「そうだね。まあ、今日は仕事の話では無いし、君にとって嫌な話をする事は、もうわかっているのかな？」

「そらまあ、大事な話である事は推測してましたけど。」

俺の力の事を、何かわかったのか、それとも・・・

俺はあまり使われていなさそうなベンチから、落ち葉を払いのけて座った。

すると山瀬さんも、同じようにして横に座る。

俺達はしばらく黙ったまま、木から葉が落ちるのを見ていた。

じっとしていたらやはり寒い。

「君は、何者なんだ？」

突然そんな事を言ってきた。

おそらく何かつかんだのだろう。

それでも俺は喋るわけにはいかない。

特に国から止められている事は。

山瀬さんに話しても、おそらく誰にも話さないだろうから何事も起こらないだろう。

しかし、内緒にすると約束した事は、俺は誰にも話さない事にしている。

もし此処で、信頼できる人だからと話したら、それは俺が約束を破った事になるから、自分自身自分が信じられなくなる。

「高橋光一ですよ。そして人間です。」

これで引き下がってくれるとは思っていない。

これで引き下がってくれるなら、俺は山瀬さんを苦手だと思わないし、好きにもなれないだろう。

それに今日はいつもの喫茶店ではないのだから。

「君の事は色々調べさせてもらったよ。大事な仕事を依頼する人だからね。でも、調べても何も出てこなかった。」

俺は黙ったまま、山瀬さんが話を続けるのを待った。

「何も出てこなかったわけじゃない。データだけは出てきた。親だとか本籍だとか。でも実証できるものが何もないんだよ。」

そらそうだ。

高橋光一って人物は、生まれたのがついこの前だし、そのデータは国が作った偽りのもの。

「本当なら人の事をそこまで調べないんだけど、あまりに出てこないから不思議じゃないか。だから更に調べてみたんだよ。」

まあ不思議に思うよな。

それが山瀬さんだったから、更に調べる結果になったって事か。

果たして何処まで調べられたのだろうか。

それに、人捜しの仕事の前から調べていたのだろうか。

調べたとは言っていたけど、もしかしたらあの時は進行形だったのかもな。

それで最近、何かに行き当たったと・・・

「何も言わないんだね。」

「何も言えないんですよ。」

わかってるなら、きっとこの意味もわかるはずだ。

わからないなら、山瀬さんだったら更に調べるかもしれない。

でも、俺から聞き出そうとか、そんな事はしないし、既にある程度わかってるんだろうけど。

「まあ、君が言わなくても、かなりのところまでは調べががついてるんだけどね。」

だから此処で話しているんだろう。

「場所を配慮してくれてますからね。」

俺は自然と笑顔で山瀬さんを見ていた。

それでも山瀬さんは、いつもの表情のまま前方を見ていた。

「君の借りている部屋、居ない時に見させてもらった。」

俺は少し驚いた。

あの部屋を見られた？

いや、それ以上に山瀬さんが勝手に他人の部屋に入った？

警察なのに。

それを俺に言って良いのか？

俺は山瀬さんに気づかれないように、一応いつも持ち歩いているICレコーダーのスイッチを入れた。

信用できる人ではあるけれど、念のためだ。

全てを疑え。

それが俺が長く生きてきて学んだ事。

「この写真、見てもらえないかな。」

渡された写真は2枚。

1枚はGが大量にいる、あの部屋の写真。

この写真が、あの部屋に入った明らかな証拠だ。

「はは、あの部屋に入ったんですね。」

「ああ、君に許可を得ないで、勝手に入ったよ。あのゴキブリには驚いたけど、なついているって言い方はおかしいが、よく教育されているね。」

山瀬さんははっきりと、俺に許可を得ないで部屋に入ったと言ってきた。

これは俺が録音している事を知っていて、尚かつ自分は釈明しないと言っているのだとわかった。

この人は、自分がどうなるかが、俺の事を調べたい、いや、俺の能力を知りたいのだと思った。

そして何故か、俺の事を買っている？

「まあ色々訳有りなんですよ。」

能力の事については、もう隠せない、いや、隠す事は無理だと思った。

俺はもう1枚の写真を見た。

「えっ！！」

俺は驚いた。

そして思わず声に出してしまった。

流石にこの写真を見たら、山瀬さんじゃなくても疑問に思うだろう。

その写真とは、俺の30年前の写真、俳優をしていた頃の宣材写真だった。

白黒のその写真の中で笑う俺は、まさしく今の俺と同じ顔。

髪型こそ当時の流行だから違うけど、別人だと言っても誰も信じないだろう。

「僕はね、君がもしかしたら超能力者なんかじゃないのかと思ってたんだ。あの二人を見つけたのははっきり言って奇跡だ。何故なら私が依頼した日以降、あの二人は一步もマンションから出ていないと言っているから。」

なるほどね。

そんな人物を見つけるのは、ほぼ不可能だろう。

そして会社についても調べていて、女子高生アルバイト二人と、後は俺だけ。

プレーンがいるって言ったけど、接触している気配はないしな。

魔法でも使わない限り、見つけれない人をみつけてしまった俺。

どうやって探し出したか、向上心と好奇心のある山瀬さんなら、ますます気になったんだろうな。

それでも俺は言う。

「俺が、あの二人とつながっているって事は考えないんですか？」

普通なら、そちらを考えるだろう。

自分が助かる為に、仲間や取引相手を売ったんじゃないかと。

「そんなバカな事を、君がするかい？どうせ色々喋られて、結局捕まるような事。ああ、麻雀で対戦した事は聞いてるよ。まあそれはどうでもいいけど。」

おいおい、どうでも良いのか？

金や島の権利を賭けて麻雀してたんだよ？

まあそれは、山瀬さんの中では悪ではないのかもしれないな。

この人は信用できる。

俺は山瀬さんをそう判断している。

だから全てを話しても、全てを話してもきっと大丈夫。

国から止められている部分に関しては話せないが、能力については話しても良いかも。

しかし、メグミや華恵の事もあるから、今すぐ全ては話せない。

色々な想いが俺の頭の中を駆けめぐった。

「君は、今の世の中、どう思う？」

山瀬さんのいきなりの質問に、俺は一瞬面食らった。

話が全く変わっているが、おそらくは今日呼ばれた理由の本質。

「どう思うと言われてましてもねえ。」

「私はねえ。今が限界だと思っているんだよ。」

「限界？」

意味がわからなかった。

「そうだよ。改革しなければ、正さなければならない時期の限界点。」

「そうですか。」

俺も、今の世の中が嫌で、死のうとした人間だ。

民主主義になっても、誰かが王となり治めた時代でも、結局は権力者が富みを食らう世の中。

悪い奴が、得をする事が多々ある世界。

どうすればそれをやめる事ができるのか。

どうすれば、皆が幸せに暮らせる世界になるのか。

権力者が存在する限り、悪い事をする人がいる限り、それは変わらないものだと俺は思っていた。

しかし山瀬さんは、今ならそれを変えられると言っているように聞こえた。

もちろんそれを変える事はできないだろうけど、今より良くするシステムは、今の人達なら考えて作る事が可能だろう。

ネックは、そういった事を改善出来る人が、権力者である事。

変えるなら、それら権力者を凌駕する力を、改革者が得なければならない。

権力者の権力を、簡単に奪える力を国民が持たなければならない。

限界点ではあるけど、可能なのだろうか。

「君は、何かしらの能力を持っているんじゃないのか？全てを考えなおしても、その結論にしかいかないんだ。否現実的だと否定しても、私の勘がそう結論づける。こんな事は初めてだ。マジックにはタネがあるけど、タネの無いマジックを信じたくなった事なんて。」

「仮に私が、何かしらの能力を持っていたとして、山瀬さんはどうしたいんですか？」

話の流れから、きっと・・・

「世の中、変えないか？」

今日初めて、山瀬さんがこちらを直視した。

定期検査

すっかり空気の澄んだ季節になっていた。

そう感じたのは、おそらく朝が寒かったからだろう。

しかし、寒さが辛く感じる事はない。

いや、正確には辛いんだけど、昔と比べると、この季節にしては寒く感じないのだ。

これはもちろん温暖化しているからであって、確実に実感できるレベルになっている。

日本は、排ガス規制とかなんとか、京都議定書で目標をたててはいるが、実際実行となると難しい。

たとえば車を全て電気自動車にすれば良いかと思うが、自動車製造会社にしてみれば、製造ラインを変えたり、インフラ整備にも時間がかかる。

だから徐々に変えるのだけれど、その間の利益向上も目指さないといけないわけだから、自動車を売る努力をするわけで。

高級路線とか言って、更にガソリンを必要とする車をアピールしたり。

他でもそうだ。

石油製品の使用を押しえろとか言いながら、売れる商品を売る為に、綺麗なプラスチックケースを使用したり。

人間は、地球の事を考える前に、目先の利益を考えざるを得ない生活の中にあり、なかなか温暖化ストップとならないのは、しかたのないところなのだろうか。

とまあ、朝っぱらからこんな事を考えさせられる、涼しくも気持ちいい朝をむかえた。

先日華恵も戻ってきていて、又元の三人での生活に戻っていた。

テスト期間も終わり、二人とも手応え有りの様子。

「俺はこれからちょっと用事があるから、留守番よろしくな！」

俺は二人に声をかける。

「何処？また山瀬さん？」

「あの人しつこいよね・・・あっ！」

「どうしたんだ？カエは会ったことないよな？」

そうそう、華恵が戻ってきてから、何かの拍子にカエと呼ぶようになってしまった。

まあ愛称で呼ぶってのは愛情表現だから、今ではすっかり定着している。

「う、うん。会った事ないね。」

ふふふ、カエは嘘がつけない性格だ。

どういうわけかわからないけれど、山瀬さんはカエと、おそらくはメグミとも接触している感じだ。

先日山瀬さんと代々木公園で会った時に、俺は山瀬さんと約束した。

「世の中、変えないか？」

「どうして、そんな事を？」

「娘二人を、こんな世の中に残しては死ねない。それだけだよ。」

それは本心で、本当の山瀬さんが見えた気がした。

だから俺は、約束した。

「私のどうしても話せない事、調べる事ができたら、協力しますよ。」

まああの時は、ホント話してしまいたかったからね。

だけど、絶対約束は守る。

これは俺のつまらない信念だ。

わかっているけど、こういう性格だから仕方がない。

「じゃあな。」

「いってらっしゃ〜い！」

「しゃーい！」

二人に送られて、俺は部屋をでた。

今日は、俺の体の定期検査の日だ。

まあ、国の秘密機関に入って、また色々調べられるのだけれど。

でも、定期と言っても年1回だから、我慢我慢。

俺は待ち合わせに指定されている、国道沿いで待つ。

するとすぐに高級自動車が目の前で止まった。

ドアが自動で空いて、そこに俺が乗り込む。

すると、私がいた秘密機関の責任者、山田が中に座っていた。

「久しぶりだね。調子はどうだい？」

「ええ、異常も無く、普通に仕事もしてますよ。」

正直、この山田って人は好きではない。

自分の体を調べられているし、この人ってより機関自体が俺を不快にさせる。

ぶっちゃけ、異常がないんだからこんな所には来たくないのだ。

「ゴキブリ退治で儲けてるらしいじゃないか。そんな特技があったとはね。」

「まあ、偶々うまくいってるだけですよ。」

能力の事は、この山田も知らない。

なんせ機関を出てから気がついた能力だからな。

「女子高生二人と同棲しているらしいが、秘密については話してないだろうな。」

ちょっと山田の顔がゆがんで見えた。

実際憎たらしい顔にゆがめて喋ってるんだけど。

「約束は守ります。機関から出してただけで感謝してますから。」

これは本当だ。

あんな所にずっと閉じこめられていたら、刑務所と同じだ。

それをこれだけの条件で出してもらえた事には感謝している。

年一回の検査と、話さない約束だけで。

「だったらいいんだ。」

それにしても、俺も不思議だな。

死のうとしていたのに、閉じこめられてるのは嫌だなんて。

だったら死ねば良いのになんて思うんだけど、若い体を手に入れてしまったから、死ぬのが惜しくなったんだろうか。

気がついたら、政府の秘密機関の敷地内に入っていた。

こんな所に、政府の秘密機関があるなんて、きっとほとんどの人が知らないのだろうな。

普通の住宅街のど真ん中にある、少し大きな建物と敷地。

どこかの宗教の建物みたいで、近寄ろうとする人は少ないのだろうけど。

車から降りると、懐かしくも嫌な景色に、少しめまいがした。

建物に入っても、人がいる気配は無い。

秘密を守るには、関わる人を極力減らす事が一番の方法だから、此処にはほとんど人がいない。

どんな建物か知らずに、掃除のバイトなんかもいたりするけど、掃除は廊下や階段だけだ。

部屋には入れない。

そのバイトが入れない部屋に、俺と山田は入った。

「さあ悠二くん、早速始めるから、準備をしてくれ。」

「はい。」

此処では誰もいないから、久しぶりに本名で呼ばれる。

懐かしさとうれしさと、なんとも言えない嫌な気持ちがあった。

おおよそ1年前、正確には10カ月前と同じように、俺はベットに横になっていた。

山田の手によって、腕や足に何かを刺され、胸や頭に何かを貼られ、おおよそ人間を扱ってる感じでは

ないように思えた。

「あのウィルスは、もう出てないようだな。一体どうやったら若返る事ができるんだ。それさえわかれば、私はきっと世界一の研究者として名を轟かせる事ができるというのに。」

もう何度も聞いた、山田の独り言。

確かにそんな事ができるようになったら、ノーベル賞もんってか、世の中破滅へ向かうって。

歳をとらない人達で世の中溢れたら、地球は数世紀で人で埋まって終わりだよ。

何時の間にか、俺は麻酔によって眠りについていた。

検査が終わったのは、完全に陽が沈んだ後だった。

車で、来るときに寄せられた場所まで送ってもらう。

「じゃあまた、来年きてくれ。」

「はい。」

そう言ったところで、車が止まる。

ドアが自動で空いて、俺は車から降りた。

外の空気がとても美味しかった。

振り返ると、ドアが自動でしまり、山田はただ前方を見ていた。

車が走り出してから、俺は歩いて自宅マンションへと向かった。

足は少し重かったが、心はスキップしていた。

秘密

俺は今事務所で、メグミとカエ、そして何故か、山瀬さんとテーブルを囲っていた。
先ほど年に一度の定期検査を終え、スキップして帰ってきたら、まあ事務所に3人がいたわけで。
それもなんだか少し不安と言うか、神妙な面もちと言うか。

理由はわかってるんだけどね。

きっと今日の検査の事だろう。

俺は、最近この3人が会っていた事を知っている。

もちろん知らないふりをしていただけ。

そして、俺のジャケットに盗聴器らしき物が仕掛けられている事も。

俺は知っていて、あえてそのジャケットを着て、今日でかけたのだから。

政府機関も、俺の監視はしているが、そこまでのチェックはしていない。

何故なら、この事がばれて一番困るのは、俺自身であるからだ。

こんな事が世間に知れたら、マスコミは俺のところに押し寄せるだろう。

そして、世界の権力者が、若返りの秘密を知ろうと、俺を欲するだろう。

もしかしたら危険人物として、暗殺される事も十分考えられる。

だから約束はしたが、それは俺自身の為である部分が大きいのだ。

「約束どおり、君の秘密を調べたよ。」

少し歯切れが悪い。

俺と山田の会話は全て聞いたのだろうし、俺の眠っている間の山田の言葉もおそらくは聞いているの
だろうから、きっと全てばれてるだろうな。

「でしようね。一応全部、この場で話してみてください。」

「いいのかい？」

「俺は喋るなど言われているだけですから。」

はっきり言って、このところの事をふまえば、俺が喋ったのとなんらかわらないかもしれない。

でも俺は喋っていない。

「君の本当の名前は、西口悠二。どういうわけか、若返る事になった。これが30年前の写真だ。」

山瀬はそう言って、この前見せられた写真を出してきた。

メグミもカエも、その写真は既に見せられていたようで、特に驚きはない。

「若返りの秘密を調べる為に、政府機関に閉じこめられていたが、結局解明できず、今君はそれを喋ら
ない事を条件に、高橋光一として普通に生活している。」

「いやぁ～そこまでばれましたか。もう否定できませんねえ～」

俺は白々しく頭をかく。

「いやしかし、そんな事が本当にあるのか？いや、あるのですか？」

「ははは、今まで通りで良いですよ。それに山瀬さんは、私が超能力者だと思っていたんじゃないん
ですか？それから見れば、あってもおかしくないでしょ？」

「いや、そうなんだけど・・・」

山瀬さんは、頭で理解していても、現実をみてやはり信じられないようだ。

チラッとメグミやカエを見ると、あまり驚いていないようだ。

まあ、実際能力の事を知っているし、自分たちも能力者だ。

これくらい有ってもおかしくないと思っているのだろう。

俺が二人を見ている事に、山瀬さんも気がついたようだ。

「あれ？お嬢さん方はあまり驚いてないですね？」

「えっ？ああ、ちょっと放心状態になってるっていうかぁ～」

「えっ！うん。そうそう、放心状態。いやビックリです。はい。」

おいおい、メグミはまだマシだけど、カエは明らかに嘘ってばれるぞ。

俺は苦笑いした。

「君たちは知ってたんだね。」

「えっと、知らなかったんですけど。」

けどってなんだよ。

また苦笑い。

「いえ、それくらい有っても不思議じゃないって言うか。超能力は世の中に溢れてるっていうか。」

カエ、パニックでもう何言ってるかわかってないでしょ。

「なるほど。君たちが共に行動しているのは、君たちもそうだったと言う事か。」

まあ、若返ったのは俺だけだけどね。

「えっと、私は政府機関にとらわれてはいないですよ。」

「うん。同じ能力者ってだけで。」

うわっ！

はっきり言っちゃってるし。

「能力者？若返る事ができるのか？いや、君たちも50歳を越えている、のですか？」

「違いますよ。そんな事できません。」

「そうそう、似たような事ができるだけってか、あ・・・」

カエはばつが悪そうに、俺の顔を見上げた。

俺は笑顔返してやった。

まあどうせ喋っても良いと思っていたし、カエが隠し事ができないのは、きっと長所だろうから。

でも今後、他にばれないように、少し教育は必要だろうけど。

「もうほとんどばれたし、みんな！喋ってもいいだろう？」

俺はメグミとカエを見た。

「まあ、光一が良いって言うなら。」

「私は、任せます・・・」

メグミはあきれたように、カエはシヨンポリと下を見ながら了解した。

「俺達は、同じ能力者なんです。」

俺は山瀬さんに顔を向けた。

「若返る能力なのか？いや、話や今までの行動を総合すると、それだけでは無いように思いますが。」

」

「若返る事は、私だけの能力です。まあ、やろうと思ってできるわけではないですけど。」

「高橋さんは、色々わかってるみたいですね。それなのに今日の定期検査では、全く解明されていないような感じだったんですが・・・」

流石に山瀬さんはするどい。

「ええ、俺が自分の能力に気がついたのは、政府機関を出てからですから。もちろんそれについて知っているのは、俺と、彼女たちだけです。」

「えっと、それはもしかして、政府に知れるとまずい事なのですね？」

まあそういう事になる。

俺は頷く。

あの山田の研究チームが、必死に調べてもわからない事を、実は本人がそれ以上の事を知っているのだから。

ばれたら又政府機関に閉じこめられるか、そしてもしかしたらもう二度と機関を出る事もできないか。最悪能力を恐れて殺される事も十分考えられる。

「山瀬さんが誰かに話したら、俺の命もやばいかもしれませんね。」

俺は軽く笑った。

「笑い事じゃないよね。私も最初それが怖かったんだから。」

メグミは少し怒ったように俺を睨む。

「えっと・・・そうなの？虫と話せるだけなの？」

「えっ?!虫？」

ははは、またカエは喋ってるよ。

いいんだけど。

それにしても、山瀬さん驚いてるよ。

その程度の能力だからね。

「ええ、その程度の能力なんです。まあその能力のおこぼれ程度に、若返る原因があると思っていただければ。」

「いやでも、高橋さんだけは若返り能力がある事はどうして？」

「まあ、話せる虫の種類によって、少し付加能力があるっていうか、そういう事ですね。」

「彼女達とは、話せる虫が違う？なら彼女達は？」

山瀬さんは聞きたい事が山ほどあるようで、次々に質問してくる。

一部内緒にはしたけど、結局話せる虫の種類、付加能力の一部、そして能力を得た原因と思われる事を山瀬さんに話した。

「まあそういう事なんで、内緒でお願いしますね。」

「あ、ああ。しかしまさか、そんな事が本当にあるなんて。常識に捕らわれてはいけないと頭で理解しても、やはり常識を逸する事は、受け入れ難いものですね。」

山瀬さんは、普段の余裕のある山瀬さんでは無く、おそらくは素になって、椅子の背もたれに体重をかけた。

「話して良かったの？」

メグミが小さな声で、俺だけに言ってきた。

「大丈夫。この人は信用できる。」

俺も小さな声で言ってかえした。

「そっかあ〜。でも、この程度の能力だと、世界を変えるには、まだまだ足りないなあ〜」

そう言えば、俺の内緒の事を調べる事ができたら、世の中を変える手伝いをするって約束だったっけ。でもまあ、この程度なのですよ。

人一人暗殺するとか、その程度ならできるだろうけど、世の中動かす事なんてできる能力ではない。

もちろん、実際暗殺をして脅したりして少しずつやれば、それなりの成果も望めるだろうけど、俺や山瀬さん、それにこの子達ができる事ではない。

「政治家の悪を暴くとか、盗聴とか、その程度しかできないか。」

「まあ、そういう事です。」

「人探しも、虫に探してもらってたんだね。」

「そうです。」

「害虫退治は・・・」

「近寄らないように話すだけです。」

「なるほど・・・」

山瀬さんは少し嬉しそうだった。

理由はわからないけど、知りたかった事がわかったからなのだろう。

しばらくボーっとした後、山瀬さんは帰っていった。

本当の優しさ

今日の仕事は大変だった。

そもその始まりは、俺が事務所に居ない時に、仕事の依頼の電話がかかってきた事から。

カエが電話に出ただけけれど、仕事が面白そうだからと勝手に了解したのだ。

仕事の内容は、別に難しい物ではない。

金持ちの屋敷の塀の外側のペンキ塗りと、溝掃除だ。

まあ仕事としては、俺が電話に出たとしても引き受けたかもしれない仕事だから良いのだけれど、相手が金持ちってのが気に入らないし、量が多すぎた。

結局まる一日かかったわけで・・・

「疲れた・・・」

特に道具も必要なく、向こうが全て用意していたから、荷物は無い。

だから俺とカエは、電車でただいま帰宅中だ。

「ちょ、ちょっと大変だったね。でも楽しかったし。」

カエは満足そうだ。

一応カエもお嬢様系に入るから、こういった事をあまりした事がないのだろう。

だから楽しかったと。

金持ちは金持ちなりの苦労があるって言うけど、こんな事を楽しめる金持ちは、やはり恵まれていると思った。

「それにしても遅くなったな。」

やはり車でくれば良かったか。

石油価格が上昇した事や、温暖化問題も考えて、俺はできるだけ自動車は使いたくないと思っている。

まあ思っているだけなのだけれど、今日は気が向いて電車使ってしまったんだよな。

電車内は、既に終電も近い事から、酔っぱらいが溢れ、少し酒臭くなっていた。

それでもカエは気にする事なく、あれだけ働いた後にも関わらず笑顔だ。

するとすぐ近くのドア付近にいた酔っぱらいが、うずくまって嗚咽し始めた。

おいおい、こんなところで吐くのかよ。

飲み過ぎだよ。

一斉に近くにいた人達が、迷惑そうにその場から離れる。

しゃがみ込んで苦しそうにしている人を残し、半径2 m以内は誰もいなくなった。

ゲロの臭いが苦しい。

周りの乗客も、ぶつぶつと文句を言っているのが聞こえた。

そんな中、一人の女の子が、その苦しそうに吐きまくる男に近づいていった。

カエだった。

カエは心配そうに、その男の横にしゃがみ込んで、背中をさすり始めた。

「大丈夫ですか？」

右手で背中をさすり、左手で綺麗なハンカチを差し出していた。

それでも苦しそうに、胃液を吐いていた男のそれが、カエの手につく。

カエはそんな事全くしにしていなかったかのように、ずっと男に声をかけていた。

「これ、私が飲んでたものですけど、飲みますか？」

カエはペットボトルに飲みかけの、スポーツドリンクを手渡す。

「す、すみません。ありがとう。」

男は苦しいながらも、少し笑顔を見せた。

俺はいつのまにか、涙がでていた。

そうなんだよな。

普通、華恵みたいな反応するのが普通なんだよ。

苦しんでる人が目の前にいたら、それを助ける。

当たり前の事だ。

人として・・・

でも見てみたら、これだけ電車には人がいるのに、男を気遣ったのは華恵だけ。

世の中腐ってると言っていた俺ですら、この酔っぱらいを非難するだけで、気遣う事はなかったんだ。

そんな華恵を、俺はただ見ていた。

俺と同じように、何か感じる人も周りにはいたように思う。

それでも、華恵すら批判する人もいたように思う。

これが現実。

そう言えば、昔こんな事があったな。

ある集まりの時に、猫の話をしていて、みんな猫が大好きで、カワイイカワイイと言って。

その帰り道に、猫が車にひかれて死んでたっけ。

結局猫が大好きだと言っていた人の誰一人も、その猫を病院に連れて行こうとか、死んでいたから埋めてあげようとか、言うけど行動する人はいなかった。

きっとカエだったら、迷わずその猫を抱き上げていたのかもしれない。

また涙がでていた。

「何泣いてたの？」

電車を降りて、駅でカエが少しゲロを洗い流してから、今マンションまでを一緒に歩いていた。

「いやあ。カエって優しいなって思って。感動しちゃって。」

「ええっ！えっ、でも、あの人苦しそうだったし。」

カエにとっては、アレが普通で、苦しむ人を黙って見てられなかつただけなんだ。

「それでも、それをできる人って、なかなかいないんだよ。俺が若かったら惚れてるね。」

嘘だ。

若くなくても惚れる。

いや、間違いなく昨日よりも好きになったけれど、でも惚れるってのは少し違うかな。

えっ、えっと・・・光一って本当は54歳だっけ？」

「そうだよ。でも、あまりその話は外ではダメだよ。」

俺は声をひそめ、顔をカエに近づけた。

「うっ、うん。」

カエが少し照れていた。

それを見て、俺も少し照れてしまった。

やばい、カワイイ。

マジで惚れたりして。

初めて見た時は、この子がこんな子だなんて思わなかったなあ。

嫌な金持ちの娘程度だったのに。

それにカエのお父さん、あなたの育て方は、少し間違っていましたけど、そんなの関係ないくらい素晴らしいですよ。

なんとなくカエのお父さんを、心の中で賞賛した。

マンションについてドアを開けたら、メグミが待っていてくれた。

テーブルには食事が用意されてあった。

「遅いよお～。心配しちゃったじゃない。」

テーブルの食事は3人分。

此処にも心優しい子がいた事を思いだした。

俺はまた涙が出そうだったが我慢した。

世の中、まだこんなに良い子がいるんだから、まだまだ大丈夫じゃないかと思った。
同時に、悪い世界を引き継いでもらうわけにはいかないと思った。

脅迫状

今日は、山瀬さんに呼び出されていた。

いよいよ何か行動を起こすのだろうか。

俺は世を良くするために、協力すると約束した。

しかしあれ以来、特に何かを頼まれる事はなかった。

まあ、能力がこの程度だったから、協力も必要ないのだろうと勝手に思っていたわけだけど。

それに山瀬さんは、今までも個人的に色々やっていたらしい。

政治家の汚職事件、横領なんかの裏をとるために、色々動いていたらしいが、上司からは警察の仕事ではないと怒られていたらしい。

とにかく会って話せば、用件はわかる。

それに今日は日曜日で、待ち合わせはとある都内の駅の一つ。

一体何処にゆくのだろうか。

いつもの場所ではないから、大切な話か、もしくは少し変わった用件なのだろうか。

駅につくと改札を出た所で山瀬さんを探す。

するとすぐに、向こうから歩いてくる山瀬さんが見えた。

俺は軽く右手を挙げて、そちらへ歩き出す。

山瀬さんも軽く右手を挙げて、こちらに小走りしてきた。

「待ちましたか？」

「いえ、今来たところです。」

なんとなくデートの待ち合わせの時に使われそうな文句だが、別に狙っていたわけではない。ただ少し鳥肌が立った。

「ども。」

「わざわざこんな所まで申し訳ない。」

「今日はどうしてこんな場所なんですか？」

「まあ、とにかくついてきてくれませんか。」

結局山瀬さんは、俺が年上だと知ったことで、常に敬語で話すようになっていた。

今更もうどちらでも良かったけれど、やはりコロコロ変えられるのは気になるな。

とりあえず無言で、俺は山瀬さんの後をついて歩いた。

特に話す事はない。

いや、下手な事をこんな人通りの多い場所では話せないから話さないだけか。

この人の事を信用はしているが、別に友達ではないということ。

しばらくは山瀬さんのやや後ろを、とにかくついて歩く。

人通りの多かった商店街は抜けて、いかにもな住宅街に入っていた。

なんとなく、一昔前の時代の景色っぽかった。

建物は高くても3階建てで、ほとんどが2階建ての木造。

それも築数十年は経っているだろう。

そんな事を思っていると、山瀬さんが立ち止まる。

3階建ての、この辺りでは少しいている感じの、まだ新しい建物の前。

「つきましたよ。上がってください。」

見ると表札には、[yamase]と書いてあった。

まあ予想はしていたが、今日は自宅に呼ばれたらしい。

これは私の信用度が上がったからなのか。

考える必要はないか。

「はい。では、おじゃまします。」

山瀬さんが開けたドアから、私は玄関に足を踏み入れた。

すると、すぐ目の前に、おそらくは山瀬さんの娘さんなのだろう、メグミやカエよりも小さい女の子が二人立っていた。

「こんにちは。」

「こんにちはわあ。」

少し人見知りしているようだけど、流石に山瀬さんの娘さんで、礼儀正しい。

「こんにちは。少しおじゃましますね。」

「はい。」

それにしても、何となく暗いと言うか、山瀬さんの娘さんのイメージとしては、少し元気が無いような感じがした。

「ああ、私の部屋をお願いします。右側の奥です。」

後ろからそう声をかけられたので、「はい。」と返事をして、靴を脱いでから右側へと入っていった。

すぐにそれらしい部屋のドアが見える。

というか、ドアはそこしかない。

しかし、少し入りにくい場所だ。

もしかすると、山瀬さんの部屋は元々物置だった場所だったのかもしれない。

娘が年頃になって、追い出されたと考えると納得できる、そんな部屋のドアだった。

「此処ですか？」

「ええ、元々物置だった場所なんですけど、まあ中はしっかりしてますので、どうぞ入ってください。」

やはり私の考えは正解だったようだ。

少し笑みがこぼれた。

ドアを開けて中を見ると、まあ普通の部屋だった。

窓も有るし、入りにくい事以外は快適そうな部屋だ。

エアコンもついていて、既に部屋は暖められてあった。

「適当なところに座ってください。」

山瀬さんはそう言って、部屋に入ると、後ろ手にドアを閉めて、鍵をかけた。

なるほど。

誰にも聞かせられない話で、それは娘さんにもって事か。

これはいよいよ、何か動きを起こそうと言う事なのだろう。

俺はコートを脱いでから、適当な場所に、ベットの背もたれにして座った。

山瀬さんもコートを脱ぐと、仕事用のデスクなのだろうか、その前にある椅子に腰掛けた。

「いよいよ、何かするんですか？それも大事な話に思えますが。」

椅子に座ってから、少し黙ったままでいる山瀬さんに、自分から話をきりだした。

まあ何時までもこの雰囲気の中でのいるのも、なんとなくしんどいし。

「えっと・・・大事な話ではあるのだけど、あの話とは関係ない事なんです・・・」

どうも歯切れが悪い。

いつも冷静な山瀬さんが、冷静さを欠いている？

それにどことなく悩んでいると言うか、暗いと言うか、そうそう、さっきの娘さんと同じような感じ。

「なんだか暗いですね。さっきの娘さんと同じような感じですね。」

俺は冗談っぽく、少し笑顔で場を和ませようとした。

「やはりわかりますか・・・」

おいおい、もしかして同じ理由で、家族みんな暗くなっているとでも？

そしてそれが、俺が呼ばれた理由？

俺はこれ以上は話がきりだしにくくなった。

沈黙がしばらく続く。

おそらくは10秒程度だったのだろうけど、苦痛が1分にも2分にも感じさせた。

「これを見てください。」

ようやく山瀬さんはそう言いながら、紙切れを俺に渡してきた。

二つ折りにされた、手紙にも見える。

俺は受け取ると、開いて中を見た。

見た瞬間、これが何かしらの脅迫状であるとわかった。

文字が全て、新聞や雑誌の切り抜きだったから。

最後の部分に、「幻術」の文字、あの二人を捉えた事による報復か。

ため息がでた。

山瀬さんに脅迫状を見せられ、内容にショックを受けた。

差し出し人は、マフィア幻術の幹部、そしてこの前捉えた二人の解放を求める内容。

更には脅迫。

脅迫は、陳とロバートを解放をしない場合、娘二人を殺すと言うものだった。

こうやって、罪の無い人が狙われる現実。

何故あんな女の子が、大人の世界、犯罪に巻き込まれなければならないのだろうか。

全く腐っている。

マフィア幻術は、なんだったかある宗教を信仰する組織でもあると聞いた事がある。

神の教えを請う者達が、何故こうも簡単に人を殺すと言えるのだろうか？

まあ逆に、神を信じて疑わない人こそが、神を盾にもっとも残酷になれるとも言われているが。

山瀬さんは、脅迫状が来ただけマシだと言っていた。

最悪、報復だけをしてくる場合もあったのだからと。

とにかく、まだ娘さん二人は生きている。

だから対応する事ができるわけだ。

この事は娘さんには話してはいないらしいが、一度危険な目に遭って、なんとなくわかっているかもしれないという事だった。

いつでも殺せるという威嚇だったのだろう。

この脅迫は、一応港川警察の上司には報告しているが、解放はまずあり得ない。

犯した犯罪は聞いていないが、おそらくはかなりのもので、情報もかなり持っている事は間違いないとの事だ。

そこで俺が呼ばれた。

最悪家にいる時は安全だろう。

一応警察も、山瀬さんの家の辺りの警戒を強めているらしい。

山瀬さんの家に行った時には、気がつかなかったけど。

で、問題は登下校中と学校内だ。

登下校中は警戒するにも、それとなく警戒するには限界があるし、学校内には警察は入る事はできないから、此処で何か有ればどうにもならない。

だから俺に相談してきたわけだ。

まあ運良くなのかどうかはわからないが、登下校時は、暇な俺が送り迎えする事ができる。

本当は山瀬さん自身でやりたかったらしいが、流石に刑事として他の事件の調査もあるから難しいらしい。

ただ俺が送り迎えするには、理由を話す必要があった。

それで娘に不安を与えたくないから、山瀬さんは話したくないようだったけど、本人もなんとなく気がついてるし、話さないと友達と遊びに行くなどという事を止められない。

だから結局娘さん二人には話した。

問題は学校内。

警察でも入れない場所であるから、逆に言えば安全ではあるのだけれど、殺し屋なんかはもし存在するならば、学校内は一番の狙い目になるかもしれない。

どうしたものか、俺は帰った後メグミとカエに相談したわけだけど、その中学はカエの父の知り合いが理事を務める学校だったらしく。

まあ山瀬さんに話す許可を得て、色々手を回した訳で。

「俺はどうしてこんな所で、掃除しているのだろう。」

中学の生徒達が教室で勉強している中、俺は廊下や階段の掃除をしていた。

用務員のおじさん、いやお兄さんとして、中学に潜入しているわけで。

昨日から潜入しているから、だいたい下調べはできていた。

娘二人の教室を狙える位置はなさそうだから、授業中はとりあえず安全そうだ。

問題は昼休みや体育の授業中、更には登下校の移動時。

一応娘二人には、休み時間はトイレと食事以外では出ないように、昨日言っておいた。

これでかなり安全と言えるだろう。

「それにしても、ボディガードなんて無理だって言ってたんだけどなあ。」

まあ身をていして守る事ができれば、俺はそう簡単に死なないから大丈夫だけど。

でも刺されたら痛いだろうし、あまりおおっぴらに死なないのもまずいよね。

能力がばれる危険があるから。

しかし目の前で女の子二人が狙われているのに、黙って見ている事なんて、できるわけもなかった。

さて、そろそろ授業が終わる時間だ。

俺は校内の生命反応を調べた。

この能力は、もちろん人間の存在も調べられる。

「狭い学校で良かったな。」

この能力は、範囲を広げれば広げるほど疲れるし、限界もある。

その限界ギリギリの広さの学校だった。

「ふう〜」

どうやら朝一番に調べた時と変わりはないようだ。

遅刻してきた生徒が2人ほどいたが、どちらも生命反応から子供だと判断できた。

チャイムが鳴った。

娘さん達の休み時間中の移動は、指定した場所以外に行く場合には、それぞれから携帯電話で連絡が入るようにしている。

特に連絡は無く、どうやら二人とも大人しく教室にいるようだ。

一応Gを教室の天上や、校舎のあちこちに配置してある。

まあ配置しなくても、元々結構いたりしたけど。

もちろん一応女子トイレと更衣室にも配置しているけれど、覗いたりしてないよ？

誰もいない時に、中の様子は調べたけど、それだけだよ？

休み時間中は、人目のつかない場所で、俺はGと視界のリンクをして二人を見守る。

二つの景色プラス実際の景色が見えるこの状況は、なんとも不思議な感覚だ。

人間の感覚は色々あるけれど、それは感じ方の一部で、些細なものである事だと改めて思う。

人間には五感しか無いけれど、本当はもっと沢山感じる方法は有るのだろうな。

この見えないものが見える感覚は、見えていると表現するには微妙な感覚だし。

チャイムがなった。

どうやら授業開始らしい。

俺は再び、掃除を再開した。

警戒を繰り返す中、今日の学校は何事もなく終わった。

「ちょっと辛いなあ〜。送り迎えがあるから、金持ちだとか言われるし。」

「私は遊びに行けないのが辛いなあ～。お姉ちゃんは受験生だから、どっちみち遊びに行けないから良いけど。」

俺の運転する自動車の後部座席から、山瀬さんの娘さんのそんな会話が聞こえてくる。

「まあ辛いだろうけど、状況が状況だから、我慢してください。」

俺はバックミラーから、二人をチラッと見た。

少し疲れた表情。

なんだかんだ文句は言っているけれど、本当はおそらく怖いのだろう。

それを文句を言うことで忘れようとしているのかもしれない。

「あーあ。お父さんが刑事なんかするからいけないんだよ。」

「お父さんは偉いよ。お姉ちゃんはすぐお父さんの悪口言うけど、私は誇りに思ってるんだから。」

「だったら我慢すればいいでしょ。」

「ふう～。お父さんは、君たちの為に今全力をつくしているから、少しの辛抱ですよ。」

お姉ちゃんの方の麻美ちゃんは丁度反抗期なのかな。

まあ受験時って、それでなくてもピリピリする時期だもんな。

麻里ちゃんはまだ中学生になったばかりだし、お父さんの事が好きみたいだな。

でも結局二人とも、いずれはお父さんの事を大好きで、感謝する時がくるのだろう。

なんせ山瀬さんは、この二人の娘の為に、頑張ってるんだから。

「少して、どれくらいですかあ？」

そんな事俺が知るわけがない。

「脅迫してきた人が捕まる迄ですね。」

麻美ちゃんも、どれくらいかかるかなんてわからない事は知っている。

「あーあ。早く捕まえてくれないかなあ～」

それは、きっとみんな願っている事だ。

そして一番願っているのは、きっと山瀬さんなのだろう。

俺は車を止めた。

「つきましたよ。」

山瀬さんの自宅の前だ。

二人の通う中学校は、対して遠くはない。

歩いて通える程度の距離だからね。

俺は、防弾ガラス仕様で、パンクしないタイヤに付け替えた自家用車から降りると、一応辺りを探る。

特に何もなさそうだ。

後部座席のドアを外から開けると、二人が降りてきた。

二人が家に入るまでは、一応警戒を続ける。

「今日もご苦労様です。」

「ありがとうございます。」

一応二人は、俺にお礼を言ってから、家に入っていった。

俺は笑顔だけを返した。

礼儀正しい良い子なのに。

こんな子を狙うなんて、なんだか腹が立った。

それにしても、警護素人の俺が、こんな事してて大丈夫なのだろうか？

というか、守れるのか？

不安と共にため息を吐いた。

ボディガード

警護を始めてから、既に1週間が過ぎていた。

そして昨日山瀬さんから聞いた話によると、警察が大がかりに動いている事が、脅迫してきたマフィア幹部に悟られたようで、警戒を強めてくれとの事だ。

そんな事を言われても、俺は素人だし、今までも出来る精一杯をやっていたわけで。

そんな話を昨日メグミとカエに話したら、「私も協力するよ！」なんて言い出した。

確かに犯人を捕らえたり、犯人にダメージを与える事を考えれば、二人は頼もしい。

カエの毒針攻撃にかかれば、狙ってきた犯人を殺す事だって可能だし、メグミの糸とスパイダーネットで簡単に捉える事もできるだろう。

更にメグミの蜘蛛なら、校内の監視も手分けできるからありがたい。

しかし、学校も休まなければならないし、それ以上に、危険があるこの仕事を手伝って貰ってもいいのだろうか？

まあ酷く即死させられるような事がなければ、俺の生命力パワーでなんとかなりそうな気もするが。

自分の傷でしか試した事はないけど、生命力パワーで、体の傷等が治せる事はわかっている。

葛藤の末、結局学校付近に止めた車の中で、二人には待機してもらう事になった。

メグミの蜘蛛は、既に校内の色々なところで、監視活動をしている。

これだけ監視の目があれば、そう簡単には狙えまい。

それに、こんな方法で監視できるなんて、相手は知らないから、来れば必ず監視に引っかかるだろう。

二人のおかげで、かなり今日は精神的にも楽だ。

今ならもし狙ってきても、なんとかなりそうな気がした。

昼休みが過ぎ、午後は麻美ちゃんが体育の授業だ。

一番危険にさらされる授業でもある。

まあ本当にこの日本で、ライフルで射殺とかができるのかって疑問もあるけれど、拳銃は実際多く入ってきているとニュースではよく見るし。

一応グラウンドを狙える位置には、Gを配置してある。

冷静に考えると、いつも此処までする必要が有るのかと思うと同時に、これでも足りないのではと不安が襲ってくる。

日本で住んでいる平和ボケと、映画やなんかで見る情報がぶつかっているようだ。

私はグラウンド周りを掃除するフリをして、辺りの建物に目を光らせる。

どうもGを通した視界では心許ない。

それは思い過ごしなのだけれど、視界と言えない此の感覚は、味わった事のある人にしかわからないだろう。

すると、一番警戒していた近くのビルの屋上に、なにやら光ものが見えた。

外か！

俺は慌てて、体育の授業中の麻美ちゃんの方に走る。

それと同時に、Gを屋上へと向かわせる。

流石に冬なので、外は続けて監視を続ける事が困難だから、時々移動させて監視しているのだ。

違う事を祈るが、もしそうならやばいかも。

体育の授業で50m走をしていた麻美ちゃんの近くまで来た時、Gの視界が光るものを捉えた。

「違ったか・・・」

光っていたのは、どうやらスコップで、ビルの屋上の植物の世話に来たおじさんが持っているものだった。

「あのお～用務員のお兄さん、今授業中なんですけど？」

「あっ！すみません。」

俺はすっかり、授業中だと言う事を忘れて、女子中学生の集まる中にいた。

(バカ・・・)

なんとなく、麻美ちゃんの視線が冷たかったが、女子中学生はワイワイガヤガヤ俺を更に取り囲んでいた。

「うわぁ～格好いい用務員のお兄さんだぁ～」

「今校内で噂になってる人って、この人なんだぁ～」

「ホントだ。なんでこんな人が用務員なの？」

「噂だと、好きな先生がいるとかで、近づく為に用務員してるらしいよ。」

「ええ！じゃあ今近づいて来たのは、もしかして体育の先生の・・・」

「本田先生？」

「きゃー！！」

「えっ！ちっ、違うわよ！えっ！でも・・・」

「うわ～先生顔赤いよ～」

「きゃー！！」

俺、頭痛くなってきた。

女子中学生恐るべし。

そう思っていたら、俺の携帯がなった。

そしてすぐに切れる。

これは、あらかじめ決めていた、連絡方法。

すぐに切った場合、不審人物発見、電話している場合じゃないから警戒してほしいという時のもの。

俺は振り返って、校門方向を見ると一人の不審人物が、歩いてくる。

一目で不審人物と言うには理由がある。

手には拳銃、顔はサングラスとマスクで隠された、いかにも不審人物だ。

その姿に笑いたかったが、そんな余裕は、状況からも精神的にもなかった。

「みんな逃げて！！」

俺はその不審人物を見たまま、後ろにいるであろう中学生達に支持した。

悲鳴と共に、皆が校舎の方に逃げる様子が感じられる。

それにあわせて、不審人物がそちらに走りだした。

俺はそれの前に立ちはだかるべく走った。

不審者の動きを見れば、生徒達がどう逃げているかわかる。

そしておそらくそのターゲットは、麻美ちゃんだ。

不審者は拳銃を構えた。

当たったら痛いだろうなと思いながら、それでも立ちはだかり距離を詰める。

後ろから悲鳴のような声が聞こえるが、何を言っているか聞き取れない。

なんとなく全てがスローに流れる感じで、徐々に音すら消えそうな感じだ。

人間集中力が高まると、その対称だけしか見えなくなる事は、俳優をしていたから知っている。

観客は見えなくなり、その声も最後には消えるのだ。

今この世界には、俺と不審者しかいない。

拳銃は俺の後ろに向けられているようだ。

もしそこに麻美ちゃんがいたら危ない。

俺は自分の体を盾にする。

何故だかわからないが、集中力が此処まで高まっている時は、何でもできる気がする。

一応俳優時代は、体を鍛える為のトレーニングは欠かした事はない。

アスリートとは言わないが、それに負けないくらいの運動神経は持っているはずだ。

まあ体は二十歳そこそこのものだけど、経験し記憶した事は全て残っているのだ。

演技の為に、いくつかの格闘技も習っていたから、体は勝手に動く。

音の中で、一際大きな音、銃声だけが耳に入ってきた。
それと同時に、お腹の辺りに酷い痛みが襲う。
防弾チョッキを付けているから、此処なら大したダメージは無い。
そうは言っても拳銃で撃たれているから、流石に痛いし、衝撃は半端じゃない。
立ってはいられず、少し吹っ飛ばされる形で、俺は後ろに倒れた。
校舎の方から少しだけ悲鳴が聞こえた。
俺はすぐに立ち上がり、もう一度不審者の前へと走った。
再び拳銃を構える不審者。
今度は明らかに俺に向いている。
先に俺をやってしまおうと言う事か。
頭を撃たれたら、やばいかな？
そんな事を考えながらも、不審者に直進して走る。
なんとなく発射のタイミングがわかった。
今度はかわしても、後ろには誰もいない。
銃声の直後、顔のすぐ左を弾が通過した気がした。
直後、目の前の不審者が苦しみだした。
右を見ると、カエとメグミがいた。
どうやらカエが針で攻撃したようだ。
苦しみ方からすると、かなり強い毒を使ったのだろう。
本当はカエに、人を攻撃するなんてして欲しくはなかったが、状況が状況だから仕方がない。
俺は不審者との距離を一気に詰めて、懐に潜り込んで拳銃を持つ手を取った。
そして一本背追いで、不審者を地面にたたきつけた。
すぐに手を取って身動きが取れない状態に押さえた。
それを見て、メグミが用意していた、玩具の手錠を不審者にかけた。
玩具と言っても、本物と変わらないくらいしっかりしたやつだ。
これで、大丈夫だろう。
いつの間にか不審者の手から放れていた拳銃は、カエが拾っていた。
音も景色も、戻っていた。
「大丈夫！？」
「撃たれたよね！？」
心配そうに俺を見る二人の顔が、すぐ近くにあった。
それが少し照れた。
「あ、ああ。大丈夫だ。二人ともありがとう。」
ふと自分の下にいる不審者を見ると、後ろ手に手錠をかけられ、苦しそうにしてた。
遠くからパトカーと救急車のサイレンが聞こえた。

不覚

山瀬さんの話によると、捕まえた不審者は、マフィア幻術のメンバーだろうと言う事だった。

しかし一向に口を割らないから、確証はないとの事だ。

それでも脅迫があって、実際に狙われたわけだから、俺達は間違いないと思っている。

不審者本人は、中学生の誰でもいいから殺そうと思ったと、言ってはいるらしいが。

俺が撃たれた時に、俺の後ろにいた生徒が、麻美ちゃんなら確実なんだけど、あの状況でそれをしっかり覚えている者はいなかった。

とりあえず、不審者は捕まり、一つの危機は無事回避できた。

それでもまだ、脅迫してきた幹部は捕まっていないわけで。

「結局、俺はまだまだ用務員のお兄さんなのさ。はあ〜」

そうは言っても、人の命がかかっているから、しっかりしなくては。

メグミとカエは、一応学生だから、毎日学校をさぼるわけにはいかないのよ、今日は俺一人だ。

交代でやろうと言う話もあったが、カエの蜂は冬場は使えないのよ、結局俺一人だ。

「用務員のお兄さん、拳銃で撃たれたのに大丈夫なの？」

拳銃騒ぎがあった次の日は、学校は臨時休校されたが、また今日から復活している。

そして俺は、女子中学生にやたらと話しかけられるようになった。

男子はあまりいい顔していないけど。

「ああ、大丈夫。お腹に少年ジャンプを入れていたんだ。捨ててあったのを後で読もうと思ってね。」

まあ嘘だけど、防弾チョッキを着て、守るために来ているとばれたら、みんな不安に思うだろうから。

「ねえねえ、彼女はいるんですかあ？」

女子中学生の好きそうな話題だ。

でも俺がガキの頃の中学生は、あまりこんな話はできなかったから、違和感があるな。

「彼女はいないけど、好きな女の子はいっぱいいるよ。」

「えー！それは好きな人じゃないよお。英語でライクってやつ？」

「とにかくフリーなんですわねえ！」

「まあね。」

とは言っても、俺は本当は50歳越えてるし、あまりピンとこないんだよなあ。

それに、英語でライクと言われても、好きをどうやって区別しているのかわからないよ。

俺は好きを、そんなふうには区別なんてしたことがないから。

好きな人なら、きっと条件が合えば結婚だってできるし、一番好きでも信頼できなければ無理だし、ラブとライクで区別なんて。

チャイムが鳴った。

「あー！授業始まる！」

「それじゃお兄さん、またあ〜！」

「はいはい〜」

こちらを見ながら走っていく女の子は、校舎に入るまで手を振っていた。

危ないだろ。

苦笑いした。

昼休みが終わり、午後最後の授業になっていた。

後は授業が終わってから、帰りに送るだけだ。

用務員の格好のままで送り迎えすると、麻美ちゃん達の知り合いだとばれるから、そろそろ変装してくるか。

そう思って、自動車まで向かおうかと思った時、校舎の方からかすかに悲鳴が聞こえた。

しまった。

どこかに隙があったか？！

俺は校舎へ向かって走りながら、Gと視界をリンクする。

「ちっ！」

麻里ちゃんの教室で、刃物を持った男子生徒が、今にも麻里ちゃんに襲いかかろうとしている映像が見えた。

生徒が殺しをするなんて、完全にやられた。

俺は視界のリンクを保ったまま、校舎に飛び込んだが、その時すでに麻里ちゃんが刺されている映像が伝わってきていた。

早く、早く行かないと。

幸い麻里ちゃんの教室は、さほど遠く無かった。

階段は上がるが、一番階段に近い教室だった。

教室の外には生徒が溢れていたが、かまわず中に飛び込む。

教室内は、刺した生徒が、震えた手で包丁を持って座っている。

その横には、お腹あたりを刺された麻里ちゃんが倒れていた。

俺は躊躇せずに生徒に近寄り、一気に取り押さえた。

「先生！取り押さえておいてください。」

「は、はい！」

俺の勢いに押され、先生は素直に言う事を聞いてくれた。

俺はすぐに麻里ちゃんを抱き上げ、廊下に出て走り出す。

「私が病院に連れて行きます！安心してください！」

そう言って、俺は走って校舎を出た。

その間、生命力を使って、傷を治すようにつとめた。

なんとなくうまくいっている感じがする。

苦しそうにしていた麻里ちゃんの顔が、少し穏やかになってきた。

いつの間にか車まできていた。

後部座席に寝かせて、お腹の部分を確認してみた。

イメージどおり、既に傷口はふさがってはいたが、まだまだ治っているとは言えない状況だ。

しかし危機は去っただろう。

ホッと胸をなで下ろした。

疲れてはいたが、俺は更に生命力を使った治癒を続けた。

5分ほどしたところで、なんとか傷口は完全にふさがった。

でも、傷跡は残るかもな。

自分の体ではないから難しい。

俺は後部座席から出て、運転席へとついた。

一応電話を入れる。

ポケットから携帯電話をとりだし、着信履歴から山瀬さんの名前を探す。

2つ目に見つけ、通話ボタンを押した。

話中だった。

おそらくは誰かから連絡がいつているのだろう。

俺は電話をやめて、車のエンジンをかけた。

一応なるべく衝撃のないように、丁寧な運転を心がける。

車を出してから5分くらいで、山瀬家についた。

車の中から生命反応を確認。

不審人物がいないことを確認してから、俺は車から降りて、後部座席に回った。

そして丁寧に麻里ちゃんを担ぎ上げて、山瀬家へと・・・

しまった。

鍵が無い！

そう思ったが、運良く麻里ちゃんのポケットから、鍵が落ちた。

それを拾って、すぐに家に入る。

部屋の配置がわからないから、俺は山瀬さんの部屋のベットに寝かせた。

一度車に戻り、救急箱を持って再び麻里ちゃんの傷口を見た。

まあ此処まで心さがっていれば大丈夫だろうが、一応消毒してガーゼで傷口を塞いだ。

「これで、大丈夫だろう。」

安心したら一気に疲れがでてきて、その場に座り込んだ。

生命力を使い過ぎた。

もう一步も動ける気がしなかった。

「麻美ちゃんも、送らないと・・・」

そう思ったが、俺は気を失っていた。

搜索

結局目が覚めたのは、夜も遅い時間だった。

目が覚めた時、目の前に麻美ちゃんがいたから、無事に帰ってきていた事に安心して、再び眠りについた。

そして次に起きたのが、次の日の朝だった。

起きた時、すぐに学校に行く準備をしようとしたが、どうやら学校は又、特別休校となったようだ。話を聞いたところによると、麻里ちゃんの傷は浅く、手当もしっかりしていて傷もふさがっているらしい。

まあ、俺の能力で治したから心配は無かったが、山瀬さんは俺の能力を全部は知らないからさうとう心配だったらしい。

俺自身、この能力を他人に試すのは初めてだったしね。

Gパワーで治癒するってのも、なんだか気持ちは微妙だけど。

それで、刺したのはクラスメイトの男子で、誰かに麻里ちゃんを刺すよう頼まれたらしい。

おそらく、宗教関係の者だろう。

報酬は1億円。

もちろん出すはずはないとは思うけど。

此処で殺しても、未成年だからすぐに少年院を出られる。

そしたらその後は1億円で遊んで暮らせると言われ、引き受けてしまったとも言っていたようだ。

その程度で引き受けるなんて間違っているとも思うが、今の若い人達は、我々世代以上に、将来に不安を感じていると聞く。

何年かの辛い日々で、将来の安心が買えるなら、引き受けてしまう者もいるのだろう。

この男子生徒もまた、世知辛い世の中の被害者だったのかもしれない。

「このままでは、高橋さんにも迷惑がかかりますね。」

俺達は、学校が休みになったこの日、山瀬さん宅で話し合いをしていた。

麻里ちゃんは大事をとって、自分のベットで横になっている。

昨日俺が寝ている間に病院に行っていた麻里ちゃん。

病院の先生は、麻里ちゃんの傷を見て、治りの早さにかかなり驚いたようだけど、特に怪しまれる程の事は無かったらしく、俺はそちらの方が安心した。

でも、山瀬さんの此の一言で、俺は別の不安が大きくなった。

「高橋さんが2回もうちの娘を助けた事によって、今後マフィアは、高橋さんや、会社の愛さんと華恵さんを狙う恐れもでてきました。」

そらそうか。

俺自身も、既にマフィアからは邪魔者だし、一度目の時はメグミもカエも手を貸してくれている。

俺はなんだかとんでもなく悪い事をしてしまった気がした。

「悪い事したかなあ・・・」

「それはないです。高橋さんのおかげで麻美も麻里も命を救われましたから。」

山瀬さんがそう言って見た麻美ちゃんに、俺も目を向けた。

少し元気が無く、俯いて俺達の話聞いていた。

先日の麻美ちゃんと麻里ちゃんの会話を思い出す。

麻美ちゃんは、父親の仕事には反対のようだ。

だから今回麻里ちゃんが刺されたことで、ますます父親への反感が強くなっているのかもしれない。

だけど、今の麻美ちゃんからは、あまりそんな感じが伝わってこない。

何故だろうか？

疑問に思ったが、今は今後どうするかの方が大切だ。

俺は山瀬さんに向き直る。

「こうなったら、学校が休みの間に、俺もマフィア幹部を捜す手伝いをします。」

問題は、根本から解決するのが一番だ。

これさえ達成できれば、俺が狙われる事も、山瀬さんの娘さんが狙われる事も、ましてやメグミやカエが狙われる事もないだろう。

「確かに、早く捕らえる事が一番の解決作ですね。」

「華恵は今ちょっと協力できないかもしれませんが、俺と愛で探せば、見つけれられる可能性はあります。」

「しかし、写真は無いですよ。」

それはきつい。

虫に任せられない以上、自分の足を使って探すしかない。

そうなると思つけれられる可能性は爆発的に下がる。

「何か情報は無いんですか？」

そうだ。

せめて何か場所を特定する情報があれば、探す範囲を限定できれば可能性はある。

「一応、吉沢から聞いた情報はあります。」

ああ、あの吉沢さんか。

最近会ってなかったな。

「どんな情報ですか？」

「マフィアの拠点は、渋谷に有ると言う事です。」

なんと、そこまでわかっていれば、探せるじゃないか。

「でも建物からでない以上、写真が無くては例の方法で探すのも困難ですよ。」

例の方法ってのは、虫に探してもらって事だ。

しかし、俺達は虫と視界をリンクできる。

実はそれは山瀬さんにはまだ話していない。

信用はしているが、もしこの能力が第三者にばれた時に、なるべく話していない方が、山瀬さんの迷惑にもならないだろうから。

必要な時は、こちらから話せば良いし。

「とにかく、渋谷ですね。俺は使えるものは使って、何とか探してみますから、見つける事ができれば後はお願いしますね。」

「あ、ああ。よろしく頼みます。」

なんとなく山瀬さんに余裕がない。

こんなに追い込まれている山瀬さんを見ることになるなんて。

今回もきっと、俺が探すって言ったら、きっと方法を追求したに違いないのに。

「よ、よろしくお願いします。お父さんを助けてあげてください。」

なんだか、今までの麻美ちゃんではなかった。

やはり何かがあって、お父さんの事を見直した感じがする。

今回麻里ちゃんが被害にあったのは辛い事だったけれど、何かしらで山瀬さんの心が伝わった事を考えると、悪い事ばかりでは無かったという事が。

「ああ、麻美ちゃんも、君の大好きなお父さんも、きっと助けるよ。」

麻美ちゃんは否定しようとして口を開けたが、赤くなって俯いた。

カワイイ。

それにしても、俺も偉そうな事言っているな。

探すのは人としての俺の能力じゃないし、見つけれられる確証もないのにな。

でも、安心させてあげたかったから仕方ないか。

自分で自分を笑い、そしてそれでも納得させた。

「では、俺は早速行動に移すので、山瀬さんは今日くらい麻美ちゃんの側にいてあげてください。」
俺がそう言って笑顔を送ると、山瀬さんは少し照れていた。

「あ、ありがとうございます。」

家族って良いな。

俺も、もしかしたらこんな家庭を作って、生きる人生が有ったのかもしれない。

あの時、俳優を辞めていたら。

あの時、もう少しやれる俳優になっていたら。

でもそれは、全てもしもの世界だ。

現実にはあり得なかったのだ。

もしかしたら、高橋としてなら、今後可能なのかもしれないが・・・

おっと、こんな事を考えている場合ではなかった。

俺は山瀬家を出ると、自動車で渋谷へと向かった。

渋谷と言っても正直範囲が広い。

渋谷について車を止めてから、俺は吉沢さんに電話をかけた。

詳しく聞くためだ。

山瀬さんには許可を得ている。

吉沢さんは俺の事を信頼してくれているから、吉沢情報を俺に話すのは許可しているらしい。

「もしもし、吉沢さんですか？」

「おお、お前かぁ。久しぶりやんけ。そっちから電話してくるとはめずらしいのお。」

珍しいってか、最初の仕事の時以来かけてないし。

「ええ、今日はちょっと吉沢さんに聞きたい事がありまして。」

「ああ、幻術の事やろ？どうせ。」

流石に吉沢さん、浜崎組の幹部を伊達にやっているわけではないか。

「ご察しのとおりです。」

「何が知りたいんや？情報量は100万からや。」

「ええっ！金とるんですか？！」

「あたりまえや。幻術の情報を得るのは、かなり危険で難しいからのお。」

まあ確かに言われるとおりだ。

それに吉沢さんはこう言っているけれど、きっと金なんてとらないと思う。

もし取るってなら、経費として山瀬さんに請求しよう。

「えっとですね。幻術の本部の場所を探してるんですけど、だいたいの場所を知りたいのですよ。」

「それは契約成立とうけとるぞ。」

「はい。」

「ははは！嘘じゃ。情報料はいらんぞ。」

「そうですか。脅かさないでくださいよ。ありがとうございます。」

やっぱりね。

吉沢さんは実はいい人だからなあ。

「それで幻術の本部の場所やな。幹部のおっさん探しとるんやろ。それやったら、渋谷の1丁目と2丁目に絞れるはずや。」

「そうなんですか。そんなにも場所を特定できるんですか？」

「詳しくは話されへんけど、それ以降の区域は別のマフィアとわしらの管轄やからなあ。ていうか此の場所は元々わしらの縄張りで、貸し出してるだけやからな。」

結構詳しく教えてると思うけど。

まあ、欲しい情報は手に入ったし、これ以上聞いても吉沢さんにもわからないだろう。

「ありがとうございます。それだけ聞ければなんとかやれそうです。」

「それだけゆうても、かなり広いし、見つけるんは不可能や思うぞ。」

確かに短期間で見つけるには広すぎるし、出入りがなければまず探すのは無理だ。

普通のマンションの一室に潜伏されていたら、まず見つからないだろう。

「まあなんとか頑張ります。では！」

「またな。」

俺は電話を切った。

携帯電話を置くと、再び自動車のエンジンをかけて、教えられた場所へと向かった。

俺もマフィアの拠点を探し始めたが、結局数日はみつける事ができなかった。

かといって、この行為をやめる必要はない。

学校はしばらく休みだから。

といっても、学校自体休校しているわけではない。

流石にこれだけの大事、少しの事情は話さねばならなくなり、男子生徒が麻里を刺した動機は、テレビでも放送されていた。

「誰かから、ある特定のクラスメイトを刺すように頼まれた。」と。

そうなると、刺された人は狙われる理由や、その家族にも何かしら問題があると考えるのが普通だろう。

麻美ちゃんと麻里ちゃんは、こちらがなんとかする以前に、学校側からしばらく休むように言われた。もちろんこれは極秘だ。

何故なら、本来学校内の安全管理に抜かりがあったわけで、学校側はこのような事が今後無いように言って、教育や安全管理を強化しているところだ。

だけど、狙われるような生徒を登校させる事に、他の生徒の保護者が反対した。

色々な事情と話が絡み合い、結局このような結論に達したわけで。

それでも表だって大きな騒ぎにならなかったのがせめてもの救いだ。

もちろんテレビでは取り上げられたが、数日でこのニュースは放送されなくなっている。

俺から見れば、これはかなりの大ニュースなのだけれど、全てを皆知らないわけで、この程度で終わっている事実。

きっとテレビで放送されないニュースの中にも、凄く大きなニュースがあるのだろうと思い、少し震えた。

人を平気で殺す集団が、身近にいるのだから・・・

とにかく、こんな状況が、こんな街が、こんな国が、こんな世界が良いわけがない。

それを少しでも改善する為に何かできるのなら、それはやるべきだ。

そして俺は、今回の事に関してはそれができる立場にいる。

だからなんとしても、マフィアのアジトを見つけなければ。

ただ、相手の顔もわからないのに、どうやって探すのかと言う事にもなるのだけれど、その人が隠れて話している事を聞けば、きっとわかるだろう。

俺はGの聴覚から得た第六感で、そういった会話を探している。

もしくはGの視覚から得られる関連資料の映像。

どちらかから人物と潜伏場所を見つけ、後は捕まえてから警察がなんとかしてくれるだろう。

資料があるならそれが証拠になるだろうし。

今日も一日中探したが、既に夕方、まだ見つける事ができていない。

今は普通の住宅マンションにGを忍ばせて、盗聴と盗み見を一部屋ずつ行っている。

普通の人の部屋でそういった事をするのは、良心の呵責に苛まれるが、これは人の命がかかっている事だからと、自分に言い聞かせて続けていた。

あたりは既に暗くなっていた。

少し日は長くなり始めているが、まだまだ日が暮れるのが早い。

探し始めた初日こそ、会社の事やメグミとカエの事も気になるから、日が暮れば打ち上げていたが、

今はかなり夜遅くまで探している。

「でも寒いから、車のバッテリーが上がらないか心配だよ。」

俺は何となく独り言を言っていた。

完全に日も暮れて、そろそろ子供は寝る時間だ。

「結局今日もダメだったか。」

マンションが建ち並ぶ道一本探すだけで、半日を要した。

もう少し、探し方を考えた方が良さだろうか。

会話はしていなければわからないし、資料も探さなければならない。

確実に探す事が必要だと思って探していたけれど、これでは全て調べるのにどれだけの時間がかかるの
だろう。

もう少しスピードを重視するか？

それで見逃したら、又最初からだ。

逆に時間がかかる結果になる。

急がば回れ。

昔の人が経験から発した言葉だ。

自分が歳をとったからわかるのだけれど、人生経験の長い人ってのは、やはりそれだけ経験しているわ
けで、そんな人の発する言葉は、若い人の発する言葉よりも正しいと思う。

そしてことわざは、そんな人たちの多くが認めている言葉なのだから、やはりこれに従うべきだろう。

俺は必死に焦りを押さえた。

次で最後にしよう。

そう思った時に見えたのは、一件の、というにはあまりにも敷地が広い、大豪邸だった。

この区画全てが、どうやら塀でかこまれているらしい。

そしてその塀の中心に、大豪邸以外の表現が難しい大豪邸が見える。

周りは全て庭と表現するのだろう。

とにかく金持ちが住んでいる家に間違いはなかった。

カーナビで見ると、地図にも名前が出ていた。

最大手化粧品会社、美妃化粧品会長「桜田達吉」の自宅だった。

桜田達吉は、経団連の会長でもあるから、文字どおり経済界のトップだ。

そんな人の家にマフィアの幹部がいるわけないと思うと同時に、なんだか一番怪しくも感じられる。

マフィアの幹部が、マンションの一室でずっと閉じこもって生活するだろうか？

もし閉じこもるなら、それなりに快適な場所を必要とするだろう。

それが此処なら、十分やっていけるだろう。

俺は今まで以上に、此処を調べる事にした。

流石に一日能力を使い続けていたから、かなり疲れている。

それでもなんとか、この豪邸の敷地内の生命反応を全て調べた。

特に地下室や隠れる場所はなさそうだ。

「頼むぞ。」

俺はGを3匹放った。

この寒い中では、Gも辛いだろうから、今日は帰ったら美味しい物でも与えてやる事にしよう。

そんな事を思っている自分に苦笑いした。

さて、Gが進入してすぐ見つけた二人の男、ひとりテレビで見る顔と同じ、桜田達吉で間違いない。

そしてもうひとは、流暢に日本語を話してはいるが、肌の色から明らかに外国人だ。

この人がマフィア幹部だとしても、俺には違和感のないくらい貫禄がある。

まあこの豪邸内で、桜田と話しているってだけで、それくらいの貫禄は有って当然なのだろうけど。

なにやら、仕事の話をしているようだけど、今のところ意味はわからない。

「あの件は、そちらに任せるから、頼んだぞ。」

「ああ。ビジネスは持ちつ持たれつと言うんだろう。」

「末永く良い関係が続けたいからな。」

話には具体性が無いから、聞いていてもわかる事はほとんどない。

ふたりの利害関係が一致して、少なくとも現在良い関係を持っているか、それともこれから築きたいと思っている感じ。

とにかく怪しいから、もう少し聞いていよう。

そう思ったところで、聴覚と視覚を繋いでいたGとのつながりが切れた。

「うお！」

なんだ？

俺は慌てて、G 2号に命令を送る。

G 1号のいた場所へ向かうように。

すぐにG 2号は、先ほどの部屋を視界に入れる。

その映像が俺に送られる。

G 1号は、ナイフに刺さって死んでいた。

「流石に殺し屋やっていただけはある。これだけ正確にナイフ投げができれば、見せ物でも使えそうだな。」

「まだまだ腕は落ちてないさ。歳はとったが今でも現役のマフィアのボスだからな。」

なに！！

マフィアのボス？

そして今このエリアを縄張りにしているマフィアは、幻術だ。

幹部を捜して、ボスを見つけるとは。

そしてそのボスが、経団連会長とつながっている。

俺は震えた。

桜田邸侵入

昨日、その後もしばらく話を聞こうとしたけれど、送り込むGはことごとくナイフでやられた。

「今日は虫が多いな。」

「ちゃんと駆除しているはずなんだが・・・駆除業者を入れるか。」

そこまで聞けたところで、最後のGがやられた。

だからその日はそこまでにして帰ったわけだけど、あの男はマフィア幻術のボスで間違いないだろうし、調べて証拠をつかむ必要がある。

証拠とは、脅迫文を送ってきた証拠でも、それ以外なんでもかまわない。

捕らえる口実になるものだ。

何もないのに、桜田の大豪邸に踏み込むわけにはいかないから。

だから今日も桜田の豪邸を調べようと思っていたわけだけど、万屋イフに思わぬ仕事の依頼が入ってきていた。

桜田から、豪邸内の害虫駆除の仕事。

これはラッキーだ。

堂々と桜田の豪邸内に入れる。

駆除は今日一日かけて、その間に豪邸内を徹底的に調べる。

もちろん山瀬さんには連絡をいれてある。

駆除中に豪邸内にいるのもどうかと思うし、マフィアのボスが外出する可能性があるから、周りをさりげなく張ってもらう。

外出すれば、職務質問なんかで何かしら捕らえる事が可能かもしれない。

そして今日は、メグミもつれていた。

カエの蜂は、冬場には特殊な例を除いて、活動しているものがない。

それに今日はテストがあるとか。

「ごめんください。万屋イフの高橋です。害虫駆除に伺いました。」

インターフォン越しに話すと、「どうぞ。」という声と同時に、大きな門が開いた。

中にいた警備員らしき人に一声かけると、俺は前に止めていた車に乗り込み、車を豪邸の敷地内へと進めた。

車の中には、害虫駆除用の機材など一式そろえてある。

流石に手ぶらで入って、この大豪邸の害虫駆除ができたとなったら、不自然だからだ。

今までは鞆など、Gをつれて歩ける分だけでも、そう不思議に思われる事は少なかったが。

それに物々しい機材を持ち込んだ方が、長くこの豪邸内にいられそうだ。

後は、念には念を入れて、監視用隠しカメラなども警戒している。

Gや蜘蛛に命令している姿を何処かからみられていたら、流石に怪しく思うだろう。

あとひとつ、化粧で顔も少し細工した。

中学校での用務員の姿、もしかしたらなにかしら伝わっている可能性がある。

山瀬さんの娘さんの殺害を支持したのが、もしこのボスだったら、邪魔をした私やメグミの顔を知っているかもしれない。

最悪の事も考えて、身を守る為の準備も怠りない。

車から降りると、荷物を持ってメグミと玄関に向かう。

ふたりともめがねをかけて、マスクを付けていた。

マスクをつけても不自然じゃないのはありがたい。

お手伝いさんらしき人が、俺達を迎えてくれる。

まあ害虫駆除の業者を、わざわざ桜田会長が迎えてくれるとは思っていなかったが、少し安心だ。

おそらく我々に依頼したのも、会長本人ではないだろう。

マフィアとのつながりを持つ会長が、俺の顔を知っていても不思議ではないし、知っていて万屋イフに依頼したのなら、俺達は誘われた事になる。

とりあえず、はいってはいけない部屋をいくつか指定されて、後は自由に動いて良いと言われた。

ただ、指定した部屋に入った時は、命の保証はしないとの事。

冗談めかして笑っていたが、ようはかなり強い意思で入るなという事が伝わってきた。

「わかりました。でもひとつよろしいでしょうか？」

そう、今回の散策で、重要な事を伝えておかなければならない。

「为什么呢？」

「ゴキブリに毒を食べさせて、それを巣に持ち帰り一網打尽にする方法も試したいので、ゴキブリを見ても殺さないようにお願いします。」

散策しているGを殺されてはつらい。

「了解いたしました。」

特に怪しまれる事なく、お手伝いさんは了承してくれた。

まあ、Gを動かせる事を知っていなければ、疑問も何もないだろうけど。

放置しておくのは少し辛いようで、顔をゆがめてはいたが。

それにそういった方法は、テレビのCMなんかでも紹介されているし。

さて、これからはいよいよ駆除に見せかけた散策開始だ。

メグミには、もともと屋敷にいた蜘蛛に、テレパシーのようなもので、散策を命令してもらう。

俺達の間で下手な会話はできない。

何か有れば、前もって決めていたいくつかのサインで伝える。

軽い荷物はメグミに持たせ、まずは共に部屋の状況を調べる。

「綺麗な部屋だ。コレでゴキブリが出るなら、外部からの進入か、何処かに巣があるかな。」

「そうですね。床下とかも調べますか？」

「巣が見つからなければそうするか。」

ちなみに「巣」は、俺達の間での別の意味で、マフィアである証拠資料の事も差している。

とりあえずマフィア幻術のボスであると確信が持てれば、脅迫罪で踏み込む事も可能だけれど、証拠が無ければ、部下が勝手にやった事だとしらばくれる事もできるし、できれば証拠が欲しい。

「このタンスの裏に少し薬剤をまいておくか。」

「はい。」

俺はタンスの後ろに、機材からのびるノズルの先を差し込む。

その時、服の袖からGを数匹放つ。

監視カメラなんて、そうそう無いとは思うけど、注意してダメな事はない。

「害虫はいたか？」

「少しはいそうだけど、見かけないわね。」

これは、蜘蛛がいたかどうかを確認する意味も含まれていて、少しいた事を意味している。

そして退治すべきGは、見かけていないって事。

「だったら、入れない部屋に巣があるのかな？」

「うん。可能性はあるけど、他をまずは探しましょう。」

入れない部屋は、蜘蛛にとりあえず任せる。

Gでは他の部屋を探し、俺達はゆっくりと害虫駆除の仕事をしているフリを続けた。

3時間がたった。

回れる部屋は全てまわった。

トイレなども調べるフリをした。

その間、蜘蛛とGで何か証拠になりそうなものを探したけれど、見つからない。

それに、桜田会長も、あのボスらしき人物にもまだあえていない。

昨日は偶々いただけなのだろうか。

ココを拠点にしているものでなければ、それはあり得る。

そもそもココを拠点にするのに、わざわざこのあたりを全て縄張りにする必要があるのだろうか。

「私には巢を探せない場所もありそうですね。」

えっ？！

これは、蜘蛛では入れない部屋があるって意味だ。

予想や憶測は、我々の目的では断定の意味だ。

「まあ、女性が無理な場所は、俺が探すから。」

問題は、どこの部屋を探せないのだろうかという事だ。

入ってはいけないと言われた部屋は、全部で7つ。

それ以外の部屋は、既に全部見て回っている。

床下や天井裏も残っているが、ココは俺達の目的からすれば、探しても意味がなさそうな場所だ。

こうなったら床下から大量のGを放って、一気にいくしかない。

「では、床下には俺が入るから、メグミは車に戻って待っていてくれ。」

「はい。」

俺はメグミの持っていた荷物を受け取った。

この中には、Gが大量に入っている。

これを巧く床下から放って、入ってはいけない7つの部屋の散策を一気に行う。

木造の建物だから、何処かに隙間があるはずだ。

俺はGに視界をリンクしつつ、床下で作業しているフリを続けた。

こんなところまで監視されてるとは思えないけどね。

7つの部屋のうち、6つは入る事ができたが、1つだけどうしても入れない部屋があった。

ちなみに入れた6つの部屋は、大切な絵画が保管してある部屋だったり、仕事の重要書類などある部屋だったり、マフィアとの関連を思わせる物は見つからなかった。

そしてどうしても入れない部屋、木造の建物なのに、全く隙間がない。

この部屋だけ、何故か鉄筋で囲まれているようだった。

メグミが探せなかった部屋は、ココか。

だったら、ココに入る事に全力を出した方が、良いような気がする。

もし、この部屋にマフィアのボスが、今日ずっとこもっているとすれば、水回りも存在するはずだ。ずっとこもるのに、トイレも無いなんて事は考えられない。

下水からの進入路探しに切り替えた。

あっさりとして進入路を見つけた。

まあ当然だな。

さてどうするか。

ココは一か八か、一気にやってみるか。

俺は全てのGに、この部屋に進入して探すように支持をだした。

先頭のGに視覚をリンクする。

わりと最近に作られたのか、排水口内は比較的綺麗だ。

すぐに出口までたどり着く。

ついた先は、どうやら風呂場の排水口のようだ。

風呂があるって事は、やはりこの鉄筋で作られた区画は、それだけで生活もできるように作られていると言って良いだろう。

なら此処に、マフィアのボスがいることも十分にあり得る。

風呂場に出ると、とりあえずまずは1匹だけで、風呂場の外をうかがう。

脱衣所であり洗面所である場所にでた。

ドアが2つ見えるが、ひとつはおそらくトイレか。

もう一方は別の部屋へのドアのよう。

排水口内で待機していたGを数匹、トイレのドアらしき方の散策にあたらせる。

トイレらしきドアに入るのを確認して、視界リンクを切り替えた。

やはりトイレだ。

特に変わったところも無く、すぐにもとのGにリンクを戻す。

もし、もう一方のドアを出たところに、昨日のボスがいたなら、すぐにGがやられてしまう可能性もある。

それに1匹がやられたら、その後も警戒されるだろう。

此処はとにかく慎重を期した。

ドアの外が、俺の感覚に視覚として伝わってくる。

どうやら廊下のような。

入れないエリアはだいたい感覚でわかってはいたけれど、思っていたより広そうだ。

左にドア、右にドアが2つ。

コレがマンションなら、左はこの区画から出る為のドア。

右側は両方とも部屋だろう。

人がいない事を確認してから、待機しているGを排水口から出して、左のドアを調べさせた。

何処にも隙間が無く、Gでも通り抜ける事は不可能なドアだ。

この区画内が全てこんな感じで密閉されていたらお手上げだけれど、排水や換気を考えると、それはあり得ない。

とりあえず数匹のGを、部屋へのドアであろうふたつのドアの前に進める。

ヤマトGでは流石にドアの向こうには行けそうに無い。

とりあえず聴覚リンクを試してみたら、ドアの向こう側の声が、僅かに聞こえる。

聞き取る事は無理そうだが、声に来るなら隙間があるかもしれない。

そして、誰かがこのドアの向こうにいる。

おそらく・・・

小さいGで隙間を探して、通り抜けを試みる。

ドアは無理そうだ。

とは言っても、換気する為の通気口は、必ずあるはずだ。

Gの視覚で探すのは、自分が自ら探すのより少し難しい。

それでも、壁の模様のようなのが、通気口になっている事に気がついた。

進入を試みる。

此処ならヤマトGでも通る事ができた。

視界が開けた。

今までの部屋は、非常灯のような薄い光の照明しかついていなかったが、この部屋は明るかった。

そしてその部屋には、あのボスらしき人が、ソファに座ってテレビを見ていた。

人の話し声らしき音は、どうやらテレビの音だったようだ。

他に人はいない。

テレビに集中しているし、まだ完全に通気口から出ていないから、Gには気がついていない様子。

俺はこの隙に、慎重にGの進入を試みた。

しかし、次の瞬間進入を試みたGが、ナイフの餌食になっていた。

「こんなところまで虫が入ってくるのか。」

通気口内のGの視覚と聴覚から、ボスらしき人の情報は得られたが、これ以上入るとまたやられるかもしれない。

どうするか。

いや、此処にいても既に気がついているのだろう。

ただナイフが入ってこれないだけ。

とりあえずまだ時間はあるし、ココは一旦、車に戻って様子を見る事にした。

その際、部屋の中からは見えない位置に、録音用のボイスレコーダーを置いておいた。

他の部屋にもいくつか置いてある。

便利な世の中になったもので、超小型でも、しっかりと人の喋り声が録音できる。

盗聴は犯罪だが、ま、悪い奴を捕まえる為だ、かまわないだろう。

人殺しは犯罪だと言いながら、正当防衛は許されるし、戦争なら人殺しが称賛されたりもするのだ。

戦争はお互いの正義の主張であるわけで、常に敵は犯罪者であり、味方の正統性が主張できる。

そう考えると、絶対的正義は存在せず、善悪なんてものも存在しない事になる。

最終的には、自分にとって善なのか悪なのか、それに従って動くしかないという事だ。

お手伝いさんらしき人に、様子を見る為に一度車に戻る事を伝えて、俺は車に戻った。

車の中では、メグミが持ってきていた弁当を食べていた。

元々ギリギリまで屋敷内を調べるつもりだったから、弁当とパンを持参してきている。

とりあえず、しばらくは休むつもりなので、俺も弁当を手にとった。

「お疲れ様。」

メグミが当然の台詞を口に出す。

流石に車の中なら大丈夫だろうと思い、俺も普通に話す。

「どうやら、この屋敷にマフィアのボス様はいるみたいだな。」

「やっぱり桜田会長とつながりが強いよね。」

メグミは、マフィアのボスを見つけた喜びより、日本の財界トップが、宗教グループである他国のマフィアと、つながりが強い事への嫌悪感の方が勝っているようだった。

実際、権力者や著名人の一部が、暴力団などつながりがある事は知っている。

俺も昔から俳優をやっていたわけだから。

ただ、人気のない俺に、そういった話が入ってくる事はそれほど多くは無かったが。

「とりあえず、今、録音機をいくつか配置してある。何かしらの話が録音できれば良いが。」

「うん。」

ここにきて、少し怖くなったのだろうか。

メグミは気分がすぐれない様子だった。

「先に帰るか？」

後は適当に時間をつぶして、録音用ボイスレコーダーを回収する事くらいしかできそうにないと思っていた。

それなら、俺一人でもなんとかできるだろう。

ただ、蜘蛛が糸を使って設置したボイスレコーダーだけは回収してもらわないとならないが。

Gに回収させて、糸につかまったりしたら大変だからね。

「うん、そうする。」

「蜘蛛に設置してもらったレコーダーは2つか。それだけは回収して帰れるか？」

「大丈夫。」

メグミはそういうと、食べかけの弁当のふたをして、ゴムで固定した。

「一緒に行こうか？」

俺は声をかけたが、メグミは首を振って、一人車から出ていった。

ま、おそらく今は、マフィアのボスも部屋にこもっているし、桜田会長がいる様子もない。

俺達が山瀬さんの娘さんを守り、犯人逮捕に協力した者である事を知る者も居ないようだ。

大丈夫だろう。

ほどなくして、メグミは普通に屋敷から出てきた。

「お疲れ様。」

今度は俺がメグミを車に迎え入れた。

「ただいま。」

メグミはそう言って車のシートに座ると、鞆からボイスレコーダーを取り出して、俺に差し出した。

「ありがとう。じゃあ、タクシーでも捕まえ帰ってくれ。」

ボイスレコーダーと引き換えに、俺は1万円札を渡した。

するとメグミは、「大丈夫、電車で帰るから。」そう言って、1万円は受け取らず、自分の荷物を適当に持って、車から出た。

俺は車内から手を振った。

「ごめんね。後頑張る。」

メグミはそうって少し笑顔を作り、手を振ってから、桜田邸の敷地内から出ていった。

一応の決着

桜田邸に入り調べた日、結局得られたものはほとんど無かった。

得られたのは、桜田会長と、マフィアのボスであろう人とのつながりが強いという事実を、再確認できた事だけ。

3時間ほど車内で待ってから回収したボイスレコーダーにも、メグミが回収したものにも、特に証拠となりえるものは無かった。

むしろ桜田邸を調べた事で、流れは悪い方向へと進んでいた。

一つは、日本の財界トップが、他国のマフィアと繋がっている事が確実な事実として確認できた事に、ショックを受けた事で皆気分が沈んだままである事。

そしてもう一つは、マフィアから、我々万屋イフも、命を狙われる存在になってしまっているかもしれない事。

先日、桜田邸から帰る時、車で敷地を出た時にすれ違った車、その中に桜田会長と、用務員のおじさんをしていた俺を知る人物が、どうやら乗っていたようなのだ。

俺の車とすれ違った後、その男は車から出て、こちらの車を指差して、慌てて何かを言っているようだった。

よく考えれば、俺の車は、防弾ガラスとパンクしないタイヤにカスタマイズされた、特別チューニング車だった。

山瀬さんの娘さんを送り迎えしていた車である。

これで完全に、万屋イフが警察と繋がっている事がばれ、俺達も少なからずマークされる存在になってしまった事は事実。

正直、俺としては、メグミとカエを巻き込んでしまっている事が、一番つらい。

二人の正義感は強く、この仕事に対しての迷いは全くない。

だけどやはり女子高校生だ。

怖いという気持ちは、そこかしこに現れていた。

一応、山瀬さんにはマンションの周りを警戒してもらってはいるし、実家の方もそう。

だけど迂闊に学校にも行けないし、不用意に出かける事さえできない。

早く決着をつけなければと思った。

実際、山瀬さんに脅迫してきているのがマフィア幻術で、そのボスが桜田邸にいる事は分かっているので、監視は続けているし、いつでも踏み込める準備はしている。

ただ、それがマフィアのボスである証拠も無いし、迂闊には動けなかった。

何か少しでも証拠があれば。

俺がGを通して聞いた会話を録音できていれば、少しは違っていたのだろうが。

と言うわけで、実はボイスレコーダーを、桜田邸のリビングに残したままにしておいたのだ。

残しておいて、回収できるかどうかはわからないし、見つけれたらヤバイので、数は一つだけ。

こんな状況で回収に行くのも危険だが、流石にGに此処まで持ってこさせるのは不可能に近い。

ある程度近くまで行って回収する必要がある。

盗聴器ってのももちろん考えたが、あれは電波を飛ばすから、きっとすぐにばれるからやめていた。

今思えば、良かったと思う。

あんなふうに警察とつながりがある事がばれてしまって、盗聴器が隠されていないかは、おそらく調べられただろうから。

俺は桜田邸の近くまで来ていた。

二人を残して出かけるのもためらわれたが、山瀬さんに警備の強化も頼んだし、大丈夫だと自分に言い聞かせた。

なんとかボイスレコーダーを回収し、証拠となる物を手に入れ、早々にこの危険な仕事を終わらせたかった。

桜田邸の周りには、警察が何人かはっているようだった。

山瀬さんの話によると、マフィアのボスらしき人物が、この豪邸を出た様子はまだ無いとの事。

そうは言っても、みんな顔も知らないわけで、もう此処にはいないかもしれない。

回収は、Gに下水を通過して桜田邸を出てもらい、道の端にある水路の所まで持ってきてもらう。

夏ならこれくらい楽勝だろうが、冬なので上手くいくかは微妙だ。

作戦としては、お湯を流した時など、比較的暖かい時に、Gのタイミングでお願いした。

なるべく早いタイミングが好ましいが、焦って失敗しては元も子もない。

車を止めて、此処でじっとしているのも落ち着かなかった。

警察が張っているし、まさか本拠地近くでドンパチとかあり得ないけれど、それでも犯罪集団のボスが近くにいないかもしれないのだ。

俺は、少し怖いのだろうか。

死のうとしていた自分が、今になって死ぬのが怖いのか。

なんだか少し笑えてきた。

しばらく車の中でポーっとしていたら、Gが一匹やってきた。

どうやら動き始めたらしい。

もうすぐ来るか、それともどこかで動けなくなるか。

しばらく待っていると、再びGが一匹やってきた。

どうやら此処まで、ボイスレコーダーを持って来る事が出来なかったようだ。

できたのは、敷地外の道沿いの溝の所まで持ってくる事。

こちらから向かう以外にない。

俺は迷わず車のエンジンをかけると、更に桜田邸に近づいて行った。

数日前に来た場所だが、何故か懐かしく感じた。

俺は素早く道沿いに車を止めると、車に乗ったままドアを開け、溝の蓋というか、石のカバーを外した。

すると丁度そこに、ボイスレコーダーがあった。

すばやくそれを取ると、元あったとおり石のカバーをつける。

後はこの場からおさらばだ。

だが、せっかく此処まで桜田邸に近づいたのだから、俺は確認しておきたくなった。

あのマフィアのボスが、此処にいるのかどうか。

先日、害虫駆除の名目で豪邸内に入った時には使わなかったが、俺は生命力から、どんな生き物が何処にいるのか、ある程度近い範囲なら分かる。

ただ、生命力を使う能力は、使うととても疲れるのだ。

特にひどかったのが、山瀬さんの娘、麻里ちゃんの傷を治した時だ。

なんとなくだが、俺は悟っていた。

この生命力を使った能力は、自分の生命力を削っている事を。

だから無意識に、なるべく使わないようにして、Gを使った能力だけで仕事をしていたのだ。

だが、今回は確認しておくべきだろう。

俺は桜田邸内の生命力を確認した。

豪邸全ての生命反応を確認したが、あのマフィアのボスの存在は感じられなかった。

桜田邸から離れたらすぐ、山瀬さんに電話を入れた。

マフィアのボスは、もう桜田邸にはいないと。

帰ってすぐに、ボイスレコーダーの録音を確認したかったが、排水溝を通ったりしていたので水で濡れており、すぐには聞けなかった。

こういったものは、濡れた状態で使うと、完全に壊れてしまう恐れがある。
たとえば携帯電話も、水にぬれても、電源さえ入れていなければ、乾くのを待って使えば、案外使えたりする。
それを、使えるかどうかすぐに確認しようと電源を入れるから、そこで壊れる事が多いのだ。
でも、水に落とす時に、電源が入っていないなんて事もそうそうないだろうけれど。
ドライヤーの力もかりて、ようやく乾いたようなので、俺は電源を入れた。
無事動くようだ。
俺は早速内容を確認した。
全部で100時間近くの録音がある。
全て聞いていたら、まる4日かかるので、俺はデータをPCに移してから、波形表示して、喋り声が入っている部分だけを聞いた。
すると、すぐに証拠となりえる録音が見つかった。
これは、あの桜田邸に入ったその日の夜の会話だった。
より多く録音したかったのが、4日待ってしまったが、どうやら失敗だったようだ。
録音内容を簡単に言うと、山瀬刑事への脅迫の事、そして俺達万屋をどうするかって話、あのナイフの男がマフィアのボスであろう事。
桜田達吉とマフィアの親密な関係を表すものがあり、マフィアのボスが一旦国に帰ると言う話だった。
録音された話によれば、あのマフィアのボスは、3日前に日本を発っているようだ。
顔を知っているのは俺だけだし、車のトランクにでも入ってでかけられていたら、もう動きを追う事も、出国するのを止める事も不可能だった。
ただ、どうやら幹部の一部は、引き続きロバートと陳を救出する為に、日本に残るって話だった。
桜田邸に踏み込むには、十分だった。

その日夜に、山瀬さん達が桜田邸に踏み込み、一応の決着はついた。
次の日には、桜田会長とマフィアの関係がテレビより全国に発信され、日本中を驚かせた。
日本を、世界を良くする俺達の活動は、少しは前に進んだのだろうか。
おそらくまだまだだろう。
ほんの氷山の一角を崩したに過ぎない、そう思った。

思わぬ出会い

桜田会長が、マフィア幻術の密輸に協力していた事が公になった日から数日、あの山田から電話があった。

一言で言うと、あまり目立つ事はするなって事だった。

どうやら捕まったマフィアのメンバーが、万屋イフの事を少し話したようで、裏では俺のところにも事情聴取にくるとかって話になっていたらしい。

その辺りは、山瀬さんがなんとかしてくれると思っていたが、どうやら国家権力も動いていたようだ。そんなわけで、しばらくは目立った仕事はできそうになかった。

というか、金が欲しいならこちらで用意するから、今後ずっと目立つなと言われたわけだけだ。

ただ、俺としては、せっかくの力だ。

金はともかく、やはり何か良い事に使いたいと思っていた。

さて、今日も特に何をしてもなし、何もする事がないので、俺は久しぶりにのんびり街をうろうろしてみる事にした。

天気は曇りで、時々雨もぱらついたが、特に傘をさすほどでもなかった。

訪れたのは、若かった頃、よく遊びに来ていた、新宿。

昔からある店も残ってはいたが、ずいぶんと風景が違っているように見えた。

南口の方へ歩くと、更に懐かしい建物と、全く感慨の無い建物が目に入った。

俺はその、懐かしく感じる建物へと近づいた。

ウインズ、場外馬券売り場だ。

そう言えば今日は日曜日で、競馬開催の日だった。

近くで売られている新聞には、弥生賞の文字がでかでかと書かれていた。

弥生。

俺の妻だった人の名前だ。

妻を思い出すと、今の自分が本当に申し訳なく思う。

何故俺は、のこのこと生き残ってしまったのだろう。

何故後を追いかけていけなかったのだろう。

もし、今彼女と出会えていたら。

もし、此処に俺と同じように、30年前の姿であらわれてくれたら。

「もし、か・・・」

俺はまた、あり得ないイフに、気持ちを持っていかれていたようだ。

自分の女々しさに苦笑いした。

俺はなんとなくウインズに入って、少しの馬券を買って、退屈なレースを何レースか見ていた。

若い頃は競馬に熱狂していた。

何故あれほど熱狂できたのだろう。

馬の名前、血統、調教師や騎手、色々な情報が、俺の頭の中にあっただように思う。

でも今では、そのほとんどはどこかに消えてなくなっているようだ。

走っている馬の血統を聞いても、ほとんどわからない名前だ。

いつの間にか終わっていたメインレース、弥生賞の勝ち馬は、ヴィクトワールピサ。

全く聞いた事もない馬だった。

メインレースが終わって、一部の人達はウインズを出て行く。

俺もなんとなく、その波の一部になっていた。

最近忘れていたが、晩年の俺は、いつもこんな感じだったように思う。

覇気もなく、ただ流れに流される、そんな毎日。

ただ違っているのは、財布の中身だ。

何故か出かける前よりも、所持金が増えていた。

金の無かった頃は、どんだけ頑張っても、どれだけ努力しても、簡単には増えなかったお金。

しかし今はどうだろうか。

欲がないからなのか、金に困る事がないからだろうか、簡単に増えていきやがる。

こんな世の中、本当に腐っていると思った。

ウインズから出ると、少し雨が降っていた。

今のスッキリしない気分の俺には、丁度いい雨だ。

儲かったお金で遊びにでも行こうかと、少しくらいは考えられてもいいものだが、貧乏性な俺には、そんな風には思えなかった。

ヴィクトワールピサか。

なんとなく、弥生賞の勝ち馬の名前を思い出した。

そして本当になんとかだが、この馬は大きな事をやってくれる、そう思った。

少し雨に濡れながら、俺は駅へと向かった。

もうなんだか、街を歩く気持ちにもなれなかった。

気分がすぐれない。

病院で目を覚ましたあの日、あの日は凄く体調が良かったように思う。

しかしあの日以降、ずっと右肩下がりの気がする。

実際、今動いてみれば、結構動けるだろう。

そんなはずはないとも思える。

それでも、生命力を使ってきた自分は、確実に死へと向かっていると感じる。

いや、全ての人が、日々死へと向かって歩いているのだ。

そう思うのも当然か。

もう何を考えているのかも、分からなくなっていた。

そんな時だった。

突然後ろから、肩を叩かれた。

俺は無気力に振り返る。

しかし、目の前に立つ人を見て、俺は一気に意識が現実へと戻ってきた。

ハッキリ言って驚いた。

そこに立つ人物、それは、俺がこの世で最も信用し、信頼してきた人物の一人だった。

後悔

新宿のウインズに久しぶりに行った帰り、出会った人物は、唯一の友達と認めていた、鈴木だった。年に何度か会い、金の無い俺に飯をおごってくれていた、売れない俳優の俺を、最後まで応援し続けてくれた、俺にとっての最高の親友。

南極に行く時、こいつにだけは話してから行こうかと考えたが、結局何も言わずに、俺は死ぬことを決めた。

心残りがあったとすれば、死ぬことをためらう理由があったとすれば、この鈴木のことだけだった。

そんな唯一無二の親友が、今日の前にいる。

俺は抱きついて、思いっきり泣きたかった。

理由はハッキリとはわからない。

嬉しかったのか、申し訳なかったのか、おそらく両方なのだと思うが、とにかく複雑で泣きたい気持ちだった。

だが、今の俺は、西口悠二ではない。

高橋光一だ。

この事は、話さないで約束した事だ。

でも、鈴木には話しても良いのではないだろうか。

これ以上無い親友なのだから。

きっと信じてくれる。

きっと誰にも話さないでいてくれる。

それでも、俺は不器用だった。

約束は破れなかった。

「はい、なんででしょうか？」

俺は普通に、見ず知らずの人と話すように、こたえていた。

もし、俺が少しでも融通のきく人間だったら。

こんな時、演技力のある俳優であった事が悲しい。

平気な顔で、赤の他人の演技ができてしまう。

俳優なんて、最悪な職業じゃないかと、思った。

「いや、ちょっと大切な人に似ていたので・・・」

俺の顔を見つめたまま、鈴木はまだ、驚いた顔をしている。

西口悠二は死んだ。

この世界では今、そういう事になっている。

でも俺は此処で生きている。

叫びたくなった。

「そうですか。では・・・」

鈴木の顔を見ているのが辛かったから、俺は早々に立ち去ろうとした。

しかし鈴木が俺の肩をつかんで、行かせてはくれなかった。

「あの、あなたの父親の名前、西口悠二じゃないですか？」

いや、本人なんだよ。

鈴木よ、もう勘弁してくれ。

振り返った。

泣いていた。

鈴木が、泣いていた。

俺は、俺はどうして、死のうとしていたのだろうか。

何故こんな事になったのだろうか。

もし、死のうなんて思わなければ、きっと鈴木が俺を助けてくれたに違いない。
もし、南極に行く前に、鈴木に声をかけていれば、きっと死に物狂いで止めてくれていたに違いない。
後悔ばかりが俺を襲った。
だけど、全ては今更だ。
今の俺は高橋光一。
俺は融通のきかない男だ。
何も話せない。
山瀬さんの時のように、上手い具合に伝えられないだろうか。
俺にできるのは、これくらいだろうか。
「違いますよ。あ、せっかくなので、こちら、受け取ってもらえませんか。」
俺はいつも持っている、万屋イフの名刺を、鈴木に差し出した。
すると鈴木も、自分の鞆の中をそそくさと探し、慌てて名刺を差し出してきた。
鈴木の名刺に書かれた事柄は、名刺を貰わなくても全て記憶している事ばかりだった。
「俺、万屋やってるんです。「命」に関わる事で、何かお困りの事があったら、是非連絡ください。」
正直、自分でも何を言っているんだと思う事を言ってる。
命にかかわる仕事を、ただの万屋が？
バカバカしい。
免許を持たない医者だとでもいうのか。
だけど、鈴木は真面目に、俺の話しを受け取ったようだった。
「では、何かあれば。」
俺は、鈴木に背を向けて歩きだした。
今度は肩をつかまれて、止められる事もなかった。
一人で10秒も歩いただろうか。
涙が出てきた。
だが、まだ後ろから鈴木が見ているようで、俺は涙を拭う事もできなかった。
俺は駅を越えて、更にまっすぐ歩いていった。
雨が降っていた事を思い出した。
雨が涙をごまかしてくれる、良かったと思った。

幸せの日々

親友と出会った事を、マンションに戻ってからカエとメグミに話したら、二人は何故か怒っていた。

「なんで！！」

「それはちゃんと話すべきだと思うよ。」

俺が、自分の事を話さなかった事が、それほど駄目な事なのだろうか。

人の信用と信頼を得るには、約束は絶対に守るべきものだと思う。

だけど二人は、それは絶対ではないと言う。

そんなどうでもいい人との約束よりも、今日の前の親友の悲しみを取り去る事の方が大切だと言う。

確かに、言われてみればそうかもしれない。

「だが、俺が約束を破った事で、鈴木は俺を信用できないと思わないだろうか？」

「それこそ信用してないよ。」

「そうですよ。光一さんが鈴木さんを信用してません。」

メグミもカエも、完全に同じ考えのようだ。

たかだか17年しか生きていない小娘の言う事だ。

バカな考えだと聞き流す事もできるはずなのに、俺はどうやら、二人の意見の方が正しいと誤ってしまっているようだ。

いや、そうだと思いたいのもかもしれない。

鈴木なら、俺がたとえ悪人になっても、俺の味方であってくれる。

そう思いたいのだ。

「次、会ったら、その時は、考えるよ。」

俺のスッキリしない返事に、二人は納得できないって表情だったが、どうやらギリギリ納得してくれたようだった。

それからしばらく、二人はテスト勉強の日々、そして気がつけば、季節は春へと移り変わっていた。

山瀬さんとは時々会ってはいたが、特に大きな事件に巻き込まれる事もなかった。

どうやらマフィア幻術の事で、警察とは関係ない俺を巻き込んだ事に、罪悪感を持っているようだった。

俺は全く気にしていないと言ってはいるが、山瀬さんは良い人だ。

おそらく、本当に困った時以外は、俺に話をもちかけてくる事は、もうないだろう。

浜崎組の吉沢さんも、マフィア幻術の事が片付いた直後に連絡をくれて以来、連絡はとっていない。

最近はと言えば、もっぱら二人の可愛い女子高生と、カラオケに行ったり、遊園地に行ったりと、遊んでばかりだ。

幸せとは、こういう事なのだろうなと思った。

春休みも終わり、二人の女子高生は、再び高校に通う毎日に変わった。

なんとなく夢の世界から、現実に戻ってきたような感覚だったが、かといって幸せが無くなったわけではない。

一緒に暮らしているわけだし、結局は毎日顔を合わすのだから。

夢の続きか、そんな事を思うある日の事だった。

携帯電話に、よく知る番号から電話がかかってきた。

相手は鈴木である。

俺は出るのをためらったが、意を決して電話に出た。

「はい、万屋イフです。」

意を決した割には普通だなと、自分で思ってなんだかおかしかった。

「あ、あ、あの、先日、ウインズで・・・」

俺よりも、鈴木の方が緊張しているようだ。

不思議と鈴木の高張が、俺を落ち着かせた。

「鈴木さんですね。電話ありがとうございます。」

「あ、いえ、仕事の依頼じゃないんですが。」

そうか、仕事の話って事もあったのか。

俺は鈴木に言われるまで、仕事の依頼の電話である可能性は、完全に頭になかった。

これが、友達なんだなと、改めて思った。

「では、どういったご用件で？」

「あ、その、今週末の皐月賞、中山競馬場に観にいきませんか？」

まさかの誘いだった。

しかし、当然と言えば当然の誘いであるようにも感じた。

「良いですね。」

俺は迷わず了解していた。

それがもっとも自然な流れで、もっとも俺らしいと思ったが、同時に信じられない感覚だった。

その日の夜、俺はメグミとカエに、週末に鈴木と、競馬場に行く事を話した。

すると二人は、「つれてって」と、声をそろえて言ってきた。

親友と水入らずなのに、なんて思わなくもなかったが、二人にしてみれば、俺が鈴木に本当の事を話すかどうか気になるのだろうか。

それともただ単に、競馬場に行ってみただけなのか。

とにかく、早速鈴木に電話をかけて、二人をつれていっても良いかどうかを確認した。

すると問題無いて事だったので、二人を連れていく事になってしまった。

照れて無理だと言ってくる事も予想したが、むしろ女子高生二人が来ると聞いて、少し嬉しそうな声になっていた気がした。

4月18日皐月賞。

俺は楽しみでしかたがなくなっていた。

弥生賞を勝ったヴィクトワールピサ、当然出走してくるのだろうな。

俺はなんとなく、この馬が勝ったら全てを話しても良いような気がした。

そんな思いの中、あっという間に、日曜日になっていた。

俺達三人は、それぞれの期待を胸に、朝も早い時間に眠い目をこすりながら、マンションを出るのだった。

中山競馬場

4月18日、日曜日晴れ、皐月賞当日、俺達三人は、船橋法典駅に来ていた。

此処で鈴木と合流して、一緒に中山競馬場へと向かう事になっている。

と言っても、この駅から競馬場へは直通路がある、この駅が既に競馬場の一部であるように感じるから、競馬場に向かうという表現は、今一しっくりこない。

俺達が乗ってきた電車の次の電車に鈴木は乗っていたようで、すぐに合流できた。

「おはようございます。」

俺はごく普通に、しかし普通ではない挨拶をした。

「あ、おはようございます。」

鈴木はどうやら、少し緊張しているようだった。

こんなに緊張する奴だったかとは思ったが、目の前の鈴木は、まさしく俺の好きな鈴木で間違いなとも思った。

「おはようございます！」

「あ、今日はよろしくおねがいます。」

カエもメグミも少しいつもより硬くなっているが、初めて二人が出会った時ほどではないかなと感じた。

この二人も、成長しているんだなと、何故だか嬉しい気持ちだった。

逆に鈴木は、二人の女子高生に挨拶されて、更に挙動不審になっていた。

ぶっちゃけ「おちつけ！」なんて言いながら背中をたたきたかったが、今は高橋光一だ。

そうした気持ちを抑えた。

それにしても、このメンバーは傍から見るとどう映るのだろうか。

父親に競馬場につれてきてもらった、息子と娘二人か。

なんとも仲良し家族だな。

変な想像をして、笑顔が隠しきれなかった。

俺の笑顔を見てか、鈴木もどうやら落ち着いたようで、共に中山競馬場へと向かった。

競馬場内は、人があふれていた。

こんな朝っぱらから、どうしてこれだけの人がいるのかというくらい人があふれていた。

そう言えば俺も、この人たちと同じように、熱い視線で競馬を見ていた事があったのだ。

今日は、鈴木が指定席をとってくれていて、ゴール前の陣取りに奮闘する事はない。

でも、上から見下ろすそこには、30年前の俺がいるようで、少し気分が高揚していた。

不思議な感覚だ。

数年前の俺は、もし此処に来ていても、あのゴール前を見て、こんな思いは抱かなかったような気がする。

とにかく余裕がなかった。

おそらくゴール前を見降ろす余裕さえもなかったはずだ。

何故こんなところに来ているのか、他にやるべき事はなかったのかと、自問自答していたに違いない。

人生は、余裕がないとますます余裕がなくなり、悪いと更に悪くなるものだと、いつのころからか気が付いていたかもしれない。

それでも努力すれば好転させる事もできていた。

まっすぐ誠実に生きていけば、必ず認めてもらえるものだと思っていた。

でもそんな事はない。

俺の人生そのものが答えだ。

毎日努力を続けて、結局こんな人生だったのだ。

それでも今の俺は、あの頃の俺でもないし、努力しなくても幸せを手に入れられる状況にある。

本当に理不尽で、神は無慈悲だ。

俺は苦笑いを浮かべながらも、せっかくだし、楽しまなくてはと思った。

鈴木が二人の女子高生に、競馬新聞を広げて何やらレクチャーしている。

高校生は馬券を買えないが、鈴木がかわりに買ようだ。

さて、俺も予想するか。

少しドキドキしていた。

レースが消化されていくにつれ、二人の女子高生は疲れてきたようだ。

競馬観戦は、序盤とばすと、後半疲れてくる。

朝10時からレースが始まり、最終は16時を過ぎる。

6時間以上も観戦し続けるスポーツなんて、そうそうないだろう。

しかもパドックに移動したり、馬券を買いに行ったりと、移動も激しい。

朝も早いし、睡魔とも戦う事になる。

メインイベントは、その日ある12レースの内、11レース目だから、そこまではゆっくり休日を満喫するのが正しい過ごし方だ。

それでも、二人の女子高生からは、それなりに予想を楽しんでいる事も伝わってきたので安心した。

流石に若いという事か。

それから、ちょっと値の張る昼食をすませ、またパドックへの移動、予想、馬券購入、観戦を繰り返した。

そしていよいよ、メインレースの時間がやってきた。

このレース、皐月賞は、俺にとって特別の意味を持つレースだ。

妻の名前をつけたレースに勝った馬、ヴィクトワールピサが出走する。

そして、もしこの馬が勝ったら、俺は鈴木に全てを話すと決めていた。

「ヴィクトワールピサが、断然の一番人気か。」

「ローズキングダムは、新場戦でヴィクトワールピサに勝ってるのですよ。私はこっちに注目します。」

俺の独り言に、鈴木がこたえてきた。

鈴木の前予想は、昔からよく当たる。

ただし、それは今すぐではない。

おそらく今回の皐月賞では、ローズキングダムが1着にくる事はないだろう。

ダービーか、菊花賞か、後にヴィクトワールピサに勝つならそのあたり。

ダービーはローズキングダムから流してみようか、そう思った。

ただ、俺がそう思っている事を、今話す事は出来なかった。

まだ俺が、西口悠二である事を話すと決めていないし、話していないのだから。

でも、俺にはなんとなく自信があった。

「間違いなく、ヴィクトワールピサが勝ちますよ。」

「自信があるみたいですね。では私もヴィクトワールピサから流してみますか。」

「じゃ、私も！」

「私もそうします。」

いつの間にか話に入ってきてたカエとメグミも、どうやら俺の予想に乗るようだ。

ただし、俺のは予想ではない。

ただの願望と、根拠のない確信なのだけどね。

俺はヴィクトワールピサの単勝に1万円。

オッズは現在2.4倍だ。

当たったとしても、そんなに儲からないが、儲ける事が目的ではないし、コレで良い。

鈴木は、ヴィクトワールピサとローズキングダムの組み合わせ1点買い。
メグミとカエは、ヴィクトワールピサから、いくつかの馬に流していた。
本馬場入場が終わり、GⅠのファンファーレが響き渡る。
これだけは、何度聞いてもドキドキする。
いよいよだ。
このレースは、俺の人生を変えるかもしれない。
いや、間違いなく変えるレースだ。
そのレースが、今スタートした。

皐月賞

4月18日、第70回皐月賞。

ゲートが開いた。

まずはスタンド前を通り過ぎてゆく。

ヴィクトワールピサは後方4番手といったところか。

二人の女子高生はそれを見て、「前へ前へ！」なんて言っているが、全く問題無い。

ペースは早くもなく遅くもなく。

前半1000mは60秒、思ったとおりだ。

俳優時代に鍛えた俺の体内時計はくるってはいない。

ヴィクトワールピサは、まだ馬群の中。

前と後ろが詰まって団子状態の進行。

ヴィクトワールピサは、此処から抜け出せるのか？

少し不安になった。

負けるとするならば、内に包まれて、抜け出せない時なのかもしれない。

俺は人生で、融通がきかず、自分で自分を閉じ込めた鳥かごから、抜け出せず終わりを迎えた。

嘘はつかない、信念はまげない、約束は絶対を守る、他人に迷惑をかけない。

もしかしたらどれも、どうでもいい事だったのかもしれない。

だけどその鎖に繋がれた俺は、そこから抜け出せず、誰の迷惑にもならないように、南極で死のうとしたんだ。

今の状況になってからは、盗聴したり、暴力団と手を取り、金を盗んだり、あこぎな商売もして、色々悪い事をしたように思う。

それでも今、何故か幸せを感じている。

なんだろうか、この状況は。

俺が俺ではないからだろうか。

俺が、西口悠二ではなく、高橋光一だから、幸せになれたのだろうか。

嫌だ。

俺は本当は、西口悠二として、幸せをつかみたかったのだ。

西口悠二として、俺は鳥かごから抜け出したかったのだ。

馬群の中に閉じ込められたヴィクトワールピサが、なんだか自分自身のように思えた。

「いけ！」

俺は叫んでいた。

もし、今からでも遅くないなら、西口悠二の人生を、西口悠二の幸せをつかみたい。

俺の声に、女子高生二人も、そして鈴木も、みんなで声を上げていた。

「いけえ～！！」

その声にこたえるように、ヴィクトワールピサは内をついて、抜け出してきた。

一番の経済コース。

走る距離の短いコース。

上手く世の中を渡ってこれなかった俺とは対照的に、楽をして勝とうとしているように見える。

でも、それが悪いとは思わなかった。

抜け出せないところから抜け出す強さ、俺に無い強さを感じたから。

抜け出したヴィクトワールピサは、追撃も封じて、当然のように1着でゴールした。

感動した。

嬉しかった。

そして悲しかった。

自分が悩んでいた事が、バカバカしくなった。
またそれが悲しかった。
失笑が漏れた。
それでも、涙はでなかった。
とてもすがすがしい気分になった。
鈴木は、なんとも言えない表情で、ただ呆然とターフを見つめていた。
ゴール直前、ローズキングダムは4着に沈んでいた。
カエは俺を見ていた。
メグミは的中馬券を俺に見せていた。
二人の顔は、今日の俺の思いを知っているような表情だった。

皐月賞が確定したところで、メグミの的中馬券だけ換金して、俺は自分の単勝馬券はそのまま持つて帰る事にした。
特に金が欲しくて買った馬券じゃない。
でもこの馬券には、俺の思いが詰まっている。
2.3倍で確定した馬券は、2万3千円の価値であるわけだが、俺にとってはそれ以上のものだ。
換金する気にはなれなかった。
さて、いよいよこれから、俺は鈴木に全て話す事になる。
抜け出せなかった鳥かごから、今更だけど俺は抜け出すのだ。
西口悠二に戻ったら、俺はまた不幸になるかもしれない。
少し怖かった。
それでも、俺は言うとしたのだ。
やると決めたのだ。
「鈴木さん、この後、家にきませんか？話したい事があるので。」
俺はようやく、出る事の出来なかった卵の殻に、傷をつけた。

告白

俺の自宅への誘いに、鈴木は喜んで応じてくれた。

カエとメグミは気を使って、「少し何処かに行ってくるよ。」なんて言ってくれたが、そんな気遣いは無用だ。

カエとメグミもまた、俺にとっては大切な仲間であり、もう家族なのだから。

テーブルを囲んで椅子に座り、俺と鈴木は向かい合っていた。

それぞれの横に、カエとメグミも座っている。

もうここで冗談を言って、ごまかせる雰囲気ではない。

逃げ道はもうないという事だ。

自分で決めた事なのに、ただ大切な人に、大切な話をするだけなのに、俺は此処まで自分を追い詰めないと言えないのか。

約束を守る事、ただこれを自らの意思で破るだけだ。

約束を守らない人なんて、この世にはごまんと存在する。

それが駄目な事だと分かっているが、平気で破る。

その代表的なのが政治家だ。

到底達成できないマニフェストを掲げ、人々に良い顔をして票を集め、当選したらマニフェストなんてあつてないようなものだ。

もちろん、全てを守って欲しくて投票する人なんていない。

逆に守られると困る事さえある。

だからやらないマニフェストがあつても良いのだ。

理屈では分かっている。

今の俺の約束は、破っても良いはずの約束だ。

日本では人権が保障されているのだから。

でも、どんな約束でも、守ってほしい人がいるから約束なのだ。

約束した限りは守るべきではないのかと、やっぱりどこか思ってしまう。

一部の者の利益の為の約束は、最初から約束しなければ良いのではないだろうか。

俺は、施設から出る為に約束した。

俺個人の利益、いや人権を守る為に約束して、破る事によって、政府や山田に何か迷惑がかかるのか。

いや、鈴木になら話しても、誰にも迷惑にはならないだろう。

だけど今回のこの告白は、おそらくそれだけにとどまらない。

俺は、鳥かごから抜け出したいのだ。

西口悠二の幸せをつかもうとしているのだ。

この理不尽な世界を変えたいと思った。

こんな世界腐っていると思った。

でも、俺一人の力では、この世界を浄化するなんて、到底無理だと分かった。

山瀬さんは頑張っているが、マフィアの下っ端を捕まえて、悪い奴らを少し懲らしめるくらいがせいぜいだ。

俺が協力したとして、このままでは100年かかっても変える事はできないだろう。

何故なら、この腐った世界を作ったのが、この国の人々なのだから。

人間が作ったものなのだから、腐っていて当然。

欠点があつて当然。

これを少しでも良くする努力をやめてはいけませんが、ある程度受け入れる事も必要なのだと分かった。だったらどうするのか。

みんながやっているように、この腐った世界の中で幸せをつかむしかない。

西口悠二だった俺が、分かっていたのに出せなかった結論を、今、出そうとしていた。

「話と言うのは・・・」

俺は何とか声を絞り出し、鈴木を見た。

すると鈴木は、俺の顔の前にサッと掌を向けた。

喋るのをストップしろという事だが、一体どういうつもりだろうか。

だがその疑問は、すぐに消えてなくなった。

「悠二なんだろ？」

鈴木の様子は、確信をもった笑顔だった。

俺は驚いた。

何故そんなにハッキリと、そう思えるのだろうか。

確かに本人だし、30年以上も前の俺と同じ姿ではある。

でも、30年以上も前の記憶なんて、そんなにあるものでもない。

写真を見ても、髪型も違えば、服装も違う。

確信なんて持てるはずないじゃないか。

だいたい、人が若返るなんて、常識としてありえるものではない。

そんな都合のいい力があれば大騒ぎだ。

俺は少しの間、声がでなかった。

すると鈴木が続けて喋ってきた。

「どうして分かったのかって思ってるだろ。当たり前だろ。30年以上も親友やってて、俺がお前を間違えるわけがないじゃないか。悠二はなにか？俺が若返って目の前に現れたら、俺じゃないと思うのか？」

言われて思った。

確かに鈴木が鈴木であるならば、俺はきっと分かるだろう。

今なら、たとえゴキブリになったって分かると思う。

「ふっ！」

なんだか笑えてきた。

そうだよな。

そうなんだよな。

俺達は親友だったんだ。

何を悩む事があったのだろうか。

俺が言わなくても、これくらいわかっちゃうんだよ、鈴木なら。

「なんだか悩んでいたのがバカみたいだな。」

さっきまでの重い空気はもうなかった。

「ま、どうしてこんな事になったのか、話せないなら話さなくて良いが、とにかく、悠二が生きていて良かったよ。」

鈴木の目から少し涙が流れていたが、顔は笑顔だった。

その後、俺と鈴木、それにカエとメグミも含めて、色々な事を話した。

俺が西口悠二である事。

どういうわけだか、若返ってしまった事。

政府の秘密機関によって、若返った事について色々しらべられた事。

施設を出る条件として、定期検査と守秘義務がある事。

こんな事が公になると、世間が大騒ぎになるので、西口悠二は死んだ事になり、高橋光一として生きている事。

そして、ゴキブリの力、生命力の力の事を。

「どうしてそんな力が身についたんだろうな？」

鈴木の軽い気持ちの質問だった。

こんな突拍子もない話を、疑っている様子は全く無い。

だから俺は普通に、思ったままにこたえる。

「南極に、永久凍土の溶けた場所を見に行ったんだ。そしたらそこにゴキブリがいてさ。そこでゴキブリと接触したのが、何かの原因かもな。」

この能力を得た人間、俺とメグミとカエの共通点。

一つは、永久凍土の溶けたところに行った事。

そして、少なからずその虫に好意をもっていたり、助けたりした事。

言いかえれば、その虫と接触した事、とも言えるかもしれない。

後、俺の場合には、何やら未知のウィルスが見つかったとかって話もある。

これらから、永久凍土内に閉じ込められていた何かが、俺達に感染し、それが原因で、何かしらの力がついたと考えるのが、一番分かりやすそうだ。

虫が特定されるのは、もちろん接触があった為。

「南極には、やっぱり行ったのか？」

鈴木がなにやら少し驚いていた。

「ああ。正直に話すと、マジで死んでやろうと南極に行ったんだ。永久凍土の溶けた場所が見たかったってのもあるがな。」

俺の言葉を聞いて、鈴木が何やら考え込んでいた。

もしかして何か知っているのだろうか。

そう言えば、鈴木は動植物や微生物なんかの研究をしている。

と言っても、どちらかというと、健康を補助する菌だとか、美容に良い成分を持つ動植物だとかを研究しているので、ウィルスなんかは関係の無い分野ではある。

という事は、なにか別の話題なのだろう。

「俺が動植物なんかの研究をしているのは知ってるよな。」

「ああ、なんど聞いても、言ってる事はわからんがな。」

こうやって普通に話すのは心地いい。

正直、話の内容なんて、どうでも良いと思った。

「地上の動植物の研究ってのは、世界ではかなり進んでいてな。調べられる場所ってのは、ほぼ誰かが調べているわけだ。」

「ほうほう。」

「で、今、俺達の世界で注目されているのが、永久凍土の溶けた地域なんだ。」

なるほど。

もしかしたら鈴木も行ったとか、同じ時期に南極にいたとか、そういう話かな。

「何か未知のウィルスでも見つかったか？」

「よく分かったな。」

俺の何気ない一言に、鈴木が少し驚いた顔をした。

鈴木という言葉、そしてその表情を見て、俺も冷静でいられなくなった。

「もしかして、すぐに死滅して消えてしまうとか、そんなウィルスなのか？」

冷静な俺が見れば、かなり白々しい演技に見えたかもしれないくらい、俺は動揺していたかもしれない。

「そうだ。もしかして、悠二も何か知ってるんだな？」

「ああ、俺を調べていた施設の山田が、そんな事を言っていた。」

「なるほどな。」

鈴木は少し笑っていた。

この笑顔はどういう意味だろうか。

この時の鈴木は、俺には何かに恐怖しているように見えた。

新たな出発

皐月賞のあった日、ヴィクトワールピサが勝った日、俺は全てを鈴木に話した。そして鈴木は、その全てを、なんの疑いもなく受け入れてくれた。ウィルスによって力を得たかもしれない事を話したら、実は鈴木も、同じものを研究していた事が分かった。

これは社外秘の機密事項なので、俺達4人だけの秘密だ。何か分かっている事が有るのかと聞いたら、まだ何も分かっていないとの事。ただ、もしかしたら近いうちに、何かが分かるかもしれないと言っていた。そんな事より、俺は今までの殻を打ち破り、もう一度人生をやり直す覚悟をしていた。万屋イフは解散する。

そして再び、俺は俳優でっぺんを目指すのだ。早速、一般人でも受けられるオーディションを探したり、大手プロダクションを当たって行った。流石に、なんの実績もない俺を、大手プロダクションが受け入れてくれるわけがない。それでも俺は諦めず、自分を売り込む毎日を繰り返していた。

そんなある日、俺の携帯に、一本の電話がかかってきた。驚くことに、それは最大手芸能プロダクションの社長からの電話だった。その事務所は、タレント、俳優、歌手など、総勢1000人を超える芸能人を抱えている。そしてその社長と言えば、全てのテレビ局関係者が頭の上がない人だ。会って話がしたいと言う事だったので、俺は迷わずオッケーした。何かが大きく変われば、こんなものなのかなと、少し拍子抜けした。約束どおり、指定の場所で待っていると、高級車が俺の前に止まった。そして、事務所のマネージャーだろうか、運転手が俺に乗るように言ってきた。俺は少し躊躇したが、それを見せないように意識して乗り込んだ。その行為に特に意味はなかった。

ただ、弱みを見せたくないのかな、そう思った。車に乗り込んでから20分、銀座にある建物の駐車場へと入って行った。この場所は知っている。最大手芸能プロダクション銀座興業の、銀座興業ビルだ。若返る前にも、何度かオーディションを受けにきた事がある。此処で行われるオーディションで受かるのは、最初から銀座興業のタレントに決まっている。それでも俺達弱小プロダクションの俳優は、引立て役として受けに来なければならなかった。そして交通費程度のギャラを貰える事もあるが、何も貰えない事の方が普通である。というわけで、俺は一応知っている場所ってわけだ。

ただ、それでも俺は高橋光一であるわけだから、知っていてはまずい。俺は、車を運転していた男につれられて、ビルの中を歩いて行った。ついたところは、社長室だった。流石に大手だ。社長室もあるのだなと思った。俺がいた事務所は、俳優タレント合わせて20人程度だったし、社長もマネージャーも、みんな同じ部屋で仕事をしていた。案内してくれた男が、社長室のドアをノックした。すると中から、ドアが開けられた。中から出てきたのは、30歳前後であろうが、とても綺麗な女性だった。「お待ちしてました。高橋さんですね。どうぞ。」

少し笑顔で、しかしかなり冷めた感じで、俺へ入室を促した。

「失礼します。」

俺は当然の挨拶をして、社長室へと足を踏み入れた。

中では、絵にかいたような机の向こうに、絵にかいたような椅子に座って社長がこちらを見ていた。

「よく来てくれた。そちらに座ってください。」

思ったより気さくに、俺にソファに座るように言ってきた。

「はい。」

俺はそれに従い、ソファにどっしりと座った。

若返る前の俺だったら、きっとこんな座り方はできなかつただろうな。

遠慮がちに座ったに違いない。

でも、今の俺には失う物も無いし、俺は自分の容姿と演技に自信がある。

こんな事で引け目を感じても仕方がないと思えた。

「話とはなんでしょうか。」

何も言わずに黙ってこちらを見ている社長に、俺はこちらから話しかけていた。

歳で言えばそんなに変わらないからか、不思議と言葉が出てきた。

「君、若いのに度胸があるね。いや、若いからかな？」

社長は少し笑顔だった。

「そうですね。失うものも何もないし、死にはしませんからね。」

そうなんだ。

此処でこの社長を怒らせようと、何か失敗しようと、俺は今動き出したばかりで、失う物はなにもないから。

それに、金には困らないし、生きていくならなんとでもなる。

そう言えばテレビの番組で、ベーシックインカムという、最低生活保障制度なるものが提案されていたが、あれの利点はこういう事かもしれないと思った。

「そうか。ではこういう場合はどうかな？」

社長はそう言って、指を鳴らすと、社長室の奥にあったドアから、ガラの悪い男が3人出てきた。

体も大きく、殴り合いのけんかでもしたら、普通の人なら殺されそうだ。

腕に見える入れ墨も、偽物には見えなかった。

本物のヤクザが、こんなところにいるわけがないとは思ったが、逆にそうだろうと思う気持ちもあった。

その中の一人が、俺の胸倉を掴んできた。

そして俺を無理やり立ち上がらせた。

この社長は一体何がしたいのだろうか。

俺が恐れる顔でも見たいのだろうか。

それとも反撃する事を期待でもしているのだろうか。

俺は何気なく、鞆にひそませておいたクロGを、そいつの顔に張り付けてやった。

「うわぁ！！」

男は驚いて、胸倉から手を放し、必死に顔を払っていた。

払いのけられたGは、払われた勢いで、ソファの下に入っていった。

「胸倉つかむのが悪いんですよ。」

俺は少しおかしくなった。

こんなごつい大男でも、Gはやっぱり嫌なのだなと。

「君はいつもそんなものを持ち歩いているのかね。」

社長が少し驚いた顔をしていた。

「いえ、偶々です。それにさっきのはおもちゃですよ。よくできてるでしょ。」

そう言って俺はソファの下からクロGをつかみとって、チラッと見せて鞆にしまった。

「ま、度胸はあるみたいだな。」

本当は俺に度胸なんてない。

ただ、それなりの力があるから、ビビらずにいられただけだ。

「演技の方は、先日のオーディションでみさせてもらった。」

社長の口ぶりだと、どうやら俺を認めてくれているような感じだ。

「演技と顔には自信があります。俺に足りないのは・・・もうありません。」

そうだ。

俺は生まれかわるのだ。

他人の事なんて、知った事ではない。

とにかく俺が幸せになる為に、なんでもやってやる。

「そっか。」

社長は満足そうだった。

「で、どうするんですか。俺は合格なんですか？」

俺はそろそろ結論が欲しかった。

でも社長は、まだ何か話したりないようで、少し考えた後、再び話し始めた。

「君は、西口悠二って俳優を知っているかな？」

俺は驚いた。

まさか俺の本当の名前が出てくるとは思わなかった。

だけど、業界の人なら知っていても不思議ではない。

ただ、それがこの社長の口から出てくる事に驚いた。

「いえ、知りません。」

俺はしらばっくれた。

以前の俺なら、きっと嘘はつけなかつたらう。

あやふやな返事を返したに違いない。

でも、嘘でもなんでもやってやる、そう思っていた俺は、あえて嘘をつく選択肢を選んだ。

「そうか。実はね、君と会いたかった理由の一番は、その俳優に似ていたからなんだよ。」

「そうなんですか。」

まさか。

どういう料簡なのだろうか。

俺には、社長がそんな事を言う真意がわからなかった。

「ああ。実はその俳優は最近亡くなったのだが、正直とても残念だったよ。この俳優は、きっと出てくる、そう思っていたからね。」

この社長が、俺の事をそんな目で見ていたのか。

俺は驚いたが、それを表情に出さないように努めた。

「私は彼のファンだったのかもしれないな。」

社長は天井を眺めながら話し続けた。

俺は、認められていたのか。

では何故、俺は売れなかったのだろうか。

この人の力だったら、俺を売り出すくらい簡単だったはずだ。

「でも残念ながら、別の事務所の俳優だったからね。」

なるほど。

別の事務所の俳優だったから。

でも、この人に認められた俺なら、監督やプロデューサーに認められてもおかしくないはずなのに。

「ま、償いと言ったらおかしいが、君、我が事務所に入らないか。」

償い？

どういう事だろう。

「償って、どういう事ですか。」

俺がそう聞いた時、部屋の奥のドアから再び男が一人出てきた。

その人物を見て、俺はビックリした。

浜崎組幹部の、吉沢さんだった。

運命の番組

社長室の奥から、まさかの人物が出てきた。
全国最大の暴力団、浜崎組の幹部である吉沢さん。
俺の顔を見た瞬間、吉沢さんも驚いていた。
話を聞くと、浜崎組と銀座興業のつながりは、40年以上になるらしい。
そして現在は吉沢さんが、主に銀座興業とやり取りしているという事だった。
正直この程度の事なら、俺はこの吉沢さんを交えた話に、さほど驚きはしなかっただろう。
だけど俺を驚かせたのは、銀座興業社長が西口悠二のファンで、西口悠二である俺が、自分の事務所以外で売れるのが許せなかったという話だ。
だから、自らの力はもちろん、暴力団浜崎組の力も借りて、俺に仕事がまわらないように工作していたらしい。
これを聞いた時、心の中は流石に冷静ではいられなくなっていた。
だけど、吉沢さんが軽い感じで話しかけてきてくれたので、俺はなんとか余裕を持って話す事ができた。
それにしても、俺がもし南極であのまま死んでいたら、こんな事も知らずに人生終わっていたのか。
本当に世の中腐っているんだなと、改めて思った。
俺は20年ほど前の事を思い出していた。
そう言えば、俺の所属事務所の社長が、俺に移籍する気はないかとか、聞いてきた事があった。
当然俺は、お世話になった事務所を出るなんて選択肢は無かったので、全く無いとこたえたはずだ。
もしかしたらあの時、この人が俺を引き抜こうとしていたのかもしれない、そう思った。
ただ、今更そんな事を振り返っても仕方がない。
俺は迷わず、社長の誘いに「お願いします。」とこたえた。
こうして俺は、いとも簡単に、最大手芸能プロダクション、銀座興業に所属する事となった。

仕事はいきなり入ってきた。
流石に最大手芸能プロダクション、簡単に仕事を持ってくる。
最初の仕事は、テレビCMのメインとしてだった。
先に聞かされた報酬額が、以前の俺の数カ月分のギャラである事に、俺はあきれるしかなかった。
格差社会とか言われているけれど、格差がありすぎると思った。
それでも俺は、俺の全てをかけて仕事に打ち込んだ。
可愛い女子高生二人も、応援してくれている。
カエとメグミとは未だに一緒に暮らしていたが、一緒に食事する機会も徐々に無くなっていた。
月九ドラマのゲスト出演として役をもらった。
クイズ番組の回答者としてテレビにも出た。
そして7月からのドラマの主役まで決まっていた。
そんなある日、やはりと言うべきか、当然と言うべきか、あの山田から電話が入った。
内容は、当然ながら、目立つなという事だった。
しかし俺は人権を主張し、俺を知る人物もいないから大丈夫だと言って、その要求を突っぱねた。
言ってみれば案外うまくいくもので、あの山田もしぶしぶ納得してくれたようだった。
「どうなっても知らんぞ！」
最後は怒鳴られて電話を切られたが。
気分がスッキリしたその日は、7月から出演するドラマの番宣の為、バラエティー番組に出ていた。
番組の宣伝を格好良く決めて、俺は満足していた。
まだまだ俺の事を知る人は少ないが、出演したものはそれなりに好評で、司会をしている人気お笑いタ

レントも俺を盛り上げてくれた。

後は、ゲスト出演者が座る席に座って、色々な人の芸を見ていた。

時々コメントを求められ、思った事をぶっちゃけて言った。

芸人はチラッと嫌な顔をしていたが、番組としては盛り上がっていた。

そんな番組が終盤にきた時だった。

新人さんいらっしゃいのコーナーで、特に芸人でもなさそうな一人の少年が立っていた。

何かをやる雰囲気は全く無かったので、逆に俺の気を引いた。

「ではお願いしまっそー！」

司会者のフリを受け、少年は人差し指を立てた。

特に何も起こらないが、俺はなんだか嫌な予感がした。

少年は「おいで！」と言いつた。

特に何も起こらない、そう思った瞬間、沢山のコバエが、少年の指に止まった。

その後少年は、手を振ったり、走ったり、派手に動いてコバエを操っていた。

間違いない。

能力者だ。

俺がいて、メグミがいて、カエがいて。

身近にこれだけいるのだから、他にいても当然だ。

以前そんなにはいないだろうと思った事もあったが、温暖化が進んでいるのだから、今後人数は増える、そう感じた。

結局、この少年のやった事は、どんなトリックでやっているのかなんて言われて、真剣に考える人は少なかった。

色々な動物が人になつく、その程度に考える人も多いのだろう。

数日後には、この番組は問題無く、テレビで放送された。

そしてその日を境に、世界が大きく動く事になった。

そんな日にかかってきた一本の電話は、久しぶりに鈴木からだった。

ウィルスの正体

俺は久しぶりに鈴木と会っていた。

「あのウィルスについて、大変な事が分かった。とにかく会って話がしたい。」

そう電話で言われた。

仕事の合間に会う事になったので、話は車の中でする事にした。

俺が山手通り沿いに車を止めていると、窓ガラスをたたく音がした。

鈴木だった。

俺はドアを開け、鈴木を迎え入れた。

「久しぶり。」

「前に会ってから、1カ月ちょいか。」

そう言いながら車内に入ってくる鈴木は、少しやつれているように感じた。

「昨日のダービーは惜しかったな。」

俺はなんでもない話をした。

「そうだな。」

ドアを閉めながら話す鈴木の返事は、そっけないものだった。

どうやらゆっくりと世間話をするつもりはなさそうだ。

「で、会って話ってなんだ？」

俺もそんなに時間はなから、早々に話をきりだした。

「昨日の番組見たよ。」

鈴木の返事に、俺は拍子抜けした。

まさかそんな話をする為に、俺を呼び出したのだから。

だが、それも悪くない。

応援してもらえている事は嬉しい事だ。

「どうだ。俺も売れっこになるのは時間の問題かもしれんぞ。」

ちょっと調子に乗って話してみた。

だけど鈴木はあまり興味がないように返事を返してきた。

「頑張ってるな。」

「まあな。」

なんだかどうも、会話がうまくかみ合っていない気がした。

「でも、なんとく、悠二じゃない気がする。俺は前の悠二の方が好きだったな。」

それでも鈴木は、話を続けていた。

本当の事を言っているが、心は別のところにある、そんな感じだ。

「そっか。俺も、やはり自分を貫いていた方が、俺らしかった気がするよ。」

売れてきている事を肯定してもらいたいはずなのに、否定された事に特に反論する気にもなれなかった

。

「で、昨日の番組で、あのハエを自由に操る少年、あれはどうなんだ？」

鈴木の目に力が戻っていた。

どうやら話の本題は、此処にあったようだ。

「あれは、俺と同じように、能力者だと思う。確信は持てないし、まだまだ初級の能力者だとは思
うが。」

能力は、虫と喋り、虫を自由に操る以外に、虫にあった能力を得る事ができる。

あの番組の少年は、それを使えるような感じは無かった。

まだ気が付いていないと言う事だ。

ハエの能力と言われて、何かは想像がつかないが、きっと何かしらあるのだ。

「あのウィルスな。ウィルスと言うよりは、微生物の出す分泌物と言った方がいいものだった。」
鈴木が真剣な顔で話し始めた。

「この微生物は、永久凍土の中に閉じ込められ、ずっと出てくるべきでは無かった生物だったよ。」
鈴木を見ていると、何か恐ろしい事が起ころうとしているように見える。

確かに、こんな能力者が沢山いたら、大変な事になるだろう。

だけど、能力者が3人集まっても、マフィアのボスひとり捕まえる事が出来なかったわけだし、今後大勢出てきたとしても、困るのはきっと能力者ではないだろうか。

能力者の力を恐れて、普通の人々がそれを淘汰する。

むしろ危険なのは能力者。

魔女狩りが行われる事が最大の懸念に思えた。

「この微生物の力、悠二は、対象が虫だけだと思うか？」

鈴木のこの一言、俺は鈴木が恐れている事を悟った。

そうか、もしこの力が人に対して使えたら、大変な事になるかもしれない。

「人に対して使って、この世の中改革してみるか？」

鈴木という言葉に、俺は震えた。

確かに、俺は世界を、腐った世界を変えたいと思っていた。

そして、それができるかもしれない方法が、今日の前に提示された。

できるかもしれない。

俺は本気で悩んでいた。

そんな俺の目の前に、鈴木が資料を突き出してきた。

図解されており、一目でその意味が理解できた。

なるほど。

そういう事だったのか。

鈴木の資料を見て理解できた事はこうだ。

永久凍土に閉じ込められていた微生物は、永久凍土が溶ける事で、再び活動を開始した。

名前は仮に、「ミジンコデビル」と名付けられていた。

形は似ているが、大きさは、実際のミジンコとは比べ物にならないくらい小さく、バッタのような足がついていた。

しかし、こんな形をしていたのなら、俺の体を調べた時に、必ず発見されていただろう。

資料に書かれた絵には、続きがあった。

どうやらミジンコデビルは、ウィルスのような何かを分泌し、それが俺の体内に有ったようだ。

まず、ミジンコデビルは、何かに寄生しないと生きてはいけない。

これは、実験によって確認できているようだ。

俺と会ってから、ゴキブリや蜘蛛に寄生させた旨書かれている。

だから、永久凍土の中から出ても、すぐに死んでしまう。

ただし、氷の中で仮死状態を続ければ、問題はない。

ミジンコデビルは、永久凍土から出ると同時に、寄生先を探す。

寄生は主に小型の虫。

しかし実験で、ネズミにも寄生させる事ができたと書かれていた。

ネズミに寄生させる事ができるという事は、人間に寄生させる事も可能だろう。

ただし、寄生させるのは難しく、自然の中で寄生するのは、小型の虫がほとんどで、人間に寄生する事はまずあり得ないとの事だった。

寄生したミジンコデビルは、その体の中で、体内に、あるものを作り始める。

それが、俺の体の中から見つかった、ウィルスのようなものだ。

それを再び、別のゴキブリや、蜘蛛、ネズミに感染させてみたようだ。

すると、そのゴキブリや、蜘蛛、ネズミは、フェロモンのようなものを発するようになるとの事だ。

寄生させた生物によって、そのフェロモンのようなものの性質も違っていて、おそらくそれは、ミジンコデビルが寄生した生物によるものであると推測されていた。

ただし、此処で最も理解しておかなければならないのは、そのウィルスのようなものは、すぐに死滅してしまうって事だ。

ゴキブリや蜘蛛だと、フェロモンが出始めてすぐに死滅、ネズミで約1時間との事だった。

此処に、俺の検査状況を当てはめてみると、人間に感染したものは、1カ月ほど残ると判断できた。

推測として、人間との相性がいいウィルスのようなものであると書かれている。

人間で実験はできないが、その1カ月で人間の体質が変化し、元の寄生先であった虫の好む、フェロモンを発する体になるかもしれないとの事。

又は、人間そのものが、その虫に近い生物に変化している事もあり得ると。

最後に、寒さに弱いゴキブリや蜂が、永久凍土が溶けたとはいえ、寒い場所で活動できていた事実に関しては、寄生昆虫ネジレバネと蜂の例を出して、ミジンコデビルに寄生されると、寒さへの耐性がつくのではと、能力に関係の無い事も書かれていた。

簡単にまとめると、これが資料に書かれている事の全てだが、とりあえずこれだけでは俺の全能力を説明はできない。

ゴキブリと喋ったり、命令したり、言う事を聞いたり理解できる。

でも、生命エネルギーに関しては、説明がつかないからだ。

体質変化が起きているから、それが原因かもしれないが、あまりにも無理がある。

まあ、世の中不思議がいっぱいって事だろうか。

それでも、人々に言う事を聞かせられるとなれば、いよいよ世界の変革は可能である。

独裁者、それも、誰も逆らう事のない独裁者になれるのだ。

どうするのが本当にいいのか。

俺はこの時、結論を出す事はできず、後日再び鈴木と会う約束をして別れた。

変わる世界

鈴木と話をしたあの日以降、というか、あの能力者がテレビに出演したあの時から、世界各国で能力者が公の場に出てきていた。

蚊、アブ、ハンミョウ、セミ、カブトムシ、蟻など、あつかえる虫は色々だ。

ただ、虫の種類がかぶる事は無かった。

勝手な憶測だが、一度虫が主と決めたら、浮気はしないって事だろう。

となると、一度誰かが人間の頂点に立ったら、他の人が、ミジンコデビルのウィルスのような分泌液に感染しても、人はその人には従わないと考えられる。

この力を利用して、世界を変革できる人は一人で、チャンスは一回きりって事になるわけだ。

たとえば俺が死んだら、Gはもう誰にも従わない、今までどおりに戻る事になるのだろう。

この永久凍土が溶けて起こっている事態は、長くて100年そこそこの、特別な時間なのかもしれない。

そんな時間を生きていて、俺は俳優なんてしていて良いのだろうか。

この能力を使って、変革するべきではないだろうか。

俺の気持ちは、ついこの前出した結論を捨て、再び元の俺へ戻る事を考えていた。

連日、テレビで能力者が紹介される。

もっとも能力者が多いのは、やはり寒い地域だ。

だけど、暑い地域に住む人々も多々いる。

寒いところに生息しない虫も多い。

鈴木と電話で話したが、これはきっと、ミジンコデビルが、寄生しなくても生きられるように耐性がついたか、又はその時間が長くなっている可能性があると考えられた。

小さな生き物ほど、進化するのは早い。

毎年違うインフルエンザウィルスが出てくるのはその為だ。

もしかしたらもう、ミジンコデビルに寄生された虫が、身の回りに沢山いるかもしれない。

ウィルスのような分泌物に感染した人が、すぐそばにいるのかもしれない。

そうなると、まず人には寄生しないとされるミジンコデビルが、奇跡のような確率の中で、人に寄生する事もあり得る。

結論を出す時間は、もうあまり無いように思えた。

そんな事を考えていたある日の事だった。

とうとう恐れていた事が起こった。

ヨーロッパのある国で、能力者と政府による武力抗争が勃発したのだ。

能力者を得た人々が差別される事により、能力者が人権を主張したのが始まりだった。

すぐにそれはエスカレートし、能力者は権力者を脅迫したり、虫の力によって、なんとかしようとする動き始める。

当然、能力を持たない権力者は、能力者を恐れた。

武力抗争が勃発してから数日で、能力者が射殺されたり、軍隊や警察に捕らえられ、すぐに死刑される国も出てきた。

日本でも、それは例外ではない。

死刑とまではいかないが、能力者を集めて管理下に置き、事実上拘束するようになっていた。

もちろん、名目上は、保護という事になってはいるが、本音はきっと違うだろう。

俺も自分の身を心配しなければならなくなってきた。

権力者の中に能力者がいて、他の能力者をなんとかしようと考えたとしたら。

俺がやったように、虫を使って盗聴したり、搜索したりするだろう。

下手に話したり、能力を使えば、俺が能力者だとばれてしまう可能性もある。

俺は使いたくなかったが、生命力を使って、常に周りにいる生物を監視して、毎日を過ごす事にした。あの能力者がテレビで放送されて約1カ月、世界は収束不可能と思えるくらいの混乱の中にあった。それでも、日本は比較的平穏だった。

民度が高いようで、人々はなんとか規律を守っていた。

政府も何とか機能を維持している。

だから俺も、一応普通の生活を送っていたし、7月からのドラマの撮影も、順調に行われていた。

そんな中、俺はあの日約束したとおり、再び鈴木と会っていた。

「大変な事になっているな。」

日本は比較的平穏だったからか、混乱を肌で感じる事はない。

だから普通に話す事ができた。

それに実は、重大決心を伝えるつもりで来ていたので、それが逆に俺を開き直らせていた。

「そうだな。もう一刻の猶予もないところまできているな。」

鈴木言葉。

これは、今日結論を出さなければならないという事だ。

俺達が何かするのか、それとも能力は封印し、今までどおり生きるのか。

人にミジンコデビルが寄生しない事を祈って・・・

「俺、決めたよ。」

俺は鈴木に決心を告げるべく話しだした。

「このままだと、いずれミジンコデビルが人に寄生して、誰かが人の絶対的支配者となるだろう。だから、誰かが先になってしまう方が良いと思うんだ。」

「うん、俺もそう思う。」

俺の意見に、此処までは鈴木も同じ考えのようだ。

だけど、きっと此処から先は、違う考えになるはずだ。

「俺を、人の主にできないか？そして、俺が死ぬことで、今までどおりの世界が維持できるはずだ。」

そう、俺は結局、変革したかったこの世界を、今のままにしておくのが良いという考えに至ったのだ。

確かに、俺はこんな世界が良いとは思わない。

だけど、理想の世界を作ったとして、支配者が死んだ後はどうなるのだろうか。

全てがなくなり、人々が経験してきた事も捨て去り、また最初からの作り直しだ。

だが、今の世界を維持し、少しずつ改革する事で、人は学び、いつか人間の手で、本当に良い世界が作れるのではないだろうか。

今此処でリセットしてしまったら、今までの歴史が、全て無駄になるかもしれない。

俺の結論は、そういう事だった。

だが当然、鈴木はこんな提案には反対した。

「ばかな。悠二が死んだら意味がないだろう。二人で良い世界を作れば良いじゃないか。俺も前から思っていたんだ。あれだけ頑張っていた悠二が報われない世界なんて、良い奴ほど損をする世界なんて、間違っている、壊してしまいたいと。」

鈴木。

昔も今も、俺の事を考えていてくれるんだな。

俺が報われない世界だったから、壊してしまいたいと言うのか。

つくづく良い奴だなと思った。

だけど、コレを話せば、きっと賛成してくれるはずだ。

俺は再び、鈴木に話し始めた。

「俺の能力は、ゴキブリのコントロール以外に、生命力を使って、色々な事ができるんだ。傷を治したり、生き物の存在を感知したり、小さな生き物だったらコントロールもできる。」

「知ってるよ。そう前に言っていたじゃないか。」

鈴木はそう言ったが俺はそのまま話しを続けた。

「それは、その能力は、実は俺自信の命の力を使って、行える事だったんだよ。」

「どういう事だ？まさか能力を使うたびに、自分の命が削られるって事か？」

鈴木という言葉は、当たりだ。

でもそれだけじゃない。

「それで、もう俺の命は、それほど長くはない。」

「ちょっと待て。そんなに元気なのに、信じられないぞ。それに何故そんな事がわかるんだ？」
分かってしまうんよ。

命にかかわる事なら。

俺の中の生命力は、長くてももう1年ももたない事が。

俺は少し黙っていたが、どうやら鈴木も、俺の意思を分かってくれたようだった。

沈黙の中にも、お互いの気持ちは通じていた。

心地よい沈黙だった。

その沈黙を破ったのは、鈴木だった。

「だけど、残りが少ないからこそ、最後はお前に幸せになってもらいたいんだよ。」

気持ちは伝わっていたはずだが、意見はどうやら違っていた。

「いや、こんな力で変革して、本当の幸せはつかめないさ。」

俺はなんとか鈴木を説得しようとした。

しかし鈴木の次の言葉で、全てがもう既に動き始めている事を悟った。

「娘に、ミジンコデビルを寄生させた。そして俺の体の中には、既に・・・」
言葉が出なかった。

死

鈴木の体からは、既にフェロモンのようなものが出ているとの事だった。

ただ、人々が従属するようになるのは、これから徐々にという話だ。

鈴木との話し合いでの結論としては、能力が上手く機能するならば、世界の変革ではなく、一つずつ改革していこうという事で決着がついた。

駄目な法律を改正したり、金持ちが得をするようなシステムを変えたり、それはもう地味に。

だけど、ねじれ国会とかで決まらない話しあいをしているよりも、いくらもマシだ。

鈴木が、誰もが従う総理大臣になれば、そして世界の大統領になれば、世界は一つに、そして未来へ繋がる何かが残せるかもしれない。

そんな、全世界、全人類の事を考えている俺の目の前では、始まったばかりの月九ドラマが放送されている。

俺の出ているドラマだ。

最近忙しいので、リアルタイムではなく、録画だ。

一緒に、カエとメグミも観ている。

「凄いね！光一さん格好良い！」

「ねwそれにやっぱり、演技が大人っぽいのね。」

「そらそうだな。見た目は若くても、俺は爺さん一歩手前だからな。」

こんな会話をしている時も、俺は警戒している。

俺達の会話が誰かの能力によって聞かれたら、もしかしたら俺達も、保護と言う名で監禁される事になりかねない。

それでも、この三人でいる時間は幸せだ。

俺を施設から出してくれた山田にも、少しは感謝しなければならないのかもな。

吉沢さんはどうしているだろうか。

腐った世の中、腐った社会、その中にある暴力団。

そんな中にも、意外と良い人がいる事を知って、俺は何か考え方が変わった気がする。

山瀬さんは、相変わらず頑張っているのだろうか。

最近はまだ連絡もとっていない。

山瀬さんには、嘆くだけではなくて、行動する事を教えてもらった。

大した事はできなかったけれど。

そして鈴木。

どんな暗闇でも、光はあるのだなあ。

これだけで、俺の人生は、きっと幸せだったのかもしれない。

色々考えていたら、いつの間にかドラマは終わっていた。

二人の女子高生は、ソファに座ったまま、眠っていた。

このドラマも、おそらくもう何度も見ていたのだろう。

時間も遅いし、寝てしまって当然か。

俺はタオルケットを二人にかけてやった。

「さて、俺も寝るか。」

俺は誰に言うともなく独り言をいって、再生し続けていたDVDのリモコンの、ストップボタンを押した。

再生が終わり、表示はテレビに戻り、画面にはニュースキャスターが映し出された。

最近、報道規制なのかもしれないが、能力者のニュースは少なくなっていた。

「道路に倒れていた男性は、すぐに病院に運ばれましたが、意識不明の重体です。」

どうやら、何か事件があったようだ。

こんなニュースは、毎日どこかのチャンネルで放送されている。

珍しくもない話だ。

俺はテレビの電源を落とそうとした。

しかし、その後のキャスターの言葉と映像に、俺は呆然となった。

「被害者は、所持していた免許証から、鈴木豊さん54歳だという事です。」

ニュースキャスターが告げるその名前は、まさしく俺の親友の名前であり、映された免許証の写真は、確実に本人である事を告げていた。

気がついたら、俺は車を出して、夜の道を突っ走っていた。

チラッとだが、搬送された病院の名前がテレビに映されていた。

おそらくは、鈴木の実家が一番近い病院だ。

法定速度も無視して、とにかく俺は病院へと車を走らせた。

遅かった。

間に合わなかった。

俺が病院についた時には、既に鈴木は死んでいた。

死んでさえいなければ、俺の力でなんとかできたかもしれない。

でも、流石に死んでしまえば、俺の力でも、どうする事もできなかった。

鈴木の家族だろうか。

病院の廊下で泣いていた。

俺も泣きたかったが、泣いている家族であろう人達を見ていると、泣くことができなかった。

俺は一人、ロビーの方まで歩いていった。

壁にある時計は、AM5時を回ったところだった。

今日も仕事があるのだけれど、もうどうでも良いと思った。

俺の唯一の親友、鈴木はもう、この世にはいないのだ。

俺は力なく、ロビーの椅子に腰かけた。

全ての力が抜けた。

そしたら、ようやく涙がでてきた。

「なんだよこれ・・・」

理不尽な世界は、無慈悲な神は、どれだけ俺の事が嫌いなのだろうか。

そんなにもこんな腐った世の中が好きなのか。

俺の意識はそこで潰れた。

そのまま椅子から落ちて、力なく床に倒れた。

夢再び

気がつく、俺は病院のベッドの上で寝ていた。

腕には点滴用の管が繋がっていた。

鈴木は死は夢だったかと思いたかったが、寝ていた病院が、鈴木が搬送された病院だった事から、夢では無かったのだと悟った。

医者に、もう少し寝て行くように言われたが、俺は断って病室から出た。

病院で寝ている場合ではない。

鈴木は誰かに殺されたのだ。

拳銃で撃たれたと言っていた。

俺はこの犯人を見つけ出し・・・

どうするつもりだ？

仇を撃つに決まっている。

俺は早足で、病院の廊下を歩いた。

すると俺が寝ていた二つとなりの病室から、大きな声が聞こえてきた。

ドアが開いていたので、俺はなんとなく覗いてみた。

ベッドの上では、高校生くらいの男の子が暴れていた。

「大丈夫よ！記憶が無くても、お母さんがちゃんといるから。」

母親らしき人が、息子であろうベッドの上の少年に、必死に訴えかけていた。

どうやら、あの少年は記憶喪失のようだ。

なんとなく、俺は生命力を使って、彼を治せないか調べてみた。

駄目だな。

体の生命力は失われていないが、何故か心が完全に閉じている。

生きていても、生きる気力がないようだ。

なんだよ。

せっかく生きているのに、魂は生を拒むのか。

だったらその体、鈴木に・・・

そこまで思って涙がでそうになったが、自分も死のうとした人間だった事を思い出した。

「そっか。この少年も俺と同じか。」

他人の事は言えない、俺は失笑した。

車に戻ると、俺はとりあえず自宅マンションに向かった。

全てのGを総動員して、犯人を探す為だ。

山瀬さんや、吉沢さんにも協力してもらおう。

絶対に見つけてやる。

だが、気合とは裏腹に、少しめまいがする。

医者に寝て行けと言われてたくらいだし、さっきまで点滴を受けていた身だ。

やはりかなり疲れているようだ。

そこで思いだした。

先日鈴木と会った時、「疲れたらこれを打つと楽になるよ。単なる栄養剤みたなものだけどね。」なんて言って、鈴木が車の中に置いていったペン型の注射器の存在を。

鈴木の子会社は、健康食品、サプリメント、グッズを製造販売している会社だ。

だからこれが会社の製品であるならば、この疲れを癒す助けになるはずだ。

「鈴木は死んでも俺を助けてくれるのか。」

俺は信号待ちをしている間に、左腕に注射を打った。

それから1時間ほど運転していただろうか。

俺は意識がもうろうとしてきた。

鈴木から貰ったペン型注射器を打っても、疲れは一向にとれる気配は無かった。

もう運転もできないと思った俺は、車を止めて少し眠る事にした。

俺は適当なところに車を止めた。

すると、すぐに意識は無くなっていった。

夢を見ていた。

何処からか声が聞こえる。

「力になるよ。」

ありがとう。

「なんでも言ってね。」

でもどうして？

「それはね・・・」

ハッと目が覚めた。

なんだろうか、今の夢。

以前見た、あの時の夢に感覚が似ている。

南極に行った後、病院で目覚めた時に見た、あの夢だ。

あの時とは言葉も違うし、神もいなかったが・・・

俺は再びハッとした。

辺りは既に暗くなっていた。

ずいぶんと眠っていたらしい。

運転席の前のところに置いてあった携帯が、チカチカと着信アリを主張している。

携帯の着歴を見ると、銀座興業やらテレビ局やら、沢山の着信が入っていた。

何も言わず、全ての仕事をばっくれてしまった。

一応話しておくべきか。

俺は銀座興業マネージャーの携帯に電話を入れた。

マネージャーは怒っていたが、倒れて病院で寝ていたと言ったら、今度は逆に気遣ってくれた。

体調が悪いので、しばらく休めないかと言ったら、調整してみるとの事で、一旦電話を切った。

とりあえず、まずは自宅マンションに戻ろう。

着信に、メグミの名前もあったので、二人も心配しているに違いない。

ニュースで鈴木が死んだ事も、もしかしたら知ったかもしれない。

俺は早く戻らないといけないと思った。

体調はずいぶんと良くなっていた。

鈴木あの薬が効いてきたのだろう。

この分なら、後30分もあれば、自宅につくはずだ。

俺はアクセルを踏みこんだ。

ようやく自宅に帰ってきた。

実に24時間ぶりの帰宅だ。

二人には心配をかけてしまった。

きっと、俺に気を使って、元気づけようとしてくれるのだろう。

いや、もしかしたら、一緒に悲しんでくれるのかもしれない。

最高の親友を無くして、俺は一瞬我を忘れそうになったが、二人の存在が、まだ俺を、正常な俺に繋ぎとめてくれているのかもしれない。

早くふたりの顔が見たくなかった。

俺はエレベーターを降りると、ドアの前まで走っていった。

いや、走っている途中で気がついた。

俺の部屋のドアが、開け放たれたままだった。

俺はそのままの勢いで部屋に飛び込んだ。

中を見た俺は啞然とした。

部屋は争った後のように荒れていて、二人の姿はそこには無かった。

テーブルには、一枚の紙が置いてあった。

俺は慌ててそれを手に取った。

紙には、「戻ってくるように。山田。」それだけが書かれていた。

出陣

「戻ってこい」たったこれだけのメッセージだったが、俺は全てを理解した。
いや、勝手な推測だが、全ては山田の仕業だと思った。
二人を誘拐したのはもちろんだが、鈴木を殺したのも、きっと山田だ。
どうしてかはわからないが、俺が秘密を話した事が知られてしまったんだ。
だいたいそうだよな。
常に監視されている事は知っていた。
だから秘密を話す時は、車の中か、マンションの部屋で話してきた。
だけど、此処が安全だなんて、どうして思ったのだろうか。
車やマンションに盗聴器をつけられている可能性もあるじゃないか。
今更盗聴器を探しても仕方が無い。
既に鈴木は死んで、今大切な仲間である二人もさらわれてしまったのだ。
なめていた。
国の秘密機関とはいえ、そうそう大それた事はできないと思っていた。
だが、平気で人を一人殺し、今また二人を・・・
とりあえず俺は、二人がすぐに殺される事はないと判断して、まずは体調を整える事にした。
秘密を守る為だけなら、秘密を知る者を殺して、それだけで済む事だ。
なのに人質としてとらえて、俺を呼びだしている。
何か別の目的があるのだろう。
どういう状況が用意されているのか分からないが、とにかく体調を万全にする事だ。
鈴木が残した、ただの栄養剤だと言っていたアレで、少しは回復していたとしても、まだまだ万全とは言えない。
それにもうずっと食事もとっていない。
しっかり食事もとって、山田に会いに行く。
俺は荒れた部屋はそのままだ、冷蔵庫の中にある物を適当に胃袋に入れて、明日の決戦に向けて、ベッドに入った。

朝は、スッキリ起きる事ができた。
体調は十分に回復していた。
俺はゆっくりと朝食をとる。
今更焦っても仕方がない。
俺はやれる事をやって、二人を助けるだけだ。
鈴木のように死なせはしない。
食事を終わると、俺はいつものように、鏡の前で身だしなみを整える。
いつもと同じように、今日も出て行くのだ。
準備が終わった。
部屋の状況を指差し確認する。
普段は、電気、水道、ガス、戸締りと確認するが、戸締りは必要ないかなと思った。
となりの部屋へ移動した。
こっちは、沢山のGがいる部屋だ。
ドアをあけると、いつもの状態そのままだった。
流石にこっちには入らなかったようだ。
俺は一部のGを鞆に入れて、後のGに声をかけた。
「俺が死んだら、みんな此処から出て、自由に生きてくれ。今までありがとう。」

少し涙がでてきた。

Gにこんな事を言って泣けてくるのは、俺くらいだろうなと思うと、少し笑えてきた。

部屋を出てドアを閉めた。

なんとなくだが、もう此処には帰ってこれない気がした。

車に乗り込み、フッと息を吐いた。

少し緊張してきたので、落ち着かせる為だ。

なんだろうか、この感覚。

売れない俳優をしていた頃に、よく感じていた感覚だ。

この感覚、俺は嫌いじゃない。

最近テレビにもでていたし、ドラマにも出た。

しかし、こんな緊張を感じる事がなかった。

贅沢な話だが、売れない俳優をやっていた時の方が、面白かったのかもしれない。

エンジンをかけた。

昨日左腕に打った、ペン型の注射器が目に入った。

なんとなく鈴木が俺に話しかけてくるようで、俺はそれをポケットに入れた。

アクセルを踏んだ、車が動き出した。

山田のいる秘密機関は、マンションからさほど遠くはない。

車で行けば、ほんの数十分だ。

住宅街のど真ん中にあり、誰も秘密機関だとは思わない場所。

運転していたら、すぐに目的地についた。

すると従業員だろうか、すぐに車を駐車スペースへと誘導された。

今日来ることは分かっていたという事だろうか。

車を止めて降りると、男についてくるように言われた。

俺は男についてゆく。

目的の部屋につくまで、他に人と出会わなかった。

掃除のバイトもいなかった。

「此処です。」

案内してくれた男に、部屋に入るように促された。

俺は特にためらう事もなく、思いきってドアを開けた。

部屋の中には、ようやく来たかと言わんばかりの顔をした山田が、こちらを振り返った。

部屋を見渡した。

俺は驚いた。

部屋に、身動きが取れないようにされているメグミとカエがいる事は予想できたが、後二人男が立っていた。

山瀬さんと吉沢さんだった。

本物の舞台

カエとメグミを救出する為にやってきたこの場所で見たのは、山瀬さんと吉沢さんだった。

俺は驚いた。

まさか、どうしてこの二人がこの場所にいるのか、意味が分からなかった。

啞然としている俺に、山瀬さんが説明してくれた。

「すみませんね。高橋さん。あ、西口さんと言った方がいいですか。」

山瀬さんはいつもの笑顔だった。

「いったい・・・」

俺はまだ意味がわからなかった。

いや、分かりたくなかった。

「最初から、私たちはあなたを監視していたのですよ。」

山瀬さんの言葉に、俺は納得せざるを得なかった。

ああ、そうなのか。

どおりで、変だと思ったんだ。

どうして俺みたいな人間に、ヤクザが突然仕事を依頼してくるのか。

どうしてマフィアの捜索をする事になったのか。

どう考えても変じゃないか。

ただ害虫退治をしていただけの万屋に、こんな仕事がかかるなんて。

「そういう事です。あなたの事は全て、筒抜けだったのですよ。」

山田が嫌らしい笑顔で俺を見ていた。

やられた。

どうして俺は、山瀬さんを信じたのだろう。

どうしてヤクザにも良い人がいるなんて思ったのだろう。

全てを疑う事が、俺の座右の銘ではなかったのか。

俺は山瀬さんをにらんだ。

山瀬さんは、いつもの笑顔だった。

悪い事をしたなんて、微塵も感じないのか。

山田は、相変わらず嫌な顔をしている。

こいつは悪魔か何かだろうか。

吉沢さんは・・・

なんだろうか。

悪い事をしたとでも思っているのか。

少し下を見て、俺と目を合わさないようにしているように見えた。

「で、今日君を呼んだのは、アレを渡してもらおうと思ってね。」

突然話しかけられたが、山田の言っている意味が分からなかった。

「あれとは？」

感情そのままの意味で聞き返したが、山田は俺が隠していると思ったようだった。

「隠すとこの二人が死ぬ事になるぞ。鈴木が、お前に渡したと言っていたからな。」

そう言われても、俺はそんなに山田が欲しがる物を、鈴木から渡された覚えがない。

山田が顎を少し動かすと、山瀬さんと吉沢さんが、拳銃をメグミとカエに突きつけた。

「ちょっと待ってくれ。ちゃんと説明してくれないか。」

俺は慌てて説明を求めた。

「あれだよあれ。人を自由に操る事ができるウィルスの入った、ペン型の注射器、預かってるんだろ？」

」

「えっ？」

俺は、色々な意味で驚いた。

と同時に、おかしくなってきた。

そうか、あのペン型注射器は、そういう物だったのか。

それで山田は、俺を監視するなかでその存在を知り、個人的野望で、それを手に入れようとしているわけか。

鈴木を殺したのは、人々が鈴木に従属する前に殺さないと、これが効かなくなるもんな。

それにしても、鈴木は面白いものを残してくれたものだ。

流石に俺の親友だ。

「ああ、持ってきている。」

俺はそれをポケットから出して、目の前に突き出した。

山田は山瀬さんに、コレを取りにくるように顎で指示した。

「まずは人質を解放してくれ。」

山瀬さんが一歩踏み出したところで、俺はドラマでありがちな台詞を言った。

なんだか面白かった。

演技じゃなく、本気で言う時ってのは、こんな気持ちだったのだなと感動していた。

「駄目だ。それを確認してからだ。」

山田のセリフも、セオリーどおりで笑えた。

「しかたねえなあ。ほらよっ！」

俺はそのペン型注射器を、山田の方へと投げた。

山田は慌てて、それを取ろうとした。

落としそうになりながらも、なんとかつかみ取った。

「何をやる！大切なものを。これで世界を変えられるかもしれないのだぞ。」

山田は本気で怒っていた。

それにしても、山田もまた、この世界を変えたい人の一人なのだ。

みんな今が良くないと思っていながら、結局何も変わらなかったということか。

それは一体どういう事なのだろうと思った。

「おい！これ、既に中身がないぞ！」

そらそうだ。

それは昨日、俺が使用したからな。

「悪いが、それは俺が使わせてもらった。全ての人は、俺の指示に従うように、今世界は変わったのだ。」

俺は遊んでいた。

追い詰められたギリギリの場所で、俺は俳優としての大一番を演じていた。

後は、後は俺の勘が間違っていない事を祈るだけだ。

「なんだと。山瀬、吉沢、あいつを殺してしまえ！」

山田の指示に、二人はこちらに銃を向けた。

「違うだろ！俺の指示にしたがえ！お前ら、山田を殺れ！」

俺は二人に命令した。

そう、俺は全ての人の上に立つ王なのだ。

独裁者なのだ。

俺の支持は絶対なのだ。

すると二人は、銃を山田に向けた。

「すみません。彼の命令にはさからえません。」

山瀬さんが言った。

「そうやな。わしも体が勝手にうごくんじゃ。」

吉沢さんの演技は下手だった。

たとえこれが本当に、あのウィルスのような分泌液を感染させる注射だったとしても、1日でその効果はでない。

それは、実際鈴木が試して分かっている。

そしてそれ以前に、コレがそんなものである保証はない。

というか、可能性は限りなく低いだろう。

鈴木ならそういう事をする可能性も無いとは言えないが、鈴木は俺に、「栄養剤みたいなものだ。」と言ってこれを渡したのだ。

奴が俺に、こんな嘘をつくだろうか。

「みたいな物」ってのにはひっかかるが、99%栄養剤だ。

そして、山瀬さんと吉沢さん、この二人は、俺は信用できる人だと思った。

さっきは少し、自信を無くして疑っていたが、吉沢さんは、隠しきれない人だ。

麻雀でも、すぐに顔に出る人なんだ。

俺と視線を合わせない時点で、これは何かあるとわかる。

おそらく、言う事をきかないと家族が死ぬ事になるとか、脅されてやっているに違いない。

だから俺は、人を操作できるフリをして、二人に動いてもらったわけだ。

決着がついたかな。

俺は少し安心した。

だが、まだ全て終わってはいなかった。

「くそー！」

山田が叫んで、銃をメグミに向けた。

銃声が4発、同時に鳴り響いた。

終幕

同時に鳴り響いた、4つの銃声。

そのうち2つは、カエとメグミに命中した事が分かった。

油断した。

俺の後ろにも男がいたのを忘れていた。

俺は即座にGを放った。

これ以上の攻撃をさせない為だが、冷静にそう考えていたわけではない。

とにかく何かあれば、Gを放つと決めていただけた。

俺は急いでメグミの元へ駆け寄った。

「吉沢さん、カエをこっちに！」

俺は無我夢中だった。

とにかく、俺の全ての生命力を使ってでも、この二人を救おうと思った。

二人とも撃たれた場所が悪かったようで、心臓が止まっていた。

それでも俺は必死に助けようとした。

山瀬さんと吉沢さんの声が、遠くに聞こえていた。

意識はハッキリしないが、俺は正気に戻ってきた。

状況を確認すると、俺は山瀬さんの運転する車に乗っていた。

無我夢中だった時の行動は、ぼんやりとは覚えているが、つい先ほどの事なのに、夢のような気がする。

俺は必死に、カエとメグミを助けようと力を使った。

とにかく助かる事を願っていた。

サイレンの音が聞こえた。

誰かが救急車を呼んだようだ。

サイレンの音は一つではなかった。

パトカーのサイレンの音もあった。

吉沢さんが、俺に何か言って、去って行った。

救急隊員が部屋に入ってきた。

山瀬さんが俺の体をつかんで、カエとメグミから離していた。

救急隊員が、カエとメグミをつれていった。

俺の力では完全には治せなかったが、再び心臓も動いていたし、体内に残されていた銃弾も取りだした。

後は医者が、きっと助けてくれるだろう。

力が抜けた。

山瀬さんが俺に、一緒にくるように言っていた。

俺は何も考えず、それに従った。

「山瀬さん。」

ハッキリしない意識の中で、俺は車を運転する山瀬さんに話かけた。

「なんですか？」

バックミラーに映る山瀬さんの目は、優しかった。

「二人は、カエとメグミは、大丈夫ですか？」

「ええ、凄い能力ですね。あなたのおかげで、問題なさそうですよ。」

山瀬さんの言葉に、安心した。

もう俺の命は、今にも燃え尽きようとしていた。

明日の太陽を拝む事はできないだろう。
いや、もういつ死んでもおかしくない。
俺の生命力は、もうほとんど残っていないのだから。
車は信号待ちをしていた。
外から、人の話し声が聞こえてきた。
「人生やり直せるなら、何時がいい？」
「やっぱ高校生かなあ。気楽だし、青春だし・・・」
人生やり直したいか。
確かに、やり直す事ができたら、俺はやり直したいのかもしれない。
でも、俺は今、死にたくないと思っている。
死にたくないって事は、それは幸せな人生だったのではないだろうか。
「ホント、死にたくねえなあ～」
俺は涙がでてきた。
だけど、そう思える事が嬉しかった。
ふと、昨日病院で見た、記憶喪失の少年を思い出した。
あの少年は、既に死んでいる。
魂の抜けた、ただの器だ。
今日の前に、人生やり直したいと言っている男がいる。
できるかどうかわからないけれど、最後の力で、これくらいの気まぐれは、神様も許してくれるだろう。
。
若い体を持っているのに、死んでいる少年。
若い体になりたいと望んでいる、目の前の男。
俺は残る全ての生命力を使って願った。
この男の魂を、あの少年の体へと。
俺の掌から、男へ向けて、光が放たれた。
そして俺は、死んだ。

この地球上でおくる人生は、無限に続く命の中では、ほんの些細なちっぽけな時間だ。
そして、この地球上での些細な時間には、それぞれの人が、それぞれの世界を持っている。
同じ時間軸の中で、人の数だけ、それぞれの世界が存在する。
人はこれを、パラレルワールドと呼ぶのだろうか。
俺の世界では、俺を中心に全てが動いている。
そして、あなたの世界では、あなたを中心に世界が廻っている。
だから、俺が強く望めば、俺の世界で起こる事は俺の望みのままとなるのだ。
あなたが強く信じれば、あなたの世界はあなたにこたえてくれるだろう。
そうやって存在する無数の世界は、お互いに干渉しあっている。
たとえば俺の世界で、あなたが死ぬ事が必要だとしたら、あなたの世界でも、誰かの世界でも、あなたが死ぬという力が働く。
でも、誰かの世界で、それが都合の悪い出来事となるなら、あなたが死なないという力が働く。
きっと鈴木が、俺は死んでいないと思ってくれていたのだろう。
俺が死ぬと、鈴木の世界では、何かまずい事があったのだろう。
だから俺は、生かされたのだ。
もしかしたら、鈴木の世界では、「自分は大きな発見をするが、世に出る事なく死ぬ」という、シナリオがあったのかもしれない。
その為に、俺はこんな能力を持って、死の淵から帰ってきたのかもしれない。
この地球での人生は、人の思いで作られているのだ。

俺が腐った世界、腐った人々と思っていたから、俺の世界ではそうあらなければならなかったのだ。俺の人生がこんな結末を迎えたのは、全て俺が思いこんだ事で、俺の責任だったのだ。

俺がもし、この世の中は最高だと思っていたら。

俺がもし、人々は全て優しいと思っていたら。

俺がもし、必ず俳優として成功すると、心のそこから思えていたら。

きっと、そうになっていたのだろう。

ただ、今更気がついても遅いという事か。

人生は、俺の命の中では、ほんの些細な時間。

この先、別の星で、別の人生を歩むのか、それともまた、この地球で人生を歩むのか。それはわからない。

ただ、今回の俺の人生は終わった。

次の人生を始める時は、きっとまた、全てを忘れたところから、始める事になるのだろう。だから今、俺は言うておく。

今あなたが送っている人生、あなたの生きている世界は、あなたを中心に動いている。あなたが本気で信じれば、それは必ずそうなる。

自分の存在する世界は、実はじぶんが勝手に決めつた世界で、実は思いどおりに動くはずなのだ。だけど固定観念、概念があるから、思いどおりにはいかない。

常識で考えては駄目だ。

固定観念を打ち破った時こそ、世界はきっとあなたにこたえてくれるだろう。

俺からあなたに伝えらる事は、これで終わりかな。

おっとそうそう、一応説明しておきたい事があった。

ゴキブリが思いのまま動いた事については、一応の説明がついていたが、生命力についての力については、何故そんな力が使えたのか最後まで分からなかった。

でも今なら説明がつく。

俺の世界は、全てが俺の希望によってつくられているわけで。

ゴキブリが思いのままになるなら、こんな力が使えてもおかしくない、俺がどこかで思っていたから、こんな力が使えるようになったわけだ。

理屈ではない。

俺の生きる世界は、俺の世界である、ただそれだけだったのだ。

それでは、俺はそろそろ次のステージに向かう事にする。

「もし」また何処かで会う事があつたら、俺にこの事を伝えてほしい。

今度は楽しい事ばかりの人生をおくりたいから。

「君の世界は、君を中心に動いているのだから、願いは必ず叶えられる。前向きに生きろ！」とね。

「もし」じゃない。「きっと」・・・

著者より

最後まで読んでくださって、ありがとうございました。

2007年に書いてたものの続きを、2011年に一気に書き上げたものですが、その割には上手くまとまったと勝手に思っています。

最初は、「能力の使える冴えないシティーハンター」みたいなのをイメージして書き始めました。

だから、色々な話をずっと続けるつもりだったのですが、期間があいてしまった事と、書いていて飽きてきた事から、しめる事にしました。

テーマはもちろん「イフ」。

「もしも」って事、考えますよね。

これには二つの意味があります。

後ろ向きな「もし」と、前向きな「もし」です。

私も含めて、過去を振り返って、もしもって思う人は多いと思います。

だけど、やっぱり前向きが良いよねってのが、一応のテーマかな。

もしも歌手になれたら、もしもプロ野球選手になれたら。

夢をかなえる為の力となる「もし」がいい。

その中で、風刺も書いていたりするんですけどね。（笑）

後は、嫌われ者の虫も、命があるって事とか、温暖化の問題とかw

それでは、また別の作品も、読んでいただけると幸いです。

2007年～2011年 秋華

イフ

<http://p.booklog.jp/book/48927>

著者：秋華

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kitaneko33/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48927>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48927>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.